白隱禪師
參禪要訣

遠羅天釜

268
226

釋宗演師序
日置默仙師序
來馬琢道師編
貳千部限特賣

四版出來

禪宗聖典

製本竪五寸一分橫三寸六分
舶來上等紙全文ふりかな
一千二百ページ

極上特製金一圓三十錢（極上特製々本金襴表裝三本金）
特製金一圓十錢（特製々本黒色總革三本金）
並製金八十錢（並製々本クロース製金文字）
定價（極上一圓六十錢 特製一圓四十錢 並製一圓十錢）

（郵稅各八錢）

目次

一、經典

一 開經偈
二 舍利禮文
三 妙法蓮華經觀音普門品
四 同 如來壽量品
五 同 提婆達多品
六 同 安樂行品
七 金剛般若波羅蜜多經
八 摩訶般若波羅蜜多經
九 大般若轉讀唱文
一〇 大佛頂萬行首楞嚴陀羅尼
一一 普回向偈
一二 楞嚴會序引文
一三 大悲心陀羅尼
一四 消災妙吉祥陀羅尼
一五 佛頂尊勝陀羅尼
一六 梵網菩薩戒經和譯
一七 四十二章經和譯
一八 佛遺敎經和譯
一九 施食文
二〇 甘露門和譯

二、支那諷誦部

二一 心王銘和譯
二二 信心銘和譯
二三 參同契和譯
二四 寶鏡三昧和譯
二五 玄中銘和譯
二六 證道歌和譯
二七 南嶽偈和譯
二八 五位顯訣和譯
二九 逐位頌功勳頌和譯
三〇 十牛頌和譯

三、支那祖錄部

三一 達磨四行觀和譯
三二 六祖法寶壇經和譯
三三 黄檗傳心法要和譯
三四 潙山警策和譯
三五 臨濟錄和譯
三六 洞山錄和譯
三七 碧巖集和譯

四、日本祖錄部

三八 興禪護國論和譯
三九 普勸坐禪儀和譯
四〇 坐禪箴和譯
四一 學道用心集和譯
四二 正法眼藏辨道話
四三 同 諸惡莫作
四四 同 佛向上事
四五 正法眼藏行持
四六 正法眼藏四攝法
四七 同 示庫院文
四八 正法眼藏道心
四九 正法眼藏生死
五〇 孤雲禪師示衆和譯
五一 坐禪用心記和譯
五二 傳光錄釋迦佛章
五三 傳光錄龍樹章
五四 傳光錄達磨章
五五 傳光錄[illegible]祖章
五六 傳光錄投子章
五七 三根坐禪說和譯
五八 明峰禪師法語
五九 峨山禪師法語
六〇 大雲法語
六一 大燈國師法語
六二 聖一國師法語
六三 夢中問答集
六四 一休骸骨
六五 徹翁和尚法語
六六 不動智神妙錄
六七 [illegible]眼法語
六八 夜船閑話
六九 指月法語
七〇 月舟法語
七一 己山法語二種
七二 經行軌
七三 寶洞敎會儀式
七四 總持開祖敎義抄

五、日本諷誦部

七六 傘松道詠集
七七 大智偈頌抄譯
七八 坐禪和讃
七九 禪元詩抄和譯
八〇 [illegible]禪宗日用偈文類

六、

八一 天童宏智禪師發願文
八二 大慧普覺禪師發願文
八三 永平道元禪師發願文
八四 祇陀大誡偈
八五 七佛通誡偈
八六 晉山偈
八七 梵唄文
八八 見佛偈
八九 燒香偈
九〇 禮拜偈
九一 讃佛文
九二 懺悔戒文
九三 三飯偈
九四 三歸禮文
九五 四弘誓願文
九六 散華偈
九七 誕生會浴佛偈
九八 佛像開眼偈
九九 塔婆供養偈
一〇〇 出家得度偈
一〇一 剃髪偈
一〇二 搭袈裟偈
一〇三 展坐具偈
一〇四 洗淨偈
一〇五 入浴偈
一〇六 錫杖偈
一〇七 楊枝偈
一〇八 鳴鐘偈
一〇九 聞鐘偈
一一〇 展鉢偈
一一一 十佛名號
一一二 粥時偈
一一三 齋時偈
一一四 五觀偈
一一五 施食偈
一一六 食時普願偈
一一七 折水偈
一一八 後唄文
一一九 行[illegible]
一二〇 觀音十大願文
一二一 延命十句觀音經
一二二 迴藏讃偈
一二三 釋迦讃偈
一二四 普回向
一二五 備考

以上

禪三宗にて平素讀むべき經典は悉く網羅され、禪三宗にて根本的聖典として法堂に讀むべき歌誦類は凡て網羅され、禪三宗にて工夫悟道の軌範として尊ぶべき祖錄は和漢を通じて一切網羅され、禪三宗にて修養となるべき血あり、涙ある祖訓は皆網羅され、禪三宗の祖師の趣味ある諷詠は總て網羅され、禪三宗にて日々用ふる偈頌類は皆此書の中に收めらる。音讀すべきものは反り點をつけて音讀用の振假名を一字一字につけ、訓讀さるゝものは皆和文に訓譯して振假名をつけ、日本の法語にても之に插入しある漢文は一定の符號を附して和譯し、全編何處を見ても初學者に讀めぬ所なく、禪宗の書籍は讀み難しと思へる人も此書を見ば、何の苦なしに全編を通讀し得べし。

編者數年來『禪門寶鑑』の著作に從事し、殊に禪宗思想史の研鑽に勉むる所あり、深く禪籍の難解にして世に行はれ難きを嘆じ、幾多の類本を對校して訓點の是非を定め、各聖典の全文を一字一句も削らず載錄して之を時代順に配列し、遂に此書をなせり。寺院の徒弟は此書を得て樂々と佛經祖錄を讀み得べく、禪宗の檀信徒は此書を得て寺院の讀經を解し、自家の佛壇に回向し得べく、禪學研究者は難解の文字を容易に讀過し得べく、提唱を聞く人も之を懷にして便利尤も多かるべく、歷史家は此一書に依りて禪宗思想變遷の迹を察すべく、門外の人は禪宗の讀みくせを悉く知るを得べし。網羅と振假名と和譯、而して非常なる廉價、校正の嚴密、携帶の便利、裝釘の壯美、是れ本書が他に全く比類なき處也。

大谷派敎學部長 連枝 大谷瑩亮師序
本願寺派布敎總監 連枝 梅上尊融師序
最終の特賣

好評 十版出版

眞宗聖典

清澤 潤編

完全無比の眞宗聖典は編纂せられたり。初に勤行用として三部經、正信偈、和讃、御文（御文章）、等の全部を網羅し盡したり。次に信念修養の資料として、三部經和譯、敎行信證和譯、歎異鈔、御一代聞書、等廿四部、其他の假名聖敎十數部の拔粹、七祖聖敎十有餘部の抄譯あり。內容の豐富なる、裝釘の優雅にして輕便なる、眞宗聖典中の大王なりとす。九版三千部既に賣切れたれども未だ一般の要求に應ずること能はず、更に重版三千部を刊行して初版の如く特價販賣を斷行せり。請ふこの廉價無比なる最終の特賣提供を逸する勿れ。

製本竪五寸一分 橫三寸六分
舶來上等紙 全文ふりかな
一千五十ページ

極上特製金一圓二十錢（極上特製々本金襴表裝三本金）
特製金九十五錢（特製々本黒色總革三本金）
並製金六十五錢（並製々本クロース製金文字）
定價（極上一圓五十錢 特製一圓三十錢 並製九十五錢）

（郵稅各八錢）

發行所 無我山房
東京巣鴨町二ノ三五
振替東京一二二二二番

淨土宗管長 山下現有老師
增上寺法主 堀尾貫務師

製本 出來

淨土聖典

貳千部限り特價

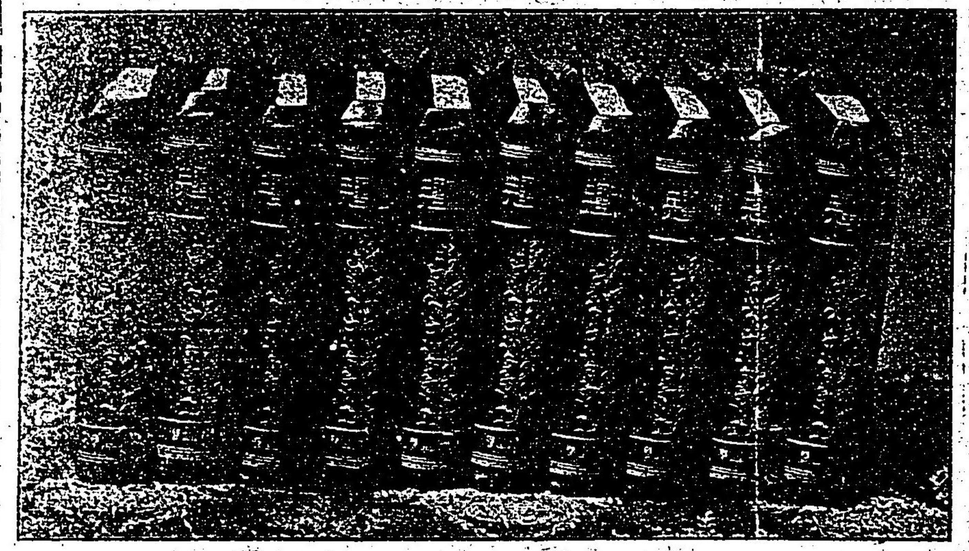
極上特製 一圓六十錢
並製 一圓

特製 郵稅各一圓四十錢
清國朝鮮臺灣樺太各卅五錢

一 淨土三部經和譯 二 淨土菩薩戒經和譯 三 淨土宗要義和譯 四 淨土三部經和譯 五 淨土三部經和譯 六 淨土三部經和譯 七 淨土三部經和譯 八 淨土三部經和譯 九 淨土三部經和譯 十 淨土三部經和譯 十一 淨土三部經和譯 十二 淨土三部經和譯 十三 淨土三部經和譯 十四 淨土三部經和譯 十五 淨土三部經和譯 十六 淨土三部經和譯 十七 淨土三部經和譯 十八 淨土三部經和譯 十九 淨土三部經和譯 二十 淨土三部經和譯 二十一 淨土三部經和譯 二十二 淨土三部經和譯 二十三 淨土三部經和譯 二十四 淨土三部經和譯 二十五 淨土三部經和譯 二十六 淨土三部經和譯 二十七 淨土三部經和譯 二十八 淨土三部經和譯 二十九 淨土三部經和譯 三十 淨土三部經和譯 三十一 淨土三部經和譯 三十二 淨土三部經和譯 三十三 淨土三部經和譯 三十四 淨土三部經和譯 三十五 淨土三部經和譯 三十六 淨土三部經和譯 三十七 淨土三部經和譯 三十八 淨土三部經和譯 三十九 淨土三部經和譯 四十 淨土三部經和譯 四十一 淨土三部經和譯 四十二 淨土三部經和譯 四十三 淨土三部經和譯 四十四 淨土三部經和譯 四十五 淨土三部經和譯 四十六 淨土三部經和譯 四十七 淨土三部經和譯 四十八 淨土三部經和譯 四十九 淨土三部經和譯 五十 淨土三部經和譯 五十一 淨土三部經和譯 五十二 淨土三部經和譯 五十三 淨土三部經和譯 五十四 淨土三部經和譯 五十五 淨土三部經和譯 五十六 淨土三部經和譯 五十七 淨土三部經和譯 五十八 淨土三部經和譯 五十九 淨土三部經和譯 六十 淨土三部經和譯 六十一 淨土三部經和譯 六十二 淨土三部經和譯 六十三 淨土三部經和譯 六十四 淨土三部經和譯 六十五 淨土三部經和譯 六十六 淨土三部經和譯 六十七 淨土三部經和譯 六十八 淨土三部經和譯 六十九 淨土三部經和譯 七十 淨土三部經和譯 七十一 淨土三部經和譯 七十二 淨土三部經和譯 七十三 淨土三部經和譯 七十四 淨土三部經和譯 七十五 淨土三部經和譯 七十六 淨土三部經和譯 七十七 淨土三部經和譯 七十八 淨土三部經和譯 七十九 淨土三部經和譯 八十 淨土三部經和譯 八十一 淨土三部經和譯 八十二 淨土三部經和譯 八十三 淨土三部經和譯 八十四 淨土三部經和譯 八十五 淨土三部經和譯 八十六 淨土三部經和譯 八十七 淨土三部經和譯 八十八 淨土三部經和譯 八十九 淨土三部經和譯 九十 淨土三部經和譯 九十一 淨土三部經和譯 九十二 淨土三部經和譯 九十三 淨土三部經和譯 九十四 淨土三部經和譯 九十五 淨土三部經和譯 九十六 淨土三部經和譯 九十七 淨土三部經和譯 九十八 淨土三部經和譯 九十九 淨土三部經和譯 百 淨土三部經和譯 百一 淨土三部經和譯 百二 淨土三部經和譯 百三 淨土三部經和譯 百四 淨土三部經和譯 百五 淨土三部經和譯 百六 淨土三部經和譯 百七 淨土三部經和譯 百八 淨土三部經和譯 百九 淨土三部經和譯 百十 淨土三部經和譯 百十一 淨土三部經和譯 百十二 淨土三部經和譯 百十三 淨土三部經和譯 百十四 淨土三部經和譯 百十五 淨土三部經和譯 百十六 淨土三部經和譯 百十七 淨土三部經和譯 百十八 淨土三部經和譯 百十九 淨土三部經和譯 百二十 淨土三部經和譯 百二十一 淨土三部經和譯 百二十二 淨土三部經和譯 百二十三 淨土三部經和譯 百二十四 淨土三部經和譯 百二十五 淨土三部經和譯 百二十六 淨土三部經和譯 百二十七 淨土三部經和譯 百二十八 淨土三部經和譯 百二十九 淨土三部經和譯 百三十 淨土三部經和譯 百三十一 淨土三部經和譯 百三十二 淨土三部經和譯 百三十三 淨土三部經和譯 百三十四 淨土三部經和譯 百三十五 淨土三部經和譯 百三十六 淨土三部經和譯 百三十七 淨土三部經和譯 百三十八 淨土三部經和譯 百三十九 淨土三部經和譯 百四十 淨土三部經和譯 百四十一 淨土三部經和譯 百四十二 淨土三部經和譯 百四十三 淨土三部經和譯 百四十四 淨土三部經和譯 百四十五 淨土三部經和譯 百四十六 淨土三部經和譯 百四十七 淨土三部經和譯 百四十八 淨土三部經和譯 百四十九 淨土三部經和譯 百五十 淨土三部經和譯 百五十一 淨土三部經和譯 百五十二 淨土三部經和譯 百五十三 淨土三部經和譯 百五十四 淨土三部經和譯 百五十五 淨土三部經和譯 百五十六 淨土三部經和譯 百五十七 淨土三部經和譯 百五十八 淨土三部經和譯 百五十九 淨土三部經和譯 百六十 淨土三部經和譯 百六十一 淨土三部經和譯 百六十二 淨土三部經和譯 百六十三 淨土三部經和譯 百六十四 淨土三部經和譯 百六十五 淨土三部經和譯 百六十六 淨土三部經和譯 百六十七 淨土三部經和譯 百六十八 淨土三部經和譯 百六十九 淨土三部經和譯 百七十 淨土三部經和譯 百七十一 淨土三部經和譯 百七十二 淨土三部經和譯 百七十三 淨土三部經和譯 百七十四 淨土三部經和譯 百七十五 淨土三部經和譯 百七十六 淨土三部經和譯 百七十七 淨土三部經和譯 百七十八 淨土三部經和譯 百七十九 淨土三部經和譯 百八十 淨土三部經和譯 百八十一 淨土三部經和譯 百八十二 淨土三部經和譯 百八十三 淨土三部經和譯 百八十四 淨土三部經和譯 百八十五 淨土三部經和譯 百八十六 淨土三部經和譯 百八十七 淨土三部經和譯 百八十八 淨土三部經和譯 百八十九 淨土三部經和譯 百九十 淨土三部經和譯 百九十一 淨土三部經和譯 百九十二 淨土三部經和譯 百九十三 淨土三部經和譯 百九十四 淨土三部經和譯 百九十五 淨土三部經和譯 百九十六 淨土三部經和譯 百九十七 淨土三部經和譯 百九十八 淨土三部經和譯 百九十九 淨土三部經和譯 二百 淨土三部經和譯

製本堅五寸一分 横三寸六分
舶來上等紙 全文總ふりがな
一千五百餘ページ
並製 特製 極上特製 本裝 三方金
並製 特製 黑色金總革 三方金
並製 特製 ローズ緞 金文字
並製 特製 本クロース 定價金二圓八十錢
並製 特製 持製 定價金一圓五十錢

主月信道師編



發行所 東京巣鴨町二ノ三五 振替東京三一二二番 無我山房

淨土宗或は淨土宗の聖典とすべきものは、數多くある。或は讀誦するもの、例へば「六時禮讚」の如き、或は淨土宗の經典儀式の攝取三部經の如き、或は歌歎するもの、例へば「撰擇集」の如き、或は一宗が奉じて以て宗義の根基となるもの、例へば「法然上人行狀畫圖」の如き、或は一宗の教義の取捨選擇の方面に亙つてをるのであるが、此等の全部を蒐めて一卷とし、實に總て淨土宗の教義の全文に皆振り假名を附けて、音讀するものは音讀の振假名が附けてあるし、自分の修養は勿論、布教傳道の材料は一に此の一部の中にあるし、在家求道者は、困難で讀みにくいお經を容易に讀むばかりでなく、淨土宗で行ふ總ての法式を行ふことが出來るし、中でも、圓光大師の「勅修御傳法然上人行狀畫圖」四十八卷全部を輯めたのは、御傳とは云ふものゝ、一つは大師一代の芳ばしい跡をうかゝふことが出來るし、一つは大師一宗の教義も、たやすく知ることが出來るのである。實に最も傳記に依て依紀でそが含出がかけも淨も總式の攝取三の部聖典と導經典の如き、或は歌歎するもの、例へば「撰擇集」の如き、或は一宗が奉じて以て宗義の根基となるもの、例へば「日常勤行式」の如き等、數へて來れば百餘ページ、此の「淨土宗聖典」である。

「淨土宗聖典」一冊を懷にする人は、全く淨土宗を懷にする人である。

淨土宗聖典と云はず、出家と云はず、求道者と云はず、教育者と云はず、男女、人として苟も未だ嘗つて世に求め得ることが出來なかつた。

出版を知りながら、而かも是を懷にし、座右に具へないものがあるならば、これは正しく不幸中の不幸と申すものであらう。

特 18
30

阪上宗詮師序文
來馬琢道師校訂和譯

白隱禪師參禪要訣

遠羅天釜

東京
無我山房發兌

明治
44. 8. 16
内

□□

醜上添醜又一層
者般醜惡破瞎禿
麼近代斬無瞎僧
挫今時默照邪黨
為群魔憎
佛嫌群魔隊裡
千佛場中為千

牙如劍樹口似血盆吞
吐佛祖咬殺波旬河故
將此方心奉聲劫已謂
教佛恩

古稀老衲紫柏

例言

一、遠羅天釜は、白隱禪師常用の釜の名にて其命名の所以を知らず、後に、此書に命ずるに、其釜の名を以てしたるものにて、上卷には「鍋島攝州侯の近侍の問に答ふる書」、中卷には「遠方にある病中の僧に與ふる書」、下卷には「法華宗の老尼に與ふる書」を收め、別に續集として「念佛と公案との區別如何の問に答ふる書」を收めたるもの、今總稱して『遠羅天釜』と云へるなり。

一、卷末の『客難に答ふ』は、禪師の流れを汲む者が、世人の本書を非難せるに答へたる書にて、禪師の雄健なる筆に及ばずと雖も、亦參考とするに足るものあり、原は全文漢文なりしを、今和譯せるものなり、外に慧梁の跋二編あり、今和訓して附せるもの是なり。

一、世に參禪の針路を示せる書籍、頗る多しと雖も、大抵、門內の隨徒に示せるものにして、在家の人に敎へたるもの甚だ稀也、予常に在俗求道者の指南を求めらるるに當り、二三の祖籍を指示するに、皆曰く、禪宗の書は文字解し難く、讀了するすら容易の業に非ず、何ぞ況んや其義を得んをやと、窃に之を憾みとし、嚮に『禪宗聖典』を編し、禪宗に關する重要の書籍數千種を和訓し、之に傍訓を附

して此の欠陥を補ふ一助たらしめんことを期せり、而も、其の編輯の間、古德の遺訓を披讀するに、其主義に於ては粗今人に了解さるべきも、如何せん、文辭稍古遠にして、再三の詳讀を經ざれば徹底し難きもの多し、獨り、白隱禪師の『遠羅天釜』に至りては、旨遠くして辭卑く、文平調にして、意を得るに易く、且つ、其の敎ふる所、皆在家及初心の僧侶なるが故に婆心切々、「瘴き所に手の屆きたる」感あり、謂へらく、此書宜しく別に印行して世に流布し、以て入門者の渴を醫すべし、唯、時既に逼るを憾む、更に餘閑を得て仔細に校訂すべきなりと、乃ち『夜船閑話』『坐禪和讃』を『禪宗聖典』中に收め、聖典の功を竣へたる後、世に流布せる類本を檢するに魯魚の誤少からず、加ふるに、挿入せる漢文は、其まゝに翻刻され、傍訓を加へたるものは殆んど之有るを見ず、仍て、更に慧梁和尙が、寛延己巳の仲春に校訂印刻したる木版本と對校し、漢文は凡て和譯し、文字は一一振假名を附して世に出すこととなせるもの、卽ち本書なり。

一、白隱禪師は曠世の偉人なれば、其文字の用法等に於ても他を敬服せしむるものあり、但し其假名遣ひと、二三の文字には明に寫者の誤りと認めらるべきものあり、仍て本書に於ては、成し得る限り、之を修正したり。

一、本書の序は坂上宗詮老師の筆に成る、老師一日予が草廬を敲き、親しく校訂に關する意見を述べられ、直に筆を揮つて一偈を認めらる、予は老師の老いて益益化門を張らるゝの盛なるに服する者なり。

一、卷頭の白隱禪師略傳は、主として『年譜』に依り、『白隱廣錄』兩卷、及び釋宗演師校閲の『白隱禪師傳』を參照して新に編みたるものなり、而して、其の修行時代に於ける煩悶より、時に佛を輕んじ、時に法を輕んじ、名師を求めて得ず、さりとて書籍に親んで其奧に達するほどの勇氣もなく、遂に德を積み、佛を敬して一生の針路を立つべく決意せるまで約三十年間の苦心は、一朝夕の間に成功の夢を貪る現代青年の好個の訓誡となるべく、更に吾人修道者の模範として仰慕するに足るべし、由來各宗高僧の傳記は、其華を語り、其實を告ぐるに於て力を盡すもの多しと雖も、其華と現れざる以前の堅き苦の事蹟は多く之を述べざる憾あり、されど、焉んぞ知らん、吾人の眞に修道の範とすべきは、却つて、其の修養の時代にあるべきことを、編者は白隱禪師の傳が、多く、其の修養の經路の記述に費されたるを見て、洵に貴き修道者實歷譚の好例として、尊重するものなり。

一、遠羅天釜の諸編を讀む者、初、疑うて曰く、假令白隱禪師の學識を以てするも、いかで斯る雄篇を一氣に書き盡し得んやと、而も、其傳を讀みて、修養の深厚な

るを知るに及び、流れを汲んで源を知るの感なきはあらず、編者亦一たびは此の迷路に入りたる者、惟、稍夙く醒めたるを幸とするのみ。

一、本書の中に、編者の禪師と稱するは、皆白隱禪師を指す、禪師の先輩は皆和尙と稱し、後學の者には敬語を略し、以て通讀中の紛雜を防ぐ一助とせり。

一、卷末に「粉ひき歌」を附したるは、予が錦上更に華を餙くの希望に依るのみ。

一、白隱禪師の畫像は京都鹿王院藏の自贊の畫に基き、他の二三の肖像と對照して、『東洋畫解』の著者神木鷗津氏が之を臨摸し、其贊をも謄寫せられたるものなり、鷗津氏の東洋畫に關する意見は既に定論あり、編者が寫眞版を用ひず特に氏を煩はしたるは、聊か見る所あるに由る。

一、「偉人の遺著を校訂する者は、其人と同じ程度の人ならざれば完璧を期する能はず」とは、予が常に信ずる所なり、今や、此編を成すに臨み、愈此感を深うせずんばあらず、故に、初めは多少の註解を試みんとしたるも、徒に文字の義理を解するは、却つて、先人の意の存する處を失ふに近きを患ひ、單に和訓するに止めたり、而も猶差誤少からじ、敢て江湖の叱正を待つ。

明治四十四年六月十日　東京淺草泰平山裡前古庵にて　編者識

白隱禪師傳

白隱禪師、名は慧鶴、駿河國原驛の人、貞享二年十二月廿五日生る、姓は杉山氏、母は驛亭の長長澤氏の女なり、幼名を岩次郎と稱す、天性穎悟、四歲の時、村歌三百餘言を暗誦して一字を差へず、七歲の時、寺に詣で、「提婆品」の講說を聞き、歸りて、老嫗に、其の聞ける所を語り、大に滿坐の人を驚かせり、されば、休心房と云へる一行者は禪師を見て其奇骨を愛し、養生の秘訣を敎へて、必ず世の福田たれと訓示したることもありと云ふ、少時常に海邊に在りて漁夫と混じ、魚貝を捕ふ、偶々夕陽の海を射りて畫圖の如く、空間に浮雲の往來隱顯するを見て稍々無常を觀ずる心あり、十一歲の時、伊豆窪金の日嚴上人の來りて昌源寺に日蓮上人の御書を講ずるを聞き、急に墮獄の苦を懼るゝ念あり、入浴の際、湯の沸くを見てすら、恐怖措く能はず、母の敎に從ひて北野の天神を信奉し、看經怠らず、後、又、鎠冠日親上人の劇を見て、深く法華經の威神力を感じ、遂に出家を乞ふ、父母初は許さゞりしも、其志の奪ふべからざるを知り、元祿十二年二月廿五日鵠林山松蔭寺に入りて單嶺

傳和尚を師として出家せしむ、單嶺和尚寂するに及び、沼津大聖寺の息道和尚に侍す、偶々法華經を讀みて、嘆じて曰く、此經若し功德あらば、諸史百家の謠書妓典も亦功德あるべしと、十六年辭して清水の禪叢衆寮に至り、江湖集の巖頭渡子の話を聽きて、却つて佛法を輕んずる心あり、「兎ても落つべき地獄ならば、手を取り合うて落ちん」と、佛書を捨てゝ詩文を學び、筆墨を弄し、其師を尋ねんと欲して、美濃大垣の瑞雲寺馬翁老人に參じ、研鑽怠らざりしが、夏日、曝書の際、不圖數百の書を閲し、自ら誓願して曰く、南無十方一切諸佛我が進むべき道あらば、願はくは、敎示し玉へと、眼を閉ぢ、心を潛めて、手に觸るゝ一卷を取りて之を開き、忽ち眼を開けば、『禪關策進』の「引錐自刺」の章に當れり、是に於て前日の見處の誤れるを悟り、翌年洞戸の保福寺南禪和尚の下に至り、爾後、萬休、大巧、萬里、逸禪等の諸師に參ず、逸禪は伊豫正宗寺の住持なり、禪師此に在りて偶々某家の施齋に赴き、大愚和尚の墨蹟の床間に掛けあるを見、歎じて曰く此の粗笨の文字にして、猶衆人に恭敬せらるゝは、畢竟其德に依る、文筆の末伎を學んで、何かせんと、歸りて筆道等に關する幾多の秘書を一炬に付したりと云ふ、其翌年春、正宗寺を辭して備後福山の正壽寺に到り、會畢りて東に還り、明年、越後高田の英巖寺に性徹和尚に參ず、而も、甚だ慊ざるものあり、先侯の廟所に隱れて獨り修道す、期盡きんとする時、五更、遠寺の鐘聲の微に耳を打つを聞き、翻然悟る所あり見を性徹和尚に呈したるも、和尚の機語甚だ俊ならず、禪師遂に大我慢を起して、天下我に勝る者無しと信ずるに至る、時に寶永五年二月十六日なり。

當時、信州飯山に正受老人道鏡慧端なる人あり、門風の高きを以て聞ゆ、禪師之を試みんと欲し遙に往いて數々見解を呈す、然るに老人肯ふことなく、一句を呈する毎に「箇鬼窟裡の禪和子」と云ひ、遂に「穴藏禪法」を以て罵るに至る、禪師日夜煩悶に堪へず、飯山に行乞して、歸るを忘れ、市人呼んで狂僧となすに至れりと云ふ、而も精進怠らず、稍眞諦を會せんとす、偶々息道和尚重病の報を得、已むなく老人を辭して、息道和尚の扶養に勉め、更に師を求めて、修道せんとす、惜いかな、勤苦度に過ぎて身軀を害し、遂に不治の病に罹る、時に山城白河の山奥に白幽先生と稱せらるゝ一老人の有るを聞き、往いて病源を問ふ、白幽敎ふるに禪病を治する法を以てす、禪師深く之を歡受し、退いて內觀を修す、病大に癒えて、曩日の元氣を回復す

ることを得、各處を經歷して下總佐倉の養源寺に至り、提河和尚の會に參じ、息道和尚の病を聞きて沼津に歸り、正德二年八月其遺龕を送り、更に勢南を經て、泉州陰涼寺に往き、又、若州圓照寺鐵堂和尚、河內法雲寺慧極和尚等に參じて、所得甚だ少きを慨し、轉じて美濃の虎溪に往き、愈々默照枯坐の居睡り坐禪に失望し、遂に太田の奥、巖瀧の地に鹿野德源老人の厚意に依り、菴を營みて靜坐す、享保元年、父の命に從ひ、松蔭寺に住し、貧を觀せず、富を知らず、窮巷の穢土を巖瀧の山中と觀じて、專ら參禪に勉めたり、時に和歌あり

情あるも、つらきも遠くなり果てぬ嬉しや他處の山はたづねじ

始めて、安心の境に逢へるを見るべし、享保三年十一月花園第一座に轉ず、此歲正受老人寂を示す、十一年七月法華經を讀みて譬喩品に至り、乍ち、蜚の古砌に鳴きて、聲々相連なるを聞き、豁然として法華の深理に契當し、從來の疑ひとせし所、全く氷釋することを得、覺えず聲を發して號泣し、初めて正受老人平生の受用を徹見することを得たりと云ふ、時に禪師四十二歲なり。

元文二年、始めて豆州臨濟寺に『碧巖錄』を評唱し、自坊に虛堂會を營み、爾來、甲州、中國、京都、美濃等を巡錫して應化に寧日なく、寶曆十三年三月江尻の慈雲寺に『松源錄』を評唱し、翌年二月松蔭寺に末後の大會を開き、七百の清衆規矩森然として禪林の古風稍々見るべきあるに至る、會後、席を慧牧遂翁に讓り、明和三年、東嶺の招に應じて江戸小石川至道菴に移り、住すること半歲、明和五年の春を伊豆の龍澤寺に迎へ、春糕を食ひて、其半を東嶺に喫せしめ、德を兒孫に遺すの意を示し、七月十七日松蔭寺に歸り、悠々自適して晩年を淨行に用ひ、十一月病重うして衰弱甚だしく、醫師古郡氏來り診して曰く、別異なしと、禪師呵して曰く、三日以前に、人の死を知らずんば、豈良醫と云ふを得んやと、十二月十一日靜に高臥し、大吽一聲を遺して、右脇にして遷化す、十五日津送を營む、疾風暴雨あり、翌十六日に及んで、火臺に赴き、茶毘に附す、明和六年六月八日、後櫻町天皇勅して、神機獨妙禪師の諡號を賜ひ、明治十七年今上皇帝、復、正宗國師の號を加諡し玉ふ。

語錄併せて十卷、之を『荊叢毒藥』と云ふ、其他著はす所、『槐安國語』、『寒山詩闡提記聞』、『息耕錄開筵普說』、『寒林貽寶』、『寶鑑貽照』、『毒語心經』、『遠羅天釜』、『寶鏡窟記』、『假名法語』、『辻談義』、『邊鄙以智語』、『藻鹽草』、『藪柑子』、『兎專使稿』、『夜船

閑話』(白幽老人を訪ふ記)、『夜船閑話』(防州侯に上りし書)、『壁生草』、『於仁安佐美』、『八重葎』(十句觀音經靈驗記)、『八重葎』(四娘孝記)、『假名葎』等あり、別に『安心ほこりたゝ記』、『大道ちよぼくれ』、『施行歌』、『子守唄』、『三敎一致辨』、『藥病相治說』、『御洒落御前物語』、『御代の暃鼓』、『見性成佛丸方書』、『草取唄』、『寢惚氣廼眼覺誌』、『主心お婆粉引歌』、『おた福女郎粉引歌』、『察女に與ふる書』、『坐禪和讃』等の短篇零句あり、て世に行はる、徒に東嶺、遂翁等の諸師あり、能く禪師の衣鉢を紹ぎ、正風の擧揚に勉む、現下、臨濟の禪風、大に世に興るもの、禪師の子孫の力、其基を爲すと云ふ。

白隱禪師傳

白隱禪師遠羅天釜

鍋嶋攝州侯近侍に答ふる書

日之昨は遠路御使札益御勇健にて朝鮮人御馳走首尾よく相濟御安堵の旨一段の御事に候、草廬恙なく罷在候、是又高慮を勞せられ間敷候、且又動靜二境の上に於て御工夫怠慢なく、御心掛なされ候條珍重の御事に候、其外に書中に仰越れ候件件逐一老僧が野情に相契ひ、御奇特千萬の御事如何許り悅び入り候、總じて一切の修行等精進工夫の間に於て、心掛惡く侍れば動靜の二境に障られ、昏散の二邊に隔られ、心火逆上し、肺金痛み悴け元氣虛損して難治の病症を發するも間々多き事に侍り、又內觀の眞修に依て能々修練致し侍れば、至極養生の秘訣に契つて心身堅剛に氣力丈夫にして、萬事輕快に法成就にも到る事に候、去程に大覺調御も阿含部に於て、右の趣を委しく敎誡此あり、天台の智者大師も其の大意を汲で摩訶止觀の中に丁寧に示し置れ侍り、嘗中の大意は縱ひ何分の聖敎を披覽し何分の法理を

觀察し、或は長坐不臥し或は六時行道すと云ども、常に心氣をして臍輪氣海丹田腰脚の間に充しめ塵務繁絮の間賓客揖讓の席に於ても片時も放退せざる時は、元氣自然に丹田の間に充實して臍下瓠然たる事未だ篠打せざる鞠の如し、若人養なひ得て斯の如くなる時は、終日坐して曾て倦ず終日誦して曾て倦す、終日書して曾て困せず終日說て曾て屈せず、縱ひ日々に萬善を行ずと云ども終に退惰の色なく、心量次第に寬大にして氣力常に勇壯なり、苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず、玄冬素雪の冬の夜も襪せず爐せず、世壽百歲を閱すと云ども齒牙轉堅剛なり、怠らざれば長壽を得、若それ果して斯の如くならば、何れの道か成せざる、何れの戒か持たざる、何れの定か修せざらん、何れの德か充ざらん、若又如上の故實に達せず、眞修の秘訣を諳んせず、妄りに自ら悟解了知を求めて觀理度に過思念節を失する時は、胸膈否塞し、心火高ぶり上り、兩脚氷雪の底に浸すが如く、雙耳溪聲の間を行に齊うして、肺金痛み悴け水分枯渴して終に難治の重症を發して命根も亦保ち難きに至る、是たゝ眞修の正路を知ざる故なり、寔に悲むべし、盖し摩訶止觀の中に假緣止、諦眞止と申す事の侍り、只今申し談ずる內觀の法とはかの假緣止の大略にて侍り、老夫も若かりし時工夫趣向惡く心源湛寂の處を佛道なりと相心得、動中を嫌ひ靜處を好んで常に陰僻の處を尋ねて死坐す、假初の塵事にも胸塞り心火逆上し、動中には一向に入る事得ず舉措驚悲多く、心身鎭へに怯弱にして兩腋常に汗を生じ、雙眼斷えず淚を帶ぶ常に悲歎の心多く、學道得力の覺えは毛頭も侍らざりき、何の幸ぞや、中頃よき智識の指南を受て內觀の秘訣を傳受し、密々に精修する者三年從前難治の重痾は、いつしか霜雪の朝曦に向ふが如く次第に消融し、宿昔齒牙を挾む事得ざる底の難信難透難解難入底の惡毒の話頭は病に和して氷消し、今歲從心の齡を經と云ども三四十歲の時より氣力十倍し、心身ともに勇壯にして脇席を濕さず恣に假臥せざる者動もすれば二三七日を經る事間此あれども、心力衰減せず三百五百の燕頷虎頭に圍繞せられて經論を講演し語錄を評唱して、三旬五旬を經れども曾て疲倦の色なき者は自ら覺ゆ此內觀の力による事を、初め養生を第一とし、內觀工夫の間求めざるに不慮の省悟得力幾度と云ふ數を知らず、只動靜の二境を嫌はず取らず、密々に進修しもて行事、第一の行持に侍り、往々に靜中の工夫は思の外に捗行樣に思はれ、動中の工夫は一向に捗行ぬ樣に覺えらるゝ事

に侍れど、靜中の人は必ず動中には入事得ずたま〳〵動境塵務の中に入る時は平生の會處得力は迹形もなく打失し、一點の氣力無して、結句尋常一向に心がけ、これ無人よりは劣りて芥許りの事にも動轉して思の外に憶病なる心地あつて卑怯の働も間多き者に侍り、然らば則ち何を指てか得力と云んや、去程に大慧禪師も動中の工夫は靜中に勝る事百千億倍すと申し置れ侍り、博山は動中の工夫成じ上らざる事一百二十斤の重擔を荷つて羊額嶺頭に上るが如しと申されき、蓋かく云ばとて靜中を捨嫌つて故意に動處を求め玉へと云にはあらず、只動靜の二境を覺えず、知ぬ程工夫純一なるを貴とす、所以に言眞正參禪の衲子は行て行く事を知ず坐して坐する事を知らずと、中に就て眞實自性の淵源に徹底して、一切處に於て受用する底の氣力を得んとならば動中の工夫に越たる事は侍るべからず、譬ば茲に何百兩の黃金あらんを、人をして守護せしめんに室を閉扉を鎖して其傍らに坐し守て、人にも取れず奪れずとて、中々氣力有んずる者の手柄とも働とも申さるべき事にし非ず、是を二乘聲聞の自了偏枯の修業に比す、又一人有り群盜蜂の如くに起り、凶黨蟻の如くに馳廻らんず中をかの金を持して何某の處まで贈り届けよと命ぜられたらんに、彼の男膽氣あつて大劒を挾み脛高く褰げかの金を取て棒頭に突掛け、打傾て一交もせで彼所へ贈り届けて少しも恐るゝ氣色なくんば、天晴甲斐甲斐しき働き大丈夫の氣象とも稱嘆すべき事なり、これを圓頓菩薩の上求菩提下化衆生の眞修に比す、何百兩の黃金とは正念工夫堅固不退の大志を云り、群盜蜂の如く凶黨蟻の如しとは、五蓋十纏五欲八邪の妄念を云り、彼男とは眞正參禪圓頓究竟の上士を云り、何某の處とは常樂我淨の四德具足大寂彼岸の寶所を云り、この所以に言眞正參玄の衲子聲色堆裏に向て坐臥すべしと、往々に古の二乘聲聞なりとて輕しむれども、見道の力も智德の光も今の世の人々の及ぶべき事にし侍らず、只修行の趣向あしく空閑の處をのみ好みて、都て菩薩の威儀を知らず、佛國土の因緣なき故に、如來は疥癩野干の身に比し淨名は焦芽敗種の部類なりと呵責し玉ひき、三祖大師の宣はく『一乘に趣かんと欲せば六塵を惡む勿れ、』と是又六塵を數奇好めとには非ず、水鳥の水に入ども少しも翼の濕はざる如く、平生六塵の上に於て取捨ずして間斷なく正念工夫相續せよとの心にて侍り、若又一向に六塵を避八風を恐れば、覺ず二乘の臼窠に墮して、永く佛道を成せじとなり、永嘉大師は『欲に在

て禪を行ず知見の力、火裏に蓮を生ず終に壞せず』と宣ひき、是亦五欲に耽著せよとの心には侍らず、五欲六塵の上に在ても蓮の泥土に汚されざるが如く、純一に受用せよとの心にて侍り、然るに山林野外に在て一食卯齋し、六時行道する人さへ道業純一になる事能はず、況や夫婦昆弟の間に交り塵勢紛然たる巷をや、若それ見性の眼なくんば毫釐も相應する事能はじ、是故に達磨大師云く若欲覓佛須是見性と、若又忽ち諸法實相唯有一乘の知見を開かば、六塵卽ち禪定五欲卽ち一乘なるが故に、語默動靜常に禪定中なるべし、若果して然らば、彼山林に在て禪を行ずる底と得力霄壤の間を隔てん、火裏の蓮とは世間希有の行者なりと稱歎し玉ふにし非ず、永嘉は天台の三諦卽一の堂奥に達し、止觀の修行は精く鍛錬し玉ひたれば、傳中にも四威儀に常に禪觀に冥ずと稱嘆したる程なれば、片言隻字といへども中々容易の事にし非ず、四威儀に常に禪觀に冥ずとは、四儀卽ち禪觀、禪觀卽ち四儀なるに冥合したる境界を云り、彼菩薩は道場を起ずして諸〳〵の威儀を現ずと說たまひしと同一模範なり、それ蓮は水中にさける華なる故に、火邊に近付時は立處に枯凋事なり、然れば火氣は蓮には上もなき敵藥ならずや、然るに火裏よりさき出たらん蓮は烈火に向ふ程いよ〳〵色香を增て麗はしかるべし、彼五欲を避嫌つて最初より修行したらん人は、縱ひ我法の二空に通じ見道如何許り明かなりとも、靜中を離れ動中に向ふ時は蜆蝦の水を失へるに等く、獼猴の林樹を離れたるに似て、半點の氣力無して左ながら水中の蓮の火氣に逢つて忽ち凋枯するが如けん、若又平生六塵の上に於て猛く精彩を著け純一無雜打成一片にして毫釐も錯らず、彼何百兩の黃金を亂世の時贈り屆し人の如く猛く甲斐〳〵しき氣象を押立て、片時も間斷なく鬪み進たらんには忽ち自心の源底を掀飜し、生死の命根を蹈斷して虛空消殞し鐵山摧る底の大歡喜あらん、彼火裏よりさき出たる蓮華の火氣に逢て、うた〳〵色香を增が如けん何が故ぞ火氣卽ち蓮華、蓮華卽ち火氣なる故に、只返々も內觀眞修寔に放過すべからざる至要なり、內觀の眞修とは吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是趙州の無字無字何の道理かある、吾この臍輪以下丹田氣海及び腰脚足總に是自己本來の面目、面目の鼻孔何の處にかある、吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾本分の家鄕何の莊嚴かある、吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是吾己身の彌陀、彌陀何の法をか說く、吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾本分の家鄕家鄕何の消息かあると咳唾掉臂寤時寐時男子たる者の

思ひ立たる事を遂ずや置べき、仕果ずやあるべきと決烈勇猛の大憤志を震つて間もなく進み給はゞ、平生の心意識情すべて行れず、胸襟分外に清涼に分外に皎潔にして萬里の層氷裏にあるが如く、縱ひ亂軍の場に入り歌舞遊宴の歌吹海に入るといへども人なき處に在が如く、雲門大師の氣宇王の如しと道底の大機は求めざるに煥發せん此時に當つて諸佛衆生もと是幻生死涅槃猶如昨夢天堂地獄を徹見し、佛界魔宮を銷融し佛祖の正眼を瞎却し、忽に百千無量の法門微塵恒沙の妙義を說き宣、一切の含識を利益し塵沙劫を經て退屈せず永劫大法施を行じて、曾て乏しき事なく空華の萬行を展開し、谷響の度門を建立し臂に奪命の神符を掛け、口に法窟の爪牙を咬み鳴して十方參玄の衲子を惱害し、釘を拔き楔を奪つて毫釐も假事なく、一箇半箇牙劒樹の如く口血盆に似たる底の凶惡無義の鈍瞎漢を打出して、以て佛祖の深恩を報答す、是を佛國土の因緣菩薩の威儀と云ふ、是はこれ萬夫に傑出する底の大丈夫兒生平の懷素なり、彼寂靜無事の處に在て識神を認得して見性なりと相心得楷磨淨盡して以て足りとする底の無眼禿奴の族は、夢にも曾て見る事を得んや、是等の族は終日無爲を行じて終日有爲を打し、終日無作を行じて終日有作を打す、何が故ぞ見道分明ならず親しく法性の實際を窮ざる故に惜べし、再び得難き一生を盲龜の空谷に入が如く鬼の棺木を守るに似て、やみ〳〵と過了て苦しかりし三塗の舊里へ懲もなく、立歸らん事皆是進修の指南惡く見性本より眞ならざるが故に一生空く心力を勞し盡して、終に方寸の功を立る事能はず寔に憐むべし、去程に時宗一遍上人の如きは鉦子を頸に打掛念佛しながら、一度三塗に入ぬれば再びかへる事ぞなきと打泣く〳〵、東は奥州出羽の果西は築紫博多の浦の奥までも告廻り給ひけるが、終に由良の開祖に見て往生の大事を決定し給ひけるとぞ、寔に貴き芳躅ならずや、つら〳〵人界の始終を思ふに、天上に生ずべきには福力足らず、三塗に墮ずべきには罪業足らず、終に此娑婆穢土の生を感得す、その中國王大臣長者居士等の人々は前生多少の善緣を修し、許多の勝因を種ゑ來れども天上へ生ずべきには福力足ずして、今大饒富貴の家に生れて臣妾を前後に從へ寶財を左右に束ねて何の辨もなく、萬民を憐まず土庶をも憙まず憍奢の心のみ多くて今日も惡業惡因明日も亦殺業苦種多少の福德を擔ひ來つて徒に空華の榮耀をのみ極めて、限もなき罪業に仕かへて擔もて果しもなき惡趣の巷へ立ち

歸り玉ふは、世間に限りもなき事に侍り、只返す〴〵も内觀の秘要を捨ておかず熟錬是あるべし、内觀の眞修は第一養生の秘術にして仙人錬丹の大事に契へり、その初は金仙氏に起つて中頃天台の智者大師に至つて、摩訶止觀の中に精しく口授し玉へり、吾壯年の頃ほひ是を道士白幽先生に聞けり、白幽は城州白川の巖窟に隱れて聞壽齡二百四十歳を閲すと、時の人是を稱して白幽仙人と云ふ、故の丈山氏の師範なりと、幽が言に曰く大凡生を養ふの術上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に溫煖ならん事を要す、須く知べし、元氣をして下に充しむるは是生を養ふ至要なる事を、往々に神丹は五行合て錬と云ふ事をのみ聞いて、水火木金土の五行は卽ち眼耳鼻舌身の五根なる事を知らず、五根を聚て神丹を練とは如何なる事ぞとならば、盖五無漏の法あり、眼妄りに見ず耳妄りに聞ず、舌妄りに言はず身妄りに觸ず、意妄りに思慮せざる時は、混然たる本元の一氣湛然として目前に充つ是卽ち彼孟軻氏の謂ゆる浩然の一氣なり、是を引て臍輪氣海丹田の間に收て歲月を重ね是を守つて守一にし去り、是を養つて無適にし去時覺えず丹竈を掀翻して、内外中間八紘四維總に是一枚の大還丹自己卽ち是天地に先つて生せず、虛空に後れて死せざる底の長生久視の大神仙なる事を覺得せん、茲に於て大洋を攪いて酥酪となし、厚土を變じて黃金とす是故に言『還丹一粒鐵を點じて金と成す』白玉蟾が曰く『生を養ふの要は先づ形を練るに若かず、形を練るの妙は神を凝すにあり、神凝れば則ち氣聚る、氣聚れば則ち丹成る、丹成れば則ち形固し、形固ければ則ち神全し』と須く知るべし、丹は果して外物に非る事を、盖し地に玉田あり、梁田あり、玉田は珠玉を產するの地、梁田は禾稼を成ずるの場、人に氣海丹田あり、氣海は元氣を收養ふの寶所、丹田は神丹を精練し、壽算を保護するの城府なり、古に云く『江海、能く百谷の王たる所以は其の善く之に下るを以てなり』滄海既に萬水の下を占て百川を含容して增減なし、氣海既に五内の下に居して眞氣を收て飽事なし、終に神丹を成就し仙都に入る、丹田なる者一身三處吾謂ゆる丹田は下丹田なる者なり、氣海丹田各々臍下に居す、一實にして二名あるが如し、丹田は臍下二寸氣海は寸半眞氣常に此内に充實して、身心常に平坦なる時は世壽百歲を閲すと云ども、鬚髮枯れず齒牙動かず眼力うたゝ鮮明にして皮膚次第に光澤あり是則ち元氣を養ひ得て神丹成熟したる効驗なり、壽算限り有べからず、但し修養の功の精麤如何に在らくのみ、古の神醫は未だ病ざる先を治す、よく人をして

心を擇め氣を養はしむ、庸醫は是れに反す已に病の後を見て針灸藥の三を以てこれを治せんとす救ざるもの多し、大凡精氣神の三の物は一身の柱礎なり、至人は氣を惜んで使はず蓋し生を養ふの術は國を守るが如し、神は君の如く精は臣の如く氣は民の如し、夫その民を愛するは其國を全うするゆゑんなり、其の氣を惜むは其身を全うするゆゑんなり、民散ずる時は國亡ぶ、氣竭る時は身死す、此故に聖主は常に心を下に專にし、庸主は常に心を上に恐にす上に恐にする時は九卿寵を恃み、百僚權に傲つて曾て民間の窮枯を顧る事なし、歛臣貪り掠め酷吏僞り剝、野に菜色多く、國に餓莩倒る賢良潛み竄れ、臣民瞋り恨み終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷るに至る心を下に專にする時は、常に民間の勞疲を忘る事なく、民肥國強く令に違するの臣民なく、境を侵の敵國なし、人身も亦然り至人は常に心氣をして下に充しむ、此故に七凶內に動事なく、四邪外より侵す事能はず、營衞充ち心神健なり、身終に針灸の痛痒を知ざる事強國の民の刁斗の聲を聞ざるが如し、岐伯昔し黃帝の問に答ふ、恬淡虛無なれば眞氣これに從ふ、精神內に守らば病安よりか來らんと、今の人は此に反す生より死に至るまで、主心片時も內を守る事なし、主心とは何物と云ふ事をさへ知らず、無知なる事犬馬の日々に足に任せて走るが如し、危いかな兵家に云ずや、驚悲安りに起るは主心定らざる故なりと、蓋し主心內に守る時は憂悲恐怖安りに生ずる事なし、若人片時も主心なき時は死人に如同す、或は放辟邪侈至らずと云事なし、譬へば茲に一箇の舊宅有んに、衰朽疲困凍餒貧窶の老女たりと云ども、主の有んずる家へはゆゑ無うして他の人安りに出入する事叶はず、其家もし主人を失する時は賊盜も潛み休ひ、乞兒も亦來り宿し狐兎競ひ走り、狸貉竄れ睡る閑神晝さけび野鬼夜吟す、千妖百怪群邪の窟宅とならん、人身も亦然り、正念工夫の主心臍輪氣海の間に盤石などを淘居たるが如く、凜然として主張する時は一點の妄念情量なく、半點の思想卜度なうして、天地一指萬物一馬、厚重山の如く寬大海の如くなる底の一員の大丈夫、佛祖も手を挾む事能はず、魔外も窺ひ知事得ず、日々に萬善を行じて以て倦事なし、謂つべし、眞正報恩底の佛子なりと、其人忽ち邪境に奪はれ妄緣に引れて覺えず正念工夫の主心を打失す、是を忽然念起名爲無明と云、煩惱の邪魔蜂の如くに起り、邪見の妖魅蟻の如くに競つて四大夢幻の廢舍五蘊空華の朽宅忽ち化して魔魅の住處となりぬ、千態萬狀日々に幾萬種の生死ぞや、外面は高蹈たる君

子の風標あれども、内心は夜叉の變態多きが如し、心上は鎮へに八島の合戰より苦しく、胸中は常に九國の兵亂よりも煩はし、恰も長者火宅の譬へに等し、是を生死常沒の業海と云、若夫正念工夫の船筏精進勇猛の櫓帆なくんば、識浪情波の急流にをし浸されて、臭烟毒霧の暗區を越得て四德の彼岸に到る事を得んや、悲い哉人人如來の智慧德相を具足して少しも缺事なく、箇々佛性の如意寶珠を圓備し鎮へに大光明を放つて娑婆卽寂光の淨刹毘盧法性の眞土に住みながら、慧眼すでに盲たる故に、娑婆なりと見錯り衆生なりと思ひ違へて、得難き人身、逢ひ難き一生を闇々と牛馬などの無智昏愚なる如く、何の辨もなく明かし暮して、苦しかりし三塗悲しかりし六趣の巷を吟ひ遠りて、少しも變遷あらざる舍那常寂の眞土を把へて地獄なりと恐れ迷ひ、無間なりと泣き苦しむ、是只よの常とるにも足らぬ斷無の小見に傲り片腹痛き少許の口耳の學解に傲て、佛法を信せず正法を聞かず、盧口をのみ利て正念工夫の主心を片時も守る事なき人々のなれの果なり、悲みても尙悲しむべきは流轉永劫の罪累恐れても尙恐るべきは生死長夜の苦果なり、天下の三聖人なりと崇られさせ給ふ、延喜天曆の帝さへ焦熱の猛火に黑ませ給ふを笙が岩屋の日藏上人はまのあたりに見上りたりしに、我は粟散小國の王たる事を恃み、憍慢甚しかりし罪にて斯は成たるぞと宣けるとぞ、敏行の朝臣は和漢の才に長じ手迹麗しくをはして法華經二百部まで書寫し給ひたれども、正念工夫おはさゞりければ、苦趣に墮して紀の友則の許に來りて、救ひを乞給ひけるとぞ、又本朝無雙の名將也と稱せられ給ひて目に餘りたる朝敵を從へ、至尊の宸襟を休め奉つり、南都北京の貴僧高僧も加持しあぐみたりける天子の御惱を弓のすびきして絃音にて搔拭ひたる如く治し上りたる程の八幡殿さへ、閻王の廳に跪き給ひ、多田の滿仲は病中閻王の使に召されて冥府の有樣を見了り蘇生し、殊の外に恐怖し給ひて直ちに六角堂に入入道し念佛し給ひけるに、汗と淚と疊を打透しけるとぞ、六國を幷呑し四海を囊括して八蠻の外までも震ひ恐れたりける秦の莊襄王も、鬼趣に墮して苦を受け、周の武帝は鐵梁の責を受け、梟雄天下に聞えたりける秦の白起は糞泥獄に沉みて後明の洪武の始吳山の三茅觀なる處に於て雷、白き蜈蚣の長け尺餘なるを震殺しけるに、背に白起と云る文字あり〳〵と記しき由罪業の空じ難き事知ぬべし、謂事なかれ塵務繁絮にして參禪に暇なく、世事繽紛として工夫

續き難しと、須く知べし眞正參禪の祢子の前には塵務なく、世事なき事を、譬へば玆に一人あらんに、往來絡繹たる巷稠人廣衆の中に於て錯つて二三片の金子を遺落したらんに、人目しげしとて棄てや置べき、物騷しとて尋ねずやあるべき、多の人々を押わけかいくゞつても一回尋ね出して我手に入ざらん限りは、心頭休罷する事能はじ、然らば則ち塵務繁しとて參禪を怠り、世事煩はしとて工夫を廢せん人々は諸佛無上の妙道を以て、彼兩三片の黃金程には貴び惜まざる者に非ずや、塵務の上世波の間に於て彼黃金を遺落したりし人の如く專一に究明したらんには誰か歡喜の眉を開かざらんや、此故に妙超大師曰く「見るやいかに加茂のきをひの駒くらべ、かけつかへすも坐禪なりけり」と、眞珠庵主は此意を述して看經すべからず坐禪すべし、掃地すべからず坐禪すべし、茶の實種べからず坐禪すべし、馬に乘るべからず坐禪すべしと、これは是眞正參禪底の古實なり、吾正受老人常に云く、不斷坐禪を學ばん人は、殺害刀杖の巷、號哭悲泣の室、相撲掉戲の場、管絃歌舞の席に入ても、安排を加へず、計較を添へず、束ねて一則の話頭と作して、一氣に進んで退かず、譬へば阿修羅大力鬼に肘臂を捉られて、三千大千世界を遠る事千回百匝すと云ども、正念工夫片時も打失せず、相續不斷なる是を名て眞正參禪の祢子とす、十二時中只面皮を冷却し眼睛を瞠却して、毫釐も人情を交へざれと寔に貴ぶべし、兵法にも亦云ずや、且戰ひ且耕す是萬全之良策也、參學もまた爾り、工夫は且戰ふの眞修、內觀は且耕の至要、鳥の雙翼の如く車の兩輪の如し、內觀の秘訣は、予向に江湖參玄の祢子の爲に夜船閑話に書し了れり、予常に此等の趣を以て祢子の禪病を救ふ事幾人と云數を知らず、中に就て重症必死に向とする者八九を治す、學者必ず內觀と參學と共に合せ並べ貯へて以て生平の本志を成ぜよ、學道の人縱ひ參じて五派七流の大事を究得るとも、若夫れ短壽ならば何の用を成すに堪んや、縱ひ又內觀の力に依て彭祖が八百の歲時を閱すと云とも、若し夫れ見性の眼無んば唯是れ一箇老大の守屍鬼何の好事かあらん、若し又枯坐默照を以て足りとせば、狂て一生を錯り大いに佛道に違せん、只佛道に違するのみに非ず、大に世諦もまた廢せん、何が故ぞ若夫諸侯大夫は朝覲を怠り、國務を廢して枯坐默照し、武夫は射御を疎にし武術を忘れて枯坐默照し、商賈は戶店を鎖し算盤を碎て枯坐默照し、農夫は犁鋤を擲ち耕耘を止めて枯坐默照し、工匠は繩墨を捨て斧斤を拋て枯坐默

照せば、國衰へ民疲れ、賊盜頻りに起つて國それ危からんか、然れば則ち衆民瞋り恨て必ず云ん、禪は窮めて不祥の大兆なりと、殊に知ず古へ禪林の盛なりし時南嶽、馬祖、百丈、黄檗、臨濟、歸宗、麻谷、興化、盤山、九峰、地藏等の諸聖拽石搬土、水薪菜蔬、作務普請の鼓を鳴して專ら動中の得力を求む、此故に百丈大師曰く『一日作ざれば一日食はず』と、是を動中の工夫不斷坐禪と云ふ、此風近代地を拂つて糞、盖し斯いへばとて坐禪を嫌ひ靜慮を謗るにし非ず、大凡一切の賢聖古今の智者、禪定に依ずして佛道を成就する底半箇も亦無し、夫れ戒定慧の三要は佛道萬古の大綱なり、誰か敢て輕忽にせんや、然るに向に謂ゆる禪門の諸聖の如きは、超宗越格眞正無上の大禪定擬議するときは、卽ち電轉じ星飛ぶ、羝羊の眼狐狸の智、如何ぞ敢て窺知る事を得ん、縱ひ又默照枯坐して立地に成佛し、立地に大光明を放つ底の好事ありとも、諸侯大夫士庶民家萬般の公務千般の家事ある何の暇あつてか片時も打坐する事を得んや、此に於て病と稱して公務を遁れ、家業を廢して三五七日一室を閉ぢ戶扉を鎖して、幾枚の蒲團を重ね一枝の香を挾んで坐すと云ども、平生の塵務に疲れて、一寸坐すれば一丈睡り、三合の坐禪には千萬斛の妄想を集む、既にして眼を瞠り牙を咬み拳を握り梁骨を竪起して、坐すれば萬般の邪境頭を競つて生ず、茲に於て顙を攢め眉を皺めて覺えず、悲泣して曰く官途道業を妨げ仕路禪定を障ふ、如かじ官を辭し、印を解て水邊林下寂寞無人の處に在て、恣に禪觀を修し永劫の苦輪を遁んにはと、大に錯り畢れり、大凡人の臣たるの道は主君の飯を喫して主君の衣を纏ひ主君の帶を結で、主君の刀を帶、水も亦他處より擔ひ來るに非ず、耕さずして食ひ、織ずして纏ふ、身體手足髮毛爪齒總に是君恩の所成なり、恁麼にして成長し來つて三四十歲に至つて主君の政事を助け、專ら王佐の才を抽んで君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし專ら君恩に報答すべき時到つて、袖裏に密に念珠をつまぐり、口頭幽に佛號を唱へて、出仕に懶く公務を怠り、方寸の君恩に報答すべき心もなくて、動もすれば病と稱して退んとす、恁麼の志行にして縱ひ三年五歲、陰僻の處に在つて精錬刻苦し、思想盡き情念止に似たりと云ども、肝膽傷み悴け、心上常に恐怖多く、鼠糞の落るを聞ても胸間裂るが如し、大將にも諸卒にも何の專途にか立べき、萬一國家の大事あらんにかゝる人々を引て、一虎口の門戶を堅めたらんに、敵軍潮の如に湧き旌旗雲の如に覆ひ、火炮は雷の落かゝるが如

く響きわたり、貝鐘は山も崩るゝ許り轟き鳴り、戈戟は氷の如く拔連たるを見聞かば、飲食咽に入ず、混震にふるへて手綱とる事さへ叶はで、鞍つぼにすがり平て、動もすれば自ら震ひ落んとす、果は步兵の爲に獲らる、何が故ぞ斯の如くなる、只是三年五歲寂默枯坐の致す所なり、縱ひ熊谷平山などが如き勇士也とも斯の如く修行したらんには豈に震へざらめや、此故に祖師大悲善巧有てこの正念工夫不斷坐禪の正路を指す、諸侯は朝覲國務の上、士人は射御書數の上、農民は耕耘犂鋤の上、工匠は繩墨斧斤の上、女子は紡績機織の上、若し是正念工夫あらば直に是れ諸聖の大禪定、此の故に經に曰く、『資生產業皆な實相と相違背せず』若夫れ正念工夫無んば、老狸の空穴に睡るが如ん、悲むべし此道今人棄て土の如くなる事を、往往に我法二空の黑闇谷を認得て、向上最上の禪なりとして日々眉を皺め額を攢て死蠶の繭中に在が如く、祖庭は遙に雲煙を隔つ、佛經を嫌ふ事は鼠の猫兒を避るが如く、祖錄を忌む事瞎兎の虎聲を聞に似たり、殊に知らず此は是二乘常沒の舊窠、相似の涅槃なる事を、此故に宗峰大師曰、『三年までわれも狐の穴にすむ今ばかさるる人も理り』と悲歎し給ひき、去程に肇公は此れを『困魚窘に止り病鳥栖蘆に栖む』少き安事を知つて、大に安事を知らずと呵し給ひき、眞正參玄の上士は入理の淺深如何ん、見道の精麁如何んに在らくのみ、誰か爾が在家出家を擇ばん、誰か爾が朝市山林を論せん、古への相國公美、大夫陸亙、尙書陳操、都尉李公、楊公大年、張公無盡等の諸君子の如きは、見性わが掌上を見るが如く參玄わが肺腑より出るが如し佛海の深源底を蹈翻し禪河の毒波浪を並呑す、智鑑高明、識量寬大、閻神恐れ走り、野鬼悲しみ潛む、各朝廷の政事を助けて天下を泰山の安きにおく、誰かその堂奧を見ん、張公の如きは官宰輔にのぼり、位人臣の頂を極む、王佐の才豐にして、君信じ臣貴み、士敬し民懷く、天膏雨を下し、君淋字を賜ふ、壽百齡に近うして澤を四海に流へ、民堯年の秋に傲り、人舜日の暄を負ふ、上君恩に報答し、傍ら法寶を鎭護す、寔に天下の人傑なり、此故に言『家に在つて道を成ず張無盡、祿を食み禪を究むる楊大年』と實に千歲の美談ならずや、蘇內翰黃魯直張子成張天樂郭功甫等其餘の老夫が未だ見聞せざる底の諸君子豈にそれ際限あらんや、見道各々林下の人に超過す、常に萬機の政務を佐け、肩を萬國の衣冠に交へて、銀魚金龜の朱紫、貴海中に立ち禮樂射御の間だ進退揖讓の席に臨て、片時も道情を打失する事

なく、遂に祖庭の微玄に徹證す、これ皆正念工夫不斷坐禪の靈驗ならずや、佛道微妙の深恩ならずや、祖庭孤危の威德ならずや、彼の默照枯坐を足れりとし、心源靜寂を禪なりとして、丘壑に餓死する底の類と寔に霄壤の間なり、これ謂ゆる尖兎を得ざるのみに非ず、鷹子も亦打失する者に非ずや、何が故ぞ徒に見性する事能はざるのみに非ず、主恩も亦廢す、太だ憐むべし、寔に知る得力の淺深は進趣の當否に依る事を、工夫若し一人と萬人と戰ふ底の氣力あらば、豈にそれ林下と室家とを擇ばんや、若それ見道は特り林下の人のみに在といはゝ、民の父母たると人の臣たると、人の子たるとは望を其間に絕んか、縱ひ林下に在とも道業密ならず、志念純ならずんば何ぞ室家に異ならん、縱ひ又室家に在とも志願濃厚に操履堅實ならば、何ぞ林下に異ならんや、此故に言ふ「思ひ入る心の中に道しあらば、よしや芳野の山ならずとも」と只兎にも角にも諸大將の心がけ給はらんずる坐禪は、此正念工夫の不斷坐禪に超えたる事は侍るべからず、此は是二百年來廢れ果たる古實にて侍り、何をか正念工夫と云ぞとならば、咳唾掉臂動靜云爲、吉凶榮辱得失是非、束ねて一則の話頭となして、臍輪氣海丹田の下に鐵石の如くに突居え、本尊には卽ち大樹君、諸侯大夫は吾同業影向の諸菩薩衆、近習外樣の大小の諸臣は吾が舍利弗目連等の二乘の大弟子衆、士庶萬民は吾が赤子の如くなる所化の衆生なりと思して、專ら仁恕の心これあるべし、袴肩衣は直に是、七條九條の大法衣、兩口の打物は禪板机案、馬鞍は一枚の坐蒲團山河大地は一箇の大禪床、上下四維十方法界は自己本有の大禪窟、陰陽造化は二時の粥飯、天堂地獄淨刹穢土總に是吾が脾胃肝膽樂府、內外三百壘は朝夕の看敎誦經、千百億の須彌山を束ねて以て一片の脊梁骨とし、其の餘の進退揖讓射御書數皆な是れ菩薩萬善同歸の妙行なりと觀念し、大勇猛の信心を抽で、彼內觀の眞修に和して起居動靜の間に於て、那時か是打失の處、那時か是不打失の處と、時々に點檢する是古今の賢聖眞修の正路にて侍り、去程に子思子も道は須臾も離るべからず離るべきは道に非ずと宣ひ、魯論里仁の篇には『造次も必ず是に於てし、顚沛も必ず是に於てす』とは片時も打失する事なかれとの敎にて侍り此道とは中庸の正道を云へり、正道とは、斯經難持若暫持者我卽歡喜諸佛亦然と說き給ひたる法華經の事にて侍り、法華經とは卽ち正念工夫の大事を云へり、工夫とは自己本有の有樣を指す事なりと覺悟これ有べし、生死の大事を透脫し佛祖の

正眼を瞎却する底の眞實見性の正修にて侍れば、中々容易の事にし侍らず、只肝心は動靜二境の間逆順縱横の上に、於て純一無雜打成一片の眞理現前して、千人萬人の中に在ても萬里の曠野に獨立したる心地あつて、彼龐老が謂ゆる『雙耳聾の如く眼盲の如し』なる境界は時々に此あるべし、是を眞正大疑現前底の時節と申す事に侍り、此時退かず勤め進み給はゞ氷盤を擲擺するが如く、玉樓を推倒するに似て、四十年來未だ曾て見ず未だ曾て聞ざる底の大歡喜あらん、若し人自家見性の眞僞如何ん、得力の精麁如何を知んと欲せば、先須らく謹んで傅大士の偈を見るべし、何が故ぞ、未透底の士は句に參せんより意に參ずべし、已透底の士は意に參せんより句に參ずべし、偈に曰く『空手にして鋤頭を把り、步行して水牛に騎る、人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず、』又曰く『燈籠跳りて露柱に入り、佛殿走りて山門を出づ、』又『懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る』又『張公酒を喫して李公醉ふ、端的を知らんと欲せば北斗南に向つて看よ』寒山子の偈に『青山白浪起り、井底紅塵颺る』『若人見性分明なる事を得ば此等の言句は、吾掌上を見るが如けん、若然らずんば言事なかれ、見性したりと、縱ひ又如上の言句に於て逐一分明に見得徹したりとも、足りとする事なかれ、棄去て者疎山壽塔の因緣、南泉遷化の話、乾峯三種の病、五祖牛窻樞の話、宗峰大師曰く『朝に眉を結び夕に肩を交ふ、我れ何似又本有、圓成國師曰く、柏樹子話に賊の機有り』此等の話頭毫釐も疑ひ無事を得ば、須らく知べし、見處佛祖と同一模範なる事を、參玄の上士と稱して何の愧る處かあらん、何が故ぞ、參禪は各誓つて佛祖の心を明めん事を要す、若し夫佛祖の心を明らめ得ずんば、豈に夫佛祖の語話を明らめざらんや、若し夫未だ佛祖の語話を明らめ得ずんば、須らく知るべし未だ曾て佛祖の心を明らめ得ざる事を、此故に七賢女經に曰く『佛の言はく我が弟子大阿羅漢此の義を解すること能はず、唯大菩薩衆有つて應に此の義を解すべし』と此義とは何ぞや、西天此土祖々相傳し來る底の向上の秘訣なり、此義を了知せしめんが爲に此難透の話頭を留む、此故に眞珠菴主偈あり曰く『天台五百の阿羅漢身、法衣を著て人間に出づ、神通妙用儞に還可し、佛祖不傳の妙は難々』菴主は卽息耕東海七世の孫にして、其知見斯の如く痛快なり、貴ぶべし此時眞風尙未だ落ざりし事を、今時奴郎辨せず、玉石分たざる底の無眼禿奴の部屬、往々に言ふ自心卽ち是佛話頭了して何かせん、心淨ければ淨土淨し、語錄を閲して何の用ぞと、

此等の類を未得謂得未證謂證無慚昏愚の外道とす、竊かに彼が心と稱する所以の者を見れば、八識賴耶愚癡無明の闇窟なり、錯々賊を認て子となし、錯を以て錯に傳へて、祖々傳來の妙道なりとして、人の參禪學道、艱辛淸苦するを見ては、彼と彼とは圓頓の直指を知ず、二乘の根性なり、それとそれとは向上の禪を會せず、聲聞の部類なりと、彼が謂ゆる圓頓の直指點檢し見來れば、楞嚴に呵し給ふ、無明元本なり、彼二乘聲聞の人々には霄壤遙かに劣れり、而して逮得己利の賢聖を捉へて妄りに輕賤す、寔に笑つべし、或は又一般あり、無の字にもせよ、柏樹子にもせよ、一向に手脚の著ざる處を禪道なりと妄想して以て透過とす、此は是一等の惡風俗、膏肓難治の大禪病、錯を以て錯に就く底の不救の傳屍病、總にこれ妄分別眞正參學の上士の如きは則ち然らず、參じ參じて參ずべき無き處に到つて理盡き詞究まつて、技も亦究まり、天涯に手を撒して絶後に再び蘇つて、而して後に囚地一下の安堵は得る事に侍り、左もなくて無明妄想生滅の心行を以て難透難解の秘訣換骨奪命の大事を、彼此沙汰致し侍らんは恐ろしき事なり、佛も生滅の心行を以て實相の法を說事なかれと堅く制し給ひたるぞとて、正受老漢は常々眉を皺められ侍りき然るに雲水往來の僧侶、十が八九大口を開いて傳燈千七百箇の大事に於て毫釐も疑ひは侍らぬなど〻會釋もなく云ひ散す底多し、試に一則を擧揚すれば擧頭を竪るあり、一喝を吐くあり、十が八九は疊を扣く者多し、輕々に拶著すれば見性は存じも依らず、學文の功さへ無くて一文不通頑陋無眼の人々なり、斯く恐ろしき無賴不敵の働きは何れの知識の許より習ひ持ち來るやらん、去程に三五年も斯くわめきあるくよと思へば、天竺へ渡りたるか唐へ行たるか爲に成たるか筵になりたるか、果は音も臭もなく成り行くは幾等と云ふ數を知らず、蟲齒の藥にも成らざる底の悟りなり、惜むべし棟梁の質あつて神俊の才を具足し、參玄力を盡し琢磨功を重ねば、佗後馬祖石頭にし去り、臨濟德山にし去つて、天下の蔭凉樹とも成り去るべき底の人々、苗にして秀んとする肝心の時節、筋なき妄解を習ひ來つて人の參禪學道精神を盡すを見ては、馳求の心止まずと云うて地空を扣いて大笑す、個が頑空無記賴耶の暗窟を認め得て歇得する底の糟見解三日五日眉を皺めば驅烏の童子も亦須らく解すべし、況や他人の處より習ひ持來らんをや、佛祖も手に餘したる者に成て初めは信ずる人も聞これあれども、元來無記暗鈍の瞎凡夫、次第に在家實頭

の人々にだも及ばず、果は檀那施主にも忌嫌はれ、行方知らず成り行くは近年行脚の風俗なり、如何がして眞正の得悟は得る事ぞとならば、塵務繁絮世事紛然七顛八倒の上に於て、譬へば勇士の大敵に取り圍まれたらん時に、匹馬單鎗大勇猛の精神を震つて一方を突き破つて、かけ拔んず時の心持にて正念工夫絶えずりもなく、精彩を著け手脚の下すべき樣もなく、四面空洞として心身ともに消失せたる心地は時時にこれ有る者に侍り、此の時恐怖を生せず、勵み進み侍れば一旦の得力は間もなく豁然たる者に侍り、總じて參學は安念情量と戰ひ、昏沈睡魔と戰ひ、動靜違順と戰ひ、是非憎愛と戰ひ、一切の塵境と相戰ひ、正念工夫を推し立もて行張合にて不慮の省覺はこれ有事に侍り、彼勇施菩薩の如きは大重禁を犯して懺悔すべきに地なし、徒に憂悲惱亂す、忽ち自ら大誓を發して憂惱と戰つて默坐す、忽然として無生を悟る、雲門大師は老睦州に左脚を逼折せられて大悟し、蒙山の異禪師は痢疾を患る事晝夜百次、身體苦しみ疲て前面只死あるのみ、此に於て大誓願を起し苦痛と戰つて死坐す、少焉腸大に鳴動する事數回、痢疾は拭ふが如く、平愈して大に得所あり、大圓寶鑑國師の如きは華園に入つて聖澤の庸山老師に謁して所見を演ぶ山漫罵して打つて追出す、師憤然として煩暑の日、竹林の中に入つて寸糸かけず裸形にして枯坐す、夜に入つて蚊子百萬競ひ來つて身上に集り圍んで師の肌を咬む、此に於て疴痒と戰つて齒を切り拳を握つて凝坐す、正氣を打失せんとする者殆んど數次、闘らず豁然として契悟す、昔し調御世尊は雪山に在つて苦修六年、皮骨連立蘆芽膝を穿つて臂に至り、懸可大師は臂を斷つて自の本源に徹し、玄沙は泣々象骨を下つて蹶躓して左脚を破つて徹骨徹髓し、臨濟は痛棒を喫して破家散宅す、これ古今の榜樣なり、三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖なし、今時の如く、徒に空く胸臆の凡解を恃んで自己脚跟下の大事を了簡分別して以て足れりとせば一生妄想の魔網を破る事能はじ、小智は菩提の妨とは此等の輩に侍り、中古禪門の盛なりし時、正念工夫心掛け給ひし士大夫は、公より退るの閑暇の日は如何にも健かなる士卒七八箇を從へ、大馬に跨つて兩國淺艸などに等しき人立多る所を用有げに馳せ廻り給ひける由、是は動中の工夫親疎如何ん得失如何んを矯し試ん爲なりける由、去程に蜷川新左衞門は鬪諍喧嘩の席に望みて大雷力を得、太田道灌は陣中に在つて組布れながら和歌を詠じ、正受老漢は其里へ

狼の數限りもなく來り集つて讎をせし時に所々の墓原に七夜まで坐し明したりと、是は彼等に頸筋耳の根など吹嗅れんずる時に正念工夫相續間斷ありや否やを矯し試みん爲なりと申されき、書寫の性空上人は常に悲歎し給ひけるは世念濃厚なれば道念輕微なり、道念濃厚なれば世念輕微なりと宣ひき、つら〳〵思ふに果しもなく管々しき繰言、披見も六箇布思すべき者を、世念濃厚に書續けたるに似たれども、鵠林半死の殘喘長庚曉月頼みなき命に何の不足の處有りてか尾を搖かして憐みを乞んや、寵遇を權勢の門に栽るにし非ず、聲名を世波の底に釣るにし侍らず、是を序に人々の道情をも助けよかし、法門無量誓願學と申す事の侍れば菴居の人々の他後法施の一助ともなれかし、且千兵は得易く一將は求め難しと申す事も侍れば、書中少にても取べき處あつて幕下の道情をも助け、增て禪學成熟し給はばその餘波必ず左右の人々に及ばん、左右若其恩波に浴せば其澤必ず一城の人々に及ばん、一城若その恩波に浴せば其澤必一國の人々に及ばん、何が故ぞ、一人の心は千萬人の心なる故に、終に天下國家に及ぼし、上王化を佐け下庶民を利せん、然らば則ち宇宙の間那箇の盛事か是に如んや、これ老僧が平生の微志なり、若然らずんば何の追從にか終夜孤燈を挑げ老眼を摩挲して果しもなき問ず語りを繰返し繰返し書送り侍るべきや、道理ある事に思さば捨置ず熟讀し給ひて內觀養生の秘術に契ひ給ひ心身共に壯健にして速に叢禪得力囮地一下の歡喜をも得給へかし、次に願くは此內觀の加被力に依つて武內の宿禰浦嶋子が長壽をも保ち給ひ、上天下の政事をも輔けて萬民を憐撫し、內法寶を衞護し他迄法喜禪悅の樂を究めて法成就にも至り給へかしと思ふ許りの寸志にて侍り、老夫壯年より思ひ付侍りける は正念工夫の勝手には武士の身の上程よき事は有べからず、武士は明け暮れに身を懦弱に持事叶ず、出仕にも附合にも如何にも嚴重なる者なれば髮結立て、上下か又は袴羽織にて大小手挾み、折目高なる起居の上には正念工夫は溢れ建るゝ程潔よく打見ゆ、增てよき駿馬の太く逞きに打騎つて百萬騎の敵軍をも人無き處を通る如く乘破り〳〵驅崩すべき顏色は天晴見事なる不斷坐禪かく工夫しもて行たらんには、出家は一年にて得力これあらば武士は一月、出家は百日にて得力是あらば武士は三日にも利運は開かるべき者を、志なく案內知り給はぬ故に、生唆磨墨とも云ふべき大馬の背上に闇々と八石五斗の無明妄想の重荷を建れ〳〵積載ていかめ

しげなる貌曲して、あたりを拂つて乘連々々打通り給ふは近頃以て殘念なる風情ならずや、かく大切なる場所をば遣過して我々は仕官の身なれば坐禪などする暇隙は勤の内は存じも寄ぬ事なるぞなど宣ふ人々は、海中に在乍ら水を尋ぬる心地こそすれ、四十二章經には人に二十の難あり、豪貴にして學道難しと、誠なる哉、王侯より庶人に至るまで、榮耀富貴の人々は數限りも無事に侍ど、來生の苦輪を恐れ出離の要道を尋ね求むる人々は世界を一掃して一人も見え侍らず、是定めて金口の所說に違はじとの心なるべし、只富貴の上にも富貴を貪ぼりて足る事を知らず、榮耀の上にも榮耀を求めて飽事もなき世の中に何の善緣ぞや、幕下のみ獨富貴を見る事空華の如く、榮耀を見る事夢幻に等しく、常に無上の大道に賢慮を傾け、予が艸廬を顧み給ふ事既に三次、昔し照烈の武侯が艸廬を顧み給ひしに等し、彼は三國を並さん事を圖り、此は三界を越えん事を求む、その趣は同じといへども志は大に異なり、昔し武侯は鋤を棄て、命を委ねて以て三顧に答ふ、老僧豈に三顧に報ずるに片言を惜まんや、如何なる法理を書贈りてか幕下勇猛の精神を增長し、躍ずも宗門向上の大事を透過し、怡悅の眉を開き給へかしと祈る許りに、かなはぬ文章にて斯まで書續けたるにて侍り、去ながら宗門向上の大事は中々文字言語の力にても誘引すべき事にし侍らず、然れども修行の趣向錯まり給はずば自然に大事に契當し給はでやあるべき、專使一昨烏、急に回鞭を執る、貴答を裁するに暇あらず、頻りに癡禮の緩怠を恐る、幸にして昨日宜顯廬原に歸る事を告、歡踊に堪へず、押へ留て鄙酬を修す、睡らざる者一夜、晩陰より書して天明に至れば醜書既に五百行を得るといへども、猶情實を盡す事能はず、老來諳記の力無うして前に書しけるを後又書し、始め演けるを終りに亦演ぶ、字々烏焉多く、行々魯魚の差ひあれども、再看するに暇あらず、裁封して以て顯が歸袖に附す、恰かも楚鷄を籠て丹山の鳳なりと稱して王侯に進むる者に似たり、電照の後請ふ丙丁童に與へて彼をして秘重せしめ給へ、若し又書中取るべき處あらば再び淸書して以て進獻せん、幕下書記の人々に命じて繕寫三五冊年少顯發の近習三五輩、及び和田國堅が輩に分ち與へて時々に熟讀せしめ、閑暇の日は幕下の股肱、堤中澤の人々及び故老の舊臣良醫六七輩を召され園み坐して聽受せしめ、幕下も亦蒲團上に且聽且つ睡つて道情を保養し給ひ、半日の餘閑を樂み給はゞ法喜禪悅の境致自然に現前して、四王忉利の歡樂、夜摩兜率の

勝界も亦羨むに足ず、況や世間穢濁充滿の宴會、輕浮傲奢の逸遊、八音耳を蠱かし、萬舞眼を昏す底の無慚無愧の幻戯をや、豈に顧るに足んや、此趣を以て能々勘辨これ有て、近習をも外樣をも我八萬の大衆なりと思して、密々に誘引し給はゞいつしか上求菩提下化衆生の本願に契つて、塵中衣冠希有の善知識、誰か知ん劒を帶し鞍馬に跨つて往來しながら、時々に諸佛無上の法輪を轉じ給はんとは、然らば則ち强將下に弱兵なしと申す事の侍れば、龜氏慶喜身子滿慈等の有力の武臣は野村田村等の人々を初め、旗下には幾人も出來侍るべし、萬一天下の事故あらんに、大將も諸卒も通身一團の眞元氣百騎を卒して萬騎に對すといへども從來生ある事を見ず、豈にそれ死あるべけんや、恰も鐵石を突立て行が如し、靜なる事山嶽の如く疾事颱風の如し、向ふ處破らずと云ふ事なく觸る處碎かずと云ふ事なし、譬へば保元平治の亂軍中に在とも無人の曠野に立が如けん、それこれ之を眞の丈夫の志氣と云ふ、君恩と法恩と並べ流て士卒を撫す、誰か幕下の爲に身命を惜まんや、生死の恐るべき無れば涅槃の求むべきなし、十方を目前に消融し、三世を一念子に貫通す、皆是かの正念工夫の力に依れり、かくの如なる時は士敬し民懷き、君仁に臣正し、農に餘の粟あり婦に餘の布あつて、上下こもゞ〳〵道を好んで、國脈泰山の安きが如く萬世を經て衰滅なけん、然ば則ち人間天上の善果これに如べからず、宰官身得度者、卽現宰官身の大士は豈にそれ異人ならんや、穴賢穴賢。

延享第五戊辰暦仲夏二十五莫　　沙羅樹下闍提老衲書

遠方の病僧に贈りし書

便の度毎に貴書並に傳語、者回欽禪人便に又々芳書、殊更野外珍らしき水沉一封親切の至りに候、貴兄事貴境へ飛錫致され候も吾等勸め申し侍ば何とぞ道業怠慢なく囚地一下の歡喜をも得られよかしと好便り待入候處に、夏頃より氣分惡く今程延壽堂に入れ候旨、旦夕案じ暮し候、者回、欽禪人物語りには左程の事にもこれなく發足の二三日已前に入堂致され候由如何計り嬉く存じ候、氣分は如何樣の重病沉痾なりともそれは世間に打任て、自分は隨分正念工夫肝要と心がけこれあるべ

く候、病中苦思の間に仕拔たる修行は他後如何樣の逆緣に逢ても退惰これなき物の由、承はり及び侍り大切の時節ぞと思して努々油斷これある間布候、三十年前去る老漢病中の僧に對して物の語せられけるは、世に智慧ある人の病中ほど淺猿しく物苦き事はなき事なるぞや智慧ある儘に來方ゆく末の事ども際限もなく思ひ續け、看病の人の好惡を咎め、舊職同伴の間闊を恨み、生前には名聞の遂げざるを愁ひ、死後は長夜の苦患を恐れ、鄕里を思ては羽翰の生せざるを憤り、神明に祈ては感應のおそきを瞋り、目を打塞ぎて臥居たるは殊勝に物靜なれども、胸中は九國の合戰よりも騷しく、心上は三塗の衆生よりも苦し、三合の病に八石五斗の物思ひなるべし、かく病狂れ死したらんには後の世の有樣こそ推量られ、物思ひして藥にも養生にもなるためしならば吾々も打より手傳ひて物思ひ得させんなれども、痛く物思へば心火逆らひ上り肺金痛み費へ、水分枯渴し寒熱止事なく、自盜の二汗は次第に繁くて果は命根も亦保ち難きに至る、是皆平生の志行懶惰にして少し許りの病を妄想心の手傳ひて夥しくそだて上たるものなり。然れば病に害せられたるにはあらず、妄念に食殺されたるなるべし、寔に妄念は虎狼より恐ろしきものなり、虎狼は戸牆さしたる內へは入事は叶はぬものなり、妄念の狼は坐禪靜慮の床の上、七條九條の袈裟の中へも亂れ入奴なり、或病人はほろ〳〵と打泣て、吾等程薄福なる者はなきぞとよ、偶々に受難き人身を受け、貴き僧形を得ながら辨道の功をも積ず、佛道の光をも見ずして朽果んずる事の口惜さよなど泣口說たるは殊勝に愛らしけれども、是も懈怠油斷の大不覺者のなれの果なるべし、大凡辨道工夫の爲には病中程よき事はこれあるべからず、古來賢達の人々の巖谷に身をよせ、深山に形を隱し給ふ事は世緣を遠ざけ塵務を捨離して道業純一にはげみ勤んが爲なり、然るに病中を除いて別の山谷なく、病中を去て外の深山はあるべからず、病中の人は托鉢作務の勞倦を遁れ、使僧知客の應對も省き廣衆雜話の喧慣もなく、僧堂の治亂を知らず、常住の豐儉を見ず、死活は天運に投かけ、饑寒は看病の人に打任せて、只狗猫など惱伏たる體にて何の合點もなく、何の了簡もなく、只一向に蒲團上の事を忘却せず、自己の正念を打失せざるを第一として、生も亦夢幻死も亦夢幻、天堂地獄穢土淨刹悉く拋擲下して一念未興已前萬機不到の處に向つて是何の道理ぞと時々に點檢して正念工夫の相續を肝心とせば、いつしか生死の境を打越悟迷の際を超出して金剛

不壞の正體を成就せん事これ眞箇不老不死の神仙ならずや、人界に出生したる思ひ出ならずや、圓顱方袍の威德ならずや、佛道微妙の靈驗ならずや、眞正參禪の人の前には吉凶榮辱逆緣順緣盡く道業を助る糧となり、懈怠惰弱の人の前には假初の塵事芥子許りの病氣も夥しき障りに仕なして果は宿業のわざなり般若に緣こそなけれなど、種々の道理をつけて遠からぬ般若を遠ざけ根もなき業障を種そだてゝ一生を錯る程の苦々しく情なき事はなきぞとよ、古來より重病を受ながら疑團打破の人々は間多き事なるぞかし、中比去老和尙の重き腫物を受給ひて背後は爛冬瓜の如く腫塞がりて目もあてられぬ病惱なりけるに湯藥食事進め參らするより外は人をも近づけ給はで目を打塞ぎて惱み伏し給ひけるに、ある時法眷の人々兩三輩見來りて見問上りける處へ外療人來りて土肉とらんとて膏藥に藥加へ參らせたれば今夜は常よりも痛ませ給ふ事も侍りぬらん、かゝる貴き御身に心なき腫物の出來りて日數多く惱ませたる御いとしさよ、去にても今日よりは愈し肉の上りて目出度快氣ましまさんを待奉る許りなるぞやとて撫勞り申ければ上人は濃く寢入たる人の、目打覺たる御顏ばせにて人々はよくこそ見え來り給ふもの哉、包みはづべき事ならねば物語して聞せ申すべきぞ、誰々も近寄給ひてよ、扨も此度の病惱は悉老が爲には貴き善知識なるぞや、腫物の陰にて二十年の非をしり、四十年の素懷を遂たる事の嬉しさよ、重病受ざりし已前は悟に事缺たる事も無、修行に不足もなき境界なりと思ひて修行も打捨臆面もなく供養など受け會釋もなく起居振舞けるが思はずもかゝる重痾に沉みて五體も煎あぐるが如く骨節も碎け離るゝ許りなれば氣遠く心塞りて黑繩衆合焦熱叫喚の苦患を纔に形體に集め上せたる心持にて悟も見解も何地へや行ぬらん、半點の力をも得ずして殘るものとては想念と苦痛とのみなりければ、あな口惜、かく惱み苦み死したればとて誰恨むべき事にしも非ず、辿も助かるまじき命なるに是より正念工夫に取掛りて苦惱や勝べき工夫や勝べき心の長の及ばん程は責戰はんずものをと思ひ定めて、傑烈の大志を憤起し勇猛にはげみ進けるに一度も二度も苦しく絕入る心地しけるが打返し取直して間斷もなく進みける程にいつしか戰ひ勝て晝夜のさかひもなく寐寤の隔もなくて終には打成一片の工夫現前して此十四五日以來は想念も苦惱の雲霧などのはれ失たる心持にて大安樂なるのみに非ず、眞正生死不二佛魔同體の眞

理に契當し唯有一乘金剛不壞の奥義に徹底したるぞかし、今日より後は如何樣の逆緣重障なりとも菩提を妨ぐる事はあらじと覺ゆるぞ、人々も少し許りの會處得力あらんを賴み給ひて、茲はの時に至つて恐老などが如く興さまし給ひそ、返々も健ならん時に正念工夫怠り給ふべからず、賢くも煩ひける事よ、箇程目出度事や有べき、思へば〳〵此度の腫物は愚老が爲には上もなき善知識ならずや、然らば則ち如何なる供養をもし如何なる讃嘆をも述度思ふに次第に愈行事の名殘惜さよとて打笑給ひけるを其時隨侍申しける僧の物語しけるを聞たるぞかし、又或眞言家の驗者なりと聞え給ふ法師の御房の重き傷寒に惱給ひて夜晝の分ちもおはさで、うなりどめき給ひけるを弟子の小法師の小黠氣なるが打聽てあの御房の日頃の氣情にも似給はず、吾等を呵責し給へる時の言葉にも似給はで、あのうなり、叫び給ふ事よとて打笑ひければ上人も打笑て、やをれ小法師よ三日已前のうめきは叫喚泥犁の苦痛、三日已後のうめきは最大微妙の法音なるぞ、慢り笑ひて誹謗正法の御罰を蒙るべきぞと云はれければ小法師かへして左許り早く手の裏翻す如くに成佛はし仕給へるにやと申しければ、さればとよ佛も懈怠の衆生の爲には涅槃三祇にわたり勇猛の衆生の爲には成佛一念に在と說給へるぞや、去し頃病苦の堪難くて次第に性體もなく惱み行まゝに來生の業苦を恐れ、生前の行相を悔て泣明しけるが思ひ直して大日不二の觀念に入り目を閉齒を切りて間もなく勤め進みたれば貴やな、いつしか病惱は搔拭ひたる如く打消え病臥たる形骸は瑜伽微妙の寶印と現じ圖らずも金剛不壞の正體を成就し此うなりどめく聲は三密不思議の大陀羅尼と冥合し寢たる床は毘盧本有の大道場と打ち成り四重圓壇の大曼荼羅は心上に嚴然として目前に粲爛たり、嬉しや忽ち有情非情同時成道、草木國土悉皆成佛の素懷を遂たるぞや、小法師原が聞知べき事にしあらねどかく有難き慧日に逢たる目出度さに物語りはするぞかしとて、嬉し泣に打泣〳〵語られけるが後には道業比類もなくおはしける由、其外異國にも祿宏の湯厄蒙山の痢疾何れも病に依て道心進み給ひける人々は間多きぞかし、和僧達は左許りの小病にけぎたなく云甲斐もなき有樣かな、などかは昔の人々にも劣るべきや、只今死なんずとも正念工夫目出度て死に給んには眞の佛祖の兒孫たるべきぞ、かくいへばとて重病受んを待つて參禪工夫せよとにはあらず、けなげに健かならんずる人々も日夜に怠らず、彼人々の如

く用心したらんには十人は十人、百人は百人ながら學道成就せざる事はあるまじきぞ、兎にも角にも正念の工夫程貴ぶべく重んずべき事はなき事なるぞとよ、正念の端的未だ悟入なからん人々は眞正の導師に見えて第一に決定し給ふべし、決定あらん後は四威儀の間正念工夫打失せざるを第一とすべし、大慈禪師曰く『那時かは是れ打失の處、那時か是れ不打失の處、一切處に於て是の如く點檢せよ』と、これは是從上の諸聖 正念工夫親切の樣子なり、これ則ち萬古不易の正修なり、是を直心とも佛性とも菩提とも涅槃とも無位の眞人とも云ふなり、此の眞人は空劫以前空劫以後、少しも病氣なく鼻もしみたる事はなき人なるぞ、是を法華には久遠實成の古佛と稱歎し給へり、南嶽の隨意願行に昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、濁世末代名觀音と釋し給へるも此の眞人の事なるぞかし、此の人を供養し此の人を尊信し、此の人に親近して打失せずんば何れの病か治せざらん、何れの道か治せざらんや、佛法中には病疲れたる老女、瘦悴けたる老夫なりとも正念工夫間斷無んば無病堅固の有力の人とす、縱ひ七尺八尺の身財あつて身子の智圓かに滿慈の辨饒にして三經五論を講じ得、五家七宗の奥義を究め盡して力周鼎をあげ、眼寰宇を空じたりとも正念工夫なからん人をば臭爛膨壞の死人とする事なり、あひかまへて容易に心得べからず、寔に保ち難く寔に守り難きは正念工夫の大事なるぞや、末代の悲しさは人毎に名聞の心強く利養の心盛にして道心ありげに見せかけ莊り立れども、正念工夫決定の人は得難き事なり、增て正念工夫相續不斷の人を求るに千人萬人が中に一人もなき事なるぞ、老僧十三歲にして此事ある事を信じ、十六歲にして娘生の面目を打破し十九歲にして出家三十五歲にして此山に遁居す、今年六十五に垂とす、中間四十年萬事を放下し世緣を杜絕し、專一に相守て漸く五六年來、眞箇正念工夫の相續は得たりと覺えるぞ、檀那施主に輕薄追從し利養名聞を希望貪求しながら參禪工夫せんとは寔に片腹痛き事なり、往々に師學ともに當住の潤澤を榮耀とし多衆鬧熱を宗風とし、辯才利口を智慧と思ひ衣食の結構を佛道に充つ、尊大美麗を道德とし人の信仰を法成就の時なりとす、悲みても尙悲むべきは得難き人身を名聞の奴婢に責使ひ、上もなき佛心をば妄緣の塵埃に吹埋ませて此の招請、彼この供養には似合ぬ綾羅絹帛を惜げもなく著飾り、得もせぬ禪道佛法を會釋もなく說散し、無智の白衣に對しては孔明子房が辯口を逞うし、苦汗の財施を

掠め取には目連鶖子の神通を得たり、暫時の名利を偷み求めて因果を信ぜず報應を恐れず、臘月三十日孤燈獨照半生半死の際に到つて泣うめき、七顚倒八狂亂、手脚の置處なく、あがき死にして弟子門徒の面ぶせになり給はんは違ひはあるまじきぞ、今の人々の心ばへにて禪道修行の人といはゞ何國の誰か佛祖ならざる者有べきぞ、不思議の因緣にてかゝる物すごき處に來りて一夏をも明し給ふ者を何しに惡き事教へ申すべきや、世間は知ず老僧が破屋の內には甘く心易き佛法はなき事なるぞ、只兎にも角にも修行者は吾身を高ぶり吾身を重んじ吾身を負する程惡き事はなき事なるぞや、一年狼の多く來りて此麓の里へ寃をなせし時に恐老は七夜まで處々の墓原に坐し明したるぞ、是は彼等に取圍まれ耳の根咽ぶえなど吹嗅んずる時に正念工夫間斷ありや否をためし試みん爲なり、蛇にもせよ水神にもせよ男子たる者の思ひ立ち取かゝりたる事を遂ずや置べき、仕果ずやあるべきと思ひ定めて如何なる飢寒をも忍び堪へ如何なる風雨をも堪凌ぎ、火の底に入り氷の底に浸りても佛祖の開き給ひたる眼を開き佛祖の到り給へる田地に到りて宗門の大事を參歇し末後の奧義を徹了して十方參玄の衲子を惱害し、釘を拔き楔をうばつて以て佛祖の深恩を報答すべしと、歷劫不退の大誓願を憤發し給はゞ病ひ何れの處にか湊泊せん、古德の修行に一人として疎かなるはなき事なれども中に就て玄沙慈明などの幾多の艱辛を歷給へるは取分貴く覺ゆる事なり、油斷し給ひたらば果して相似の修行者になり給ふべきぞ、但しその相似とは似せ者と云ふ事なり、誰やの人か不足なき身に似せ者と成んと思ふ人はなき事なれども好法友の手引を受給はず道心深からずして少し許りの會處などを賴みて口を利、人にも貴ばれ給はゞ、見事なる似せ者なるべきぞ、操履を愼み正念を守りて事足り給はずば如何なる野の末山の奧にても飢死寒え果給ふべし、黃金は菰に包みても黃金なれば實の佛祖の兒孫神明掌を合せて尊信し龍天頭を低て擁護すべきぞかし、諂ひ屈て財產を積み重ねて千僧の葬儀七寶の莊嚴あつて幡蓋目を奪ひ道場心を驚したりとも閻王怒眼を張、牛頭鐵鞭を撚つて相待んは苦々しかるべきぞなど、戌の上刻より丑みつ頃まで物語りせられけるを傍に侍りける兩三輩只片時許りの心持にて感涙肝に銘し慚汗肌を侵し侍りき、其後病中などに此物語りを思ひ出し侍れば忽ち慚愧の心起りて病苦も輕く成行樣に覺え候故、あらまし書付け遺す事、延壽

堂中の人々病中の道情の一助ともなれかしの心にて侍り、去乍ら如上は正受老漢平生受用底の施藥にして甚だ一味單方攻擊の冷劑なり、茲に又一方あり、尤も虛弱の人に宜し、心氣の勞疲を救ふ事甚だ妙なり、上昇を引下げ腰脚を温め腸胃を調和し眼を明かにし眞智を增長し一切の邪智を除く事大に効あり、輭酥丸一劑、諸法實相一斤、我法二空各一兩、寂滅現前三兩、無欲二兩、動靜不二三兩、絲瓜の皮一分五錢、放下著一斤、右七味忍辱の汁に浸す事一夜、陰乾して抹す、例の通り般若波羅蜜を以て調錬し丸じて鴨卵の大さの如くならしめて頂上に安著す、初心の行者は藥種如何、斤量如何を觀ずべからず、只色香微妙の輭酥鴨卵の大さの如くなる者我頂上に頓在すと觀ず、病者此藥を用ひんと要する時、厚く坐物を敷、脊梁骨を竪起し目を收めて端坐し徐々として身心を淘定めて須く思惟すべし、大凡生を保つの要、氣を養ふにしかず、氣盡る時は身死す、民衰る時は國亡るが如しと、此語を三復し了つて正に此觀を成べし、彼頂上に安著する輭酥鴨卵の如くなる者、其氣味微妙にして遍く頭顱の間を潤し浸々として潤下し來つて兩肩及び雙臂兩乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁臀骨、次第に沾注し將去る、此時胸中の五積六聚疝癖、塊痛、心にしたがつて降下する事水の下におもむくが如し、歷々として聲あり、遍身を流へ潤して下つて雙脚を温む、足心に至つて卽ち止、行者再び此想念をなすべし、彼浸々として潤下する所の餘流積り湛へ暖蕩して恰も世の良醫の種々妙香の藥物を聚め是を煎湯にして浴盤の中に盛湛へて我臍輪以下を漬浸が如しと、此觀を作時、唯心所現の故に鼻根希有の香氣を聞、身根妙好の輭觸を受、身心共に調適なり、忽ち積聚を消融し、腸胃を調和し、肌膚光澤を生じ、大に氣力を增す、若時々に此觀を成熟せば何れの病か治せざらん、何れの仙か成ぜざらん、此は是養性の秘訣にして長生久視の妙術なり、此方始め金仙氏に起つて中頃天台の智者大師に到つて大に勞疲の重痾を治し、且、其兄陳秦が必死を救ふ、澆末難遭の靈方なり、宜哉此道今人知得する底希なる事を、老僧中頃道士白幽に聞、効驗の遲速は行人の勤と怠とに在る而已、怠らざれば長壽を得、道ことなかれ、鵠林老去つて大に老婆禪を說くと、恐くは知音の一見して手を拍して大笑するあらん、何が故ぞ、『亂に臨まざれば眞臣の操を見ず、財に臨まざれば義士の志を知らず。』

法華宗の老尼の問に答ふる書

老夫當秋より法華講演の刻み、心の外に法華經なく、法華經の外に心無と申し談じたりしを聞及ばれ、怪き事に思して書通を以てなりとも、右の道理を申し越し其外にも有難き事どもこれあらば書付遣し候樣にとの御事これによつて大略の趣書付進じ候間何遍も繰かへし、披覽致され能々得心これあるべく候、成程我等常常申し談じ候通り心の外に法華經なく法華經の外に心なく、心の外に十界なく、十界の外に法華經なし、是卽ち決定至極の法理にて恐老に限ず、三世の如來も十方の賢聖も極處に到つては皆々かくの如く說給ふ事にて法華本文の大意は大段此等の趣を宣給ひたる事にて此外にも八萬四千の法門を設け給ひたれども皆權敎の說にして方便の間を出ず、至極に到ては一切衆生と三世十方の如來と山河大地と法華經と悉く不二同體なる法理を諸法實相と說給ひたる是卽ち佛道の大綱なり、大凡世尊一代頓漸秘密不定の法門有て無量の妙義をのべ給ひて五千四十八卷の諸經あれども其中の至極の旨は法華一部八卷の中に促り法華一部六萬四千三百六十餘字の極意は妙法蓮華經の五字に促り妙法蓮華經の五字は妙法の二字に促り妙法の二字は心の一字に歸す、心の一字は却て何の處にか歸すとならば『兎角龜毛別山を過ぐ畢竟如何、限り無き春を傷しむる意を知らんと欲せば盡く針を停めて語らざる時に在り。』さる程に妙法の一心は展る則んば十方法界を含容し、收る則んば無念無心の自性に歸す、此故に心外無法とも說給ひ、三界唯心とも諸法實相とも說給ひぬ、其極處に到つては法華經と云ひ無量壽佛と云ひ禪門には本來の面目と云ひ眞言には阿字不生の日輪と云ひ、律家には根本無作の戒體と云ふ、皆是一心の異名なりと覺悟致さるべし、然るに妙法蓮華經の五字一心の源を指とは如何なる證據かあるとならば、取も直さず直に此妙法蓮華經の五字よきたしかなる證據にて侍り、如何となれば、妙法蓮華經とは一心不思議の德を讚歎したる題號にて一心本具の性德を指顯したる言葉なり、子細は大凡手蹟にもせよ、畫圖にもせよ、誰々は琴の妙を得たり、誰々は琵琶の妙を得たりと云れんずる人も其妙とは如何なる場所を申す事に侍るぞと問れたらん時に如何なる辯才利口の人にても中々言葉に演る事は叶ざる事なり、去程に父子不傳の妙とて吾大切なる一子にさへ敎る事は能は

ず、妙處に到つては吾とても覺ず知ずの處より働き出る事なり、人々具足の妙法の心性も左の如し、只今此文を披覽し或は笑ひ或は談じ、緒環の絲繰出す如く果しもなく五人に逢ても十人に逢ても少しも間違もなく働きもて行事不思議なる有樣ならずや、然るに何物か斯の如く自由には働く事ぞと內に向ひて尋ね求るに、聲もなく臭もなし、然ば一向に頑空無記なる物にして木石の如くなりやと思へば例の通り、千變萬化自由自在にして有と云はんとすれば有に非ず無と云んとすれば無に非ず、言語道斷脫洒自在なる處を假に且く妙法とは名付給ひたる事なり、蓮華とは蓮の泥土の底に有つても少しも泥土に汚されず、妙なる色香を具足して失はず、時を得て麗しく咲出るは此妙法の佛心の衆生に在つても穢れず減らず佛に在ても淨からず增さず、佛も凡夫にて在し時は一切衆生に少しも違はせ給はで五欲の泥土に汚され給ふは左ながら蓮の泥中に在が如し、其後雪山に於て、本具の心性を發明し給ひて希有なる哉、一切衆生如來の智慧德相を具すと高聲に唱へ給ひて頓漸半滿の諸經を說宣三界の大導師と成給ひて梵天帝釋に尊信せられ給へば蓮の泥中を出で麗しく發けたるが如し、蓮の泥中に屹度具足して居たりし色香を水上に咲出すが如く佛も無量恒沙の法を宣給へども、外より持來り給ふに非ず、凡夫にておはせし時屹度具足し給ひし佛性の有樣を其儘に宣給ふ者なり、衆生にておはせし時も成佛の本懷を遂給ひて後も一心の妙法は少しも添減なきが如く、蓮の泥中にありし時も咲亂れたる夏も少も變遷なきに等し、故に假用ひて且く一心の妙法に譬へ給ひたる者なり是卽ち人々具足の佛心を妙法蓮華經と名づけ給ひたる儘なる證據ならずや、さて又經とは常と云へる字義にて常住佛性の義を顯し給ふ者なり、常住佛性とは此心性は佛に在つても增もせず、衆生に在つても減じもせず、天地と同根萬物と一體にして曠劫以前曠劫以後少しも變易なき處を指て、經とは說給ひたるなり、然れば妙法は佛心の體、蓮華經は佛心の妙法を譬に設けて讃歎し給ひたるにて畢竟一心の異名なり、一實二名餅を歌賃と云つた程の事なり、然れば眞實の法華經は手にも把れず、目にも見えざる者なるを如何にやは受持すべきぞ、如何樣に心得たるを法華經の行者とは云べきぞとならば、盖し三種の根機ありて下根の行者は黃卷赤軸を把へて讀誦書寫解說し、中根の行者は自心を觀照して此經を受持し、上根の行者は眼に此經を見徹し自心の面を見が如し、是故に涅槃經に曰

く『如來は目に事性を見たまふ』とは是なり、法華經の行持は大乘至極の眞修なれば中々容易の沙汰にし非ず、易き事は甚だ易く、難き事は甚だ難し、去程に本文にも此經難持、若暫持者、我卽歡喜、諸佛亦然と說給ひて至極大切の行持なり、天台の智者の曰く、『手に卷を執らず、常に是の經を讀み、口に言音無けれども遍ねく衆典を誦し、佛、說法せずして恒に法音を聞く、心に思惟せずして普く法界を照す。』と是眞正誦經の樣子なり、試に問ふ、卷を執ずして誦ずる底是那箇の經ぞ、自心、妙法に非ずや、思惟せずして徧く法界を照すと是何物ぞ、眞正の蓮華に非ずや、是を無字經と云ふ徒に黃卷赤軸のみを把へて法華經なりと偏執するたぐひは彼藥帖上の記を祇つて藥なりとして病を治せんと計る者の如し、大に錯り丁れり、若人此經を持んと欲せば十二時中胸中一點の缺曇りもなく、不思善不思惡の當體を正念工夫の眞修と云ふ、去程に拾得子の偈にも『無爲の理を識らんと欲せば、心中、絲をも掛けざれ』と、かくの如きの正修は三世の如來も一切の智者高僧も、此處より大悟得道し給へる事にて萬古不易の大綱なり、一念不生前後際斷頓悟成佛の直路なれば如來の此經難持と宣給へるも理り至極ならずや、大凡三敎の聖人も實處に到つては大段同じ、其進修の淺深精麁に依つて得力の高下はあるべけれども最初の一歩は趣等し、儒門には此處を至善といひ、未發の中と云ひ道家には虛無自然といひ、神家者は高間ヶ原と相傳す、天台には一念三千止觀の大事とす、眞言にては阿字不生の觀法と云ふ、家々の祖師達の坐禪をすゝめ誦經を勸め給ふも誦々唱々て一心不亂純一無雜の田地に到らしめん方便ならずや、永平の開祖も行持あらん一日は貴ぶべきの一日なり、行持なからん百年は恨むべきの百年なりと宣ひき、寔にたま〳〵受難き人身をうけながら何の行持の心もなくて逢難き一生をやみ〳〵と犬猫などの何の覺悟もなくて朽果つる如く苦しかりし三塗の苦里へ懲もなく立歸らんずる事口惜く淺猿き境界なりと涙を落すべき事なり、然るに難き事は甚だ難しとは我得て疑ふ事なし、易き事は甚だ易しとは如何なる故ぞとならば若人此經を手を放て行住坐臥にやす〳〵と持んとならば、誓つて一回法華眞の面目を見屆くべしと願ひ給ふべし、法華眞の面目を一見したらん上は咳唾掉臂、動靜云爲、草木瓦石、有情非情、悉く皆妙法蓮華經と現成する故に十二時中此經と冥合す、何ぞ別に持つ事を用ひんや、眞の法華を一見せずして法華經を持たんと擬するは、譬

ばこゝに一人あらんに手に一椀の水を擎て、こぼさじ動さじと晝夜に愼み守りて養ひ增んと願ふが如し、縱ひ一生擎げ守つて十成なるも養ひ增す事は存じもよらず、自家の飢渴も亦救ふ事能はず、彼二利の願行に於ては望を其間に絕ものなり、何の用を作にか堪んや、若又眞の法華を一見して此經を持つ人は彼一椀の水を江湖に投ずるが如し忽ち三萬六千頃の煙波と混合し、德澤を大湖と共にして飛ぶ者走る者翔る者蠢く者、同く共に行て呑んに盡る事なし、眞の法華を見ざる人は一椀の水を擎る人の如し、他を利する事能はざるのみに非ず自己も亦利する事能はじ、眞の法華を一見する人は彼一椀の水を江湖に投ずるが如し、覺えず諸佛の大寂滅海に投入して諸佛の眞法身戒定智慧と冥合して忽ち賴耶の暗窟を擊碎し、大圓鏡光を放出して塵沙劫を經て大法施を行ぜんに終に乏き事なし、一見法華の功德の廣大なる事上下四維等匹なし、人あり一切諸經論を熟讀せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、無量の寶塔を修造せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、百千の佛を造立せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、三界の秘密を學得せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、彼黃卷赤軸のみを捉へて法華經なりと偏執せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、口に百千萬部の法華經を讀誦せんよりは須らく眼に一回眞の法華を見るべし、是實に成實不壞の高談なり、如何して法華眞の面目を徹見すべきぞとならば、先須らく大疑團を起すべし、何物を指てか法華眞の面目とはするぞ、自己本有の妙法の一心なりと聞からに自心を見るにしかず、自心とは如何なるものぞ白き物とやせん、赤き物とやせん、是非〳〵一回見得すべきぞと猛く甲斐〳〵しき志を震つて大誓願を起して晝夜に究め見るべし、自心を參究するに行持は樣々多き中に法華經の行者ならば法華三昧の行持に越たる事や侍るべき、法華三昧の行持とは今日より思ひ立て憂につけ、つらきにつけ、悲きにつけ、嬉きにつけ、寢ても覺ても、起ても居ても、只管に法華の首題を南無妙法蓮華經〳〵と問もなく唱へらるべし、此首題を杖にも力にもして是非とも法華眞の面目を見屆くべしと深く望をかけて唱へらるべし、願くは出る息、入る息を題目にしてほしき事よと隨分親切に斷間もなく唱へらるべし、唱へ〳〵て怠らずんば久しからずして心性たしかに大石などを淘居たる如くにて安住不動如須彌山の心地はほのかに覺えあるべし、其時にすて置す、隨分唱へらるべしいつしか聞及し正念工夫

の大事に契當して平生の心意識情都て行はれず、金剛圈に入るが如く瑠璃瓶裏に坐するに似て、一點の計較思想なく忽然として大死底の人と異なる事なけん、纔かに蘇息し來らば覺えず、純一無雜打成一片の眞理現前して立處に法華眞の面目に撞著して忽ち身心を打失し本門壽量久遠實成の如來は目前に分明にして推ども去じ、此時に當つて天台の法性寂然、寂而常照の寶所に投入し、眞言の阿字不生の惠日に照され、律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し、淨土の卽心往生極樂報土の素懷を遂、水鳥樹林念佛念法念僧の妙莊嚴をまのあたり見屆け娑婆卽寂光の正眼を開き草木國土悉皆成佛の田地に至らん事、毫釐も相違あるべからず、然らば則ち人中天上の善果何事かこれにしかんや、是卽ち三世の諸佛出世の本懷なり、一遍の題目は禪門一則の話頭と其功異なる事なし、此等の趣き三世十方の賢聖扶桑八萬餘座の神慮もおはする者を老僧が毫髮ばかりもあやぶむ處あらば何しに罪作りにくだ〳〵しき事を書贈り侍るべきや、少しも疑ひ給ふべからず、此上猶又怠り給はずば禪門にいはゆる左手を握て中指を唆等の心地も次第に明かなるべし、今時往々に道、參禪無益なり、話頭了じて什麼かせん、卽心卽佛の直指なれば念の起るを忘ず、念の止たるをも喜ばず、山賤の白木の合子、只生れ付たる自性の儘なるがよきぞ、漆つけねば剝色こそ無れとて日々徒に盲龜の空谷に入るが如くし去つて以て足りとす、此は是天竺の自然外道の所見なり、恁麼にして佛心向上の宗旨なりと稱せば七村裏の土地も亦掌を撫して大笑すべきぞかし、何が故ぞ、これ總に長沙の謂ゆる識神を認得する底の癡人ならずや、楞嚴に賊を認て子となす、終に元淨明の體を知る事能はずと呵せられしは此等の部類なり、殊にしらず如來は四果の聖者の諸漏已盡し、我法の眞理に達し神通具足し名稱普く聞え給ふをさへ禪を知りとは許可し給はず、故に經に曰く『我が弟子大阿羅漢この義を解する能はず、唯大菩薩衆のみ有つて應に此の義を解すべし、』とも說給へるものを見性の功さへなくて、妄に自ら尊と稱す、是何の心ぞや、人は只兎もあれ萬緣を抛擲して唱ふるに越たる事はなき事なり、去なから題目ばかりの利益なりと偏執し給ふべからず、眞言に限らず、淨土に限らず、何れも優劣あるべからず、淨家の人々は專唱稱名の功力に依つて是非々々一回唯心の淨土己身の彌陀の妙相を見屆けでやぬべきと決烈の大志を憤起し頭念を救ふが如く間もなく唱へ進みたらんに佛も去

此不遠と說給ひたる者を、などや七重の寶樹八功德池の有樣を見屆けずやあるべき、眞言の人々は陀羅尼微妙の威力に依つて是非とも阿字不生の大日輪を拜し奉るべしと、禪門に於て一則の話頭を擧揚するが如き精進勇猛の憤志を震つて繰たらんに高野大師も不轉肉身と唱へ給ひたる者を、などかは彼金剛不壞の正體を磨出さずや有べき、何れも死後を待つて利益に預んと打延し給ふは不覺油斷の至り覺束なきものぞかし、遠き事とな歎給ひぞ、八重の潮路を隔てたる唐土天竺の事を見給へ聞給へと云にこそ、遠き事とは歎くべけれ、自心を以て自心を見る吾瞳を以て吾瞳を見るより近き事には侍らずや、深き事とな恐れ給ひそ、九淵の潭の底、千尋の海の中なる物を見給へ聞給へと云にこそ深き事とは恐るべきなれ、吾心を以て吾心を見る、吾鼻を以て吾鼻を嗅より近き事には侍らずや、世は末世なれども法は更々末世ならず、末世なりとて打捨顧み給はずば寶の山に入りながら自ら飢凍を苦しむが如し、末世には去事は及ばぬ事とな恐れ給ひそ、遠は恵心院の僧都、近は赤澤の卽往、山城の圓愚、何れも稱名の力に依つて右の素懷を遂給ひたるぞかし、法然上人も此望は深くおはしけれども先達なき故に翼短うして長空に翔らざる心地なりと宣ひき、末法澆季の驗にや、近代惡き風俗起りて出家も在家も見習ひ聞習ひになりて今時妙法の佛心などを見んと計るは鰻が木にのぼらんとする心地なるぞとて闇々と一生を過行事淺ましき心ばへならずや、是は左ながら過分の田地を讓れたりし百姓の子共數多在べきに其内一人輭弱不肖にて然も口利て小賢しげなるが曰く、今時吾々風情の柔者共が先祖昔の人々の眞似美して農業耕作などして大勢の妻子眷屬など養育せんと計は及びもなき事なり、それは左ながら家鵝が鷹の眞似して鶴と組で落さんと羽づくろひするが如く、跛龜が鯉魚の眞似して瀧上りせんとて頭さし伸るに似たる事ぞ、片腹こそ痛けれ、左しもて行たらんには必ず鎌にて水をなん呑べきぞ、存じもよらぬ事なるぞとよ、つもりても見よや和殿原や我等如きの疲孩子者どもが、芝野を見が如なる草生茂りたる田地を草刈切立、耕し水載、鉏上種子かし早苗し、植つけ耘り、刈干こきあげ、糠すり繩なひ、菰あみあげ高あぐらして詠め見んずる事、あだや通途にて遂らるべき事かは、それは昔物語なるぞ、あらぬ樣なる端立なるぞや、夫よりは安々と拔入祖して世涉るすべはある事ぞや、かなたこなたあるきても五日三日宛の日は送らるゝぞかし、肩有

つて著ずと事ふ事なく、口有つて食ずと云ふ事なしと聞ものを、殊更何某の國、何某の侯は仁德厚おはして我々如き者をば扶持し給ふと聞なるに、果はそこへなり行べきぞ、斯許よき事のあるになに歎く事の有べき、手足をなん動して自力にて口過さんとかゝるは又なき癖事なるぞ、心慮ひなしそ、初より下手に組むがよきぞ、働だてなしそ、かせぎ振見するな、一二枚ある古著も脱すて孤をなん被りて我々は告る方もなく居ど立どに迷ひたる貧窮下賤の者に侍り、哀れ助け給ひてよと打泣々往たらんに慈悲深き世の中なるものを、など口一つばかりすぎ兼る事のあるべき、少しも疑ふ心なうて、兎せよ角せよと敎られて悅び勇て誰々も兼てより斯なん思つる事よとて生れもつかぬ貧者に成て一生を送るに似たり、此等の輩を自暴自棄の人と云ふ、臨濟大師は甘つて下劣人と作ると呵責せられたり、是は左ながら魚の水中にありながら我等風情にて水など見んと計は及びもなき事なりと歎き、鳥の長空を翔りながら、今時長空などを見んと計るは存じもよらぬ望みなりと悲むに似たり、殊にしらず十方法界の中眞如ならざる國土なく妙法ならざる衆生なき事を、惜むべし、唯心の妙法寂光淨土のまつたゝ中に住ながら生前には娑婆なりと偏執し、衆生なりと妄想し、死後には地獄なりと見錯り、無間なりと泣悲む事皆是目前に充溢たる妙法の佛心、前後に澄湛たる法性をば及もなき事なり、存じもよらぬ望みなりとて打棄筋なき妄想情識の料簡を賴みて空く暮せるより起る事なり、惜みても惜むべきは、三界無比の妙法醍醐上味の經典なれども、敎の、如く修行する人なき故に文車に稠載たる世の並々の書籍と共にあり甲斐もなくやみ〳〵と朽果穢土淨刹と見違ひ、三塗六趣と思ひ成事歎の中の歎ならずや、問ふ、敎への如くとは如何なる敎へをか指や、四安樂の法門か、五種の法師の行持か、曰く然ず方便品に謂ゆる開佛知見道故出現於世の本文、經中の眼目なり、番々出世の如來、無量恒沙の法を說給へども何れも一切衆生の佛知見を開かしめん爲なり、然らば佛知見の望なくて如何なる法を行じたりとも諸佛の本懷に契事は努々これ有べからず、開佛知見とは一心の妙法を發明する事なり、悲みても悲むべきは今末世澆季の世の中なれば、一心の妙法の沙汰はすたれ果て、思ひ〳〵の有樣なり、たま〳〵有るに似たるも此頃は皆々敎へ事になりて云甲斐もなき風情なり、大日經にも如實に自心を知るべしと說給ひたるものを顧る人さへなけれ、法華經の敎に隨はず、妙法は何地に

有もしらでうろ〳〵として西ぞ東ぞとて混さわぎに騷廻りて、佛道なりとて月日を送るは、譬へば此に大福長者あらんに、初め多少の艱難を經て限もなき田地を切開きて爾等も此田地を耕して我如く大福長者になれとて大勢の子供に優劣もなく、過分の田地を讓與へたりしに、父の敎に隨はずして何れも他國に流浪し、人の門戸に傍乞食するもあり、我は鏡とぎなりとて瓦を把て磨行もあり、粟稗の鳥を追てすくみ居るもあり、長者の子なりとて自身は乞食非人の體にて亂りに人を輕しむるもあり、田畑の帳面ばかり毎日繰かへして田畑の有處も知らぬもあり、帳面さへあれば恐る〻事はなきぞとて恣に惡行を行ずるもあり、我は長者の作法を知りたりとて飢渴て作法ばかり行ずるもあり、田畑の有處もしらで晝夜に田畑〳〵と叫もあり、田地の廣大なるを少し許り見付て大憍慢して婬酒食肉心に任せて亂行なるもありて、長者の心に契たる子は一人もなきが如し、田地とは一心の妙法を指なり、帳面とは諸經論を云ふなり、人の門戸に傍て、乞食するとはかの開佛知見の大事は自身艱難刻苦して冷暖自知する事なるを末世になりては人の敎を受て正體もなき事を聞覺て是を大悟とする事なり、これは法華經の中の窮子ならずや、方等部にては四果の聖者をさへ二乘凡夫と呵責し給しものを、人々の敎を給ふ通りの埒もなくたわいもなく、繩にもかづらにもかゝらぬ事ならば、何しに佛は六年まで雪山に閉籠て皮骨連立し絲を以て瓦を編立たる如く瘦衰へ、蘆すゝきの膝を突貫て臂まで穿ち拔たるをも覺え給はん、目のあたり雷の落て牛馬を打殺したるをも御覺えましまさぬ程、苦吟し給ひて初めて佛知見を開き給ひたるは如何なる事ぞや、蓋し佛道も上古は大いに難く今時は大いに易しとするか、且蘿蔔を煨し芋栗を煮るが如く初めは硬く、後には輭かなるものとするか、今時の易きが是ならば古への難きは非ならん、古への難きが是ならば今時の易きは非ならん、古の難きは苦吟する事は甚だ苦吟す、總に發轉する時は忽ち賢聖佛祖たり、那邊を透過し今時を透過して毫釐も觸著すれば電轉じ星飛ぶ、今時の易きは殊勝なる事は甚だ殊勝なり、望み見る時は畫圖の賢聖僧の如し、總かに發轉する時は依然として困魚箔に止り、跛鼈甕裏に落つ、今時を透らず那邊を透らず、拶著すれば瞎驢氷稜に上る、今時の易きを取んか、古への難きを取んか、如何に末世なればとていひ甲斐もなき有樣なり、古人も末々は禪法も正體もなく成果べきを知給ひけるにや、妙心を瘡紙に

求め正法を口談に付すとは兼て悲み云ひ置れたるなるべし、此事もし紙授口傳にて濟べくば神光の臂を斷ち、玄沙の足を傷ひ、法心は頭腫れ法燈の涙を落す事はこれあるべからず、人は兎もあれ角もあれ、我は是非〳〵晝夜に問もなく首題を唱へて眞の法華のあり樣を見屆くべきぞと親切にさへ唱へ給はゞ、雪山には入らず頭は腫ずとも、決定必定自性の妙法蓮華は麗しく開け侍るべし、たゞ肝要は自心の妙法を見屆ずば置まじきぞと望み深き程貴き事は無事なり、如來世尊も自心の妙法を見屆け給はざりし間の流轉常沒の凡夫に少しも遜ましまさで、生死往來し給ひき、末後雪山に於て自心の妙法を見付給ひて初て正覺を成就し給ふ事なり、兎を磨とは八識賴耶の無分別識を認て本來の面目なりと合點して、妄念さへ無れば其迹は鏡の如くなる佛心ぞ、只鏡の萬境を寫して鴉は黑く鷺は白く、柳は綠に花は紅に少しも錯らず照せども、毫釐も迹を留ぬ如く時々に勤めて拂拭せよと敎られて晝夜に妄念を拂ふは兎を磨き粟稗の鳥を逐に同じ、是を識神を認むと云ふ、山河大地を照破する光明の發する事はなき事なり、此類の修行は昔より大唐にも間多き事なり、南嶽大師の馬祖の庵前にて兎を磨き給ふも馬祖に此意を知らしめん爲なり、去るに依つて長沙大師の偈に曰く『學道の人、眞を識らざることは、只從前識神を認むるが爲に、無量劫來生死の本、癡人喚んで本來人となす、』と是故に慈明眞淨息耕大慧等の祖師齒を切つて觝排して親切を盡されし事なり、其外の諸師の有樣は逐一擧するに及ばず、大凡三世十方の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖はなき事なり、是萬古不易の大綱なり、見性とは法華眞の面目を見屆る事なり、此望なくて種々の事して佛法なりと心得るは船頭もなき大船に幼童多く競ひ乘て何地へよるべき湊もしらで、かなたへ漕が好ぞ、此方へ漕が好ぞとて思ひ〳〵に櫓械推たて昨日は東の方へ潮に隨ひて漕ぎ漂ひ終に海中を出る事能はず、其船中へ案內しりたる船頭忽ち打乘り磁石を見定め楫を把る時は一日の內にも思ふ湊へ著く事なり、船頭とは見性の大志なり、磁石とは正法の指南なり、楫とは平生の志行なり、如何して妙法の湊へは漕入べきぞとならば一切の行人は佛を求め祖を求め、涅槃を求め淨土を求めて外へ〳〵と漕出る風情なり、故に轉求むれば轉遠く轉尋ねれば轉遙なり、眞正妙法の行者は卽ら然らず、自己本有の妙法は如何なる物ぞと推究て佛を求めず祖を求めず、彼妙法は內に在とやせん、外にありとやせん、內外中間にありや、又靑黃赤白なり

や、是非〳〵一回見届けずば置くまじきぞと、十二時中一切處に於て間斷なく、猛く甲斐〳〵しき氣槩を推立流石の者が思ひ立たる事を遂ずや置べき、仕果ずやあるべきと寢ても覺ても起ても居ても捨おかず、晝夜に點檢して或時は打返して恁麼に尋る底是何物ぞ何物ぞと尋る儞は是阿誰と進み入る、是を獅子人を咬の法と云ふ、心の妙法は如何〳〵とばかり尋ねもて行を韓盧塊を逐と云ふ、唯兎にも角にも萬事を放下して無念無心になりて南無妙法蓮華經〳〵と唱へ給ふべし、此外別に有難き法理の老僧が書送るべき事ありと思さば上もなき錯りにてこれあるべく候。南無妙法蓮華經

延享第四丁卯暦仲冬廿五日

右管々布、長書、披覽も六箇布侍るべけれども、此れを序でに菴居の人々も一覽せらるべければ法施にもなれかしの心にて書續けたるにて候、至極の旨は自心の妙法を是非〳〵見届くべしと思して絶間もなく首題を唱へ給へとの心にて候。

沙羅樹下老衲書

『老夫此の草書を裁し畢つて竊かに看讀す、時に一僧あり予が傍に在り、是れ予が舊友の僧なり、讀んで法華眞の面目と云ふ處に到つて長吁して曰く、師復た止啼の金葉を掃ひ給ふか、予勃如として曰く何と謂ふとぞ哉、儞吾が草書を以て黃葉と爲る乎、是れ金なり黃葉には非ず、此の書の如きは法華本文の大意を汲んで書す、儞指して以て黃葉と爲す、是れ法華を謗する者に非ずや、誹謗正法の罪累、懺悔を容るゝに所なし、儞那處を指してか以て黃葉と爲るか、僧低頭して曰く今近遠住菴の諸子各英豪の才を懷いて枯淡を忘れて坐し、軀命を抛つて修す、舊宅を借り廢社に潛んで十年五歲する者は師の惡毒の苦乳を甘つて分離するに忍びざる者なり、今歲狂浪田園を洗ひ粒米を留めず、民家各妻孥を携へて竊かに他方に往かんと欲す、予杳かに嗟悼すらく、已ぬる哉鵠林住菴の緇侶、一箇も錫を留むる無く禪苑の荒蕪之に過ぐべからず、近ごろ一僧あり曰く飽煖を探り鬧熱を慕うて朝秦暮楚する底の庸常下劣の族は閣いて論せず、眞實辨道、透過を求むる底の舊參の上士は一箇も去らず、其の精進勇鋭前月に十倍せり、五箇黨を爲し十箇絆を結んで此の水邊彼の林下に食せず寢ざる者或は五日或は十日、盡く言ふ此れは是れ凶年飢歲を守る、佛法の格式叢社の古實なりと、瘦せたることは考妣を喪する人の如く、衰

へたることは重痾に罹れる人に似たり、凍餒困苦、鬼神も亦涙を落すべし、波旬も亦掌を合はすべし、今時諸方の叢林、佛閣の高貴、僧舍の嚴麗、二輪並べ轉じ、四事重ね備ふ、而るを顧みずして何の心ぞや、貧困飢凍、窮餓交煎の巷に在つて耳に聞く所は師の惡言苦罵、口に投ずる所は佗の粟麥粃糠、心に可なる底の事一滴も亦無し、然るに彼れ亦五尺の身を容るゝに所無き所以の輩に非ず、盡く是れ今時叢林頭角の上使なり、只各透過を求むるに急にして其の餘は總に顧みざる者なり、予聞き得て大に歡踊して曰く且喜すらくは佛法大に人を得べきの時なりと、師も亦宜しく向上の鉗鎚を提起して實參實悟の上士を求むべし、隨他意の說に涉つて第二機を以て人を接せば大に人を損せん、必ず他の悟門を妨げて蟲の氣息ある底の漢子も亦得ること能はず、予が如きは三十年前、師の提携に依つて精錬刻苦、多少の艱辛を喫し盡して本有の佛性を見得し法華眞の面目を徹了して一念三千の妙理、三諦卽一の奧義に於て毫釐も疑惑無し、師亦吾を以て法華眞の面目を見得したりと爲して許可し給ひき、予も亦心に竊かに謂へらく天下既に定まりぬ、近頃師の碧巖錄を評唱し給ふを聞くに恰も田夫の杳かに階下に立つて中書堂上諸君の公議を聞くが如し、瞽者の眸を張つて湘水の佳景を窺ふが如く、聾者の耳を欹て、洞庭の雅樂を聞くに似たり、此に於て大に力を失して慚汗腋に滴つて傷涙胸に滿つ、從前の苦修尺寸の功を立せざる者にあらざる者に似たり、初め吾が得力、師と一般なりと謂ひき、今予を以て師に擬するに疲羊の駿驥を指して吾が父なりと稱するが如く、跛鼈の神龍を指して吾が師なりと道ふに似たり、心に竊かに師を以て吾を雎し給ふ者と爲して懊々として樂まず、師今又法華眞の面目の事を書す、一見して怨恨乍ち發す、故に言ふ又是れ止啼の金葉を包むと亦宜ならずや、住菴の諸子も亦今往々此の歎息あり、況んや師も亦諸人辛勤して得る所を指して棺木裏の禪と稱するをや、予が曰く寔に其事あらん、嗟子來り進め、爾老松の丘壑に秀づるを見る麽、枝柯九霄を衝き根盤三泉に徹す、上に百尺の絲あり下に千歲の苔あり、勢ひ蚊龍の霧を飈んで長空に上らんと欲するが如し、下に青々たる一寸の松あり猶甲子を戴いて立つ、指にても拔くべく爪にても截つべし、此の二つの物を指して他に問うて曰はん、是れ什麼ぞと、他必ず言はん、共に是れ松なりと、唯歲月を積んで養ふと養はざるとに在るらくのみ、言こと莫れ歲月是れ可なりと、爾若し一箇の死棺材を守

つて鬼家の活計を作し了らば縱ひ積んで驢年を重ぬと雖も甚麽の用を作すにか堪へん、古へ張氏の子あり、兄を張五と稱し弟を張六と曰ふ、兄弟糧を裹んで遠く百里に往く、中路にして各金一鋌を拾得せり、大に歡踊す、而して後索居互に死生を知らざる者此に三十餘歲矣、六その兄の事を思うて四方に尋逐して其兄の所在を認め得て杳かに來つて相訪ふ、其兄の室を望めば水磨列り鳴り轂車轟き過ぐ、牛馬槽櫪を列ね家鵝溝瀆に滿つ、簫竿遠く流へて歌聲抑揚す、佳賓の往くあり高客の來るあり、六、震ひ恐れて直に門閫を越ゆること能はず腰を折り膝を屈めて畏る畏る名刺を出せば雙童來り迎ふ、客貌秀麗態度高雅なり、跼蹐して從ひ進めば屋壁の麗、堂宇の美、康蘂が室に入るが如く石奴が堂に上るに似たり、魂蕩け股戰いて坐せん所を知らず、少らくあつて張五婢妾に扶けられて錦張を挑げ出づ、侍女圍み羅つて綺羅魂を驚かし繡紋目を奪ふ、金爐千花の芳を吐き玉佩百禽の音を流ふ、頭紅羅の帽を穿ち、肩紫錦の袍を掛く、綠熊の茵に坐し紫檀の机に凭れり、奢の眸り虎の如く抗れる肩鳶の如し、六、一見して覺えず頭地に到る、身體委み縮つて啼泣して休まず、頭を擧げて正しく視ること能はず、張五徐々として告げて曰く吾が弟何ぞ來ること晚つる、胡爲れぞ其れ此の如く郎當なるや、六、淚を拭ひ畏々問うて曰く、吾が兄今何れの侯に仕へ誰が家の恩顧を受けてか此の如く尊大、此の如く富貴なるや、張五の曰く我れ人の臣たる所心の者に非ず、我れ人の恩顧を受くる所以の者に非ず、我れは昔者金を拾へる者なり、六が曰く兄の拾へる所その數幾百筐の金とか爲るや、大車の重ね積みげる者か、巨船の裀て載せたる者か、天の墜す所か地の埋む所か、遺忘する底誰とか爲る耶、張五が曰く然らず、三十年前我れと儞と何某の路上に於て拾ふ所の者なり、六曰く怪しい哉纔かに一鋌の金にして此の富貴を得ることや、六此に於てか大に惑ひぬ、恐くは候白黑の流亞乎、盜跖の部屬乎、若し果して然らば我は早く辭して出でん、出て謀つて九族の難を遁れん、豈坐らにして死亡を待つ者ならんと云ふ、張五閭々とし笑つて曰く儞向に拾へる所の者今其れ何れの處にか在るや、博奕して失へる者と爲る乎、且花酒の惑に罹れる者乎、六が曰く宜なる哉、我が郎落たるを見て我が兄の甚だ怪めることや、願くは左右を避けよ、吾れに一言あり密々に之を告げん、張五讒かに目擊すれば妻孥皆退く、六畏々近く進みて曰く吾れ豈博奕し及び花柳を顧みる者ならんや、吾が貧しきは金を失

はざるにあり、吾が瘦せたるは金を護るが爲なり、吾が兄向に言はずや、儞能く保護せよ亂に費し用ふると莫れと、吾は吾が兄の命を負かざるを以て足れりと爲る者なり、張六既に彼の金を得てより十重包裹して尊重保護すること和珠を懷くが如く夜光を持するに似たり、行くにも亦携へ歸るにも亦携ふ、蚤莫盗竊の難を恐れて三十年未だ曾て心を放して眠らず、人の窺ひ知らんことを恐れて友を絶ち交を避けて故さらに貧窶の人と爲りて肩百綴の鶉衣を掛け首千補の烏帽を穿つ、人皆吾れを棄て顧みざるを吾は却つて此を以て幸と爲す、金を費し盡さんことを恐れて妻孥も亦養はず、常に獨子にして往き獨子にして歸る、常に人緣無き處に竄れて舊舍を尋ねて臥し破廟を求めて眠る、終に客店に入つて宿せず、曾て糟糠にだも飽くこと無し、常に人の門戸に傍うて乞ふ、久しく立つて與へざれば希に歌ふのみ、彼の金今此に在りと云つて左右を顧みること再三、飽くまで人無きを窺つて頸、垢賦の破布囊を弛め再三推し戴き十重の包裹を解き左右を顧みて金を出して之に示して曰く、兄の拾へる今に在りや、願くば出して舊交を紹がしめよ、張五笑つて曰く三十年前儞に別れて久しからずして彼の金を打失し了れり、六、勃如として熟張五が面を見、且吾が身を顧みて曰く、兄は失へり吾は護れり、吾は護れり兄は失へり、失へる兄は是の如く尊大なり、護れる吾は此の如く貧凍なり、或は目を張り或は頰を攢めて板齒唇を咬んで沈吟休まず、少くあつて曰く、護るが非にして窮餓し、棄つるが是にして豐饒ならば後れたりと雖も我も亦棄てんか、願くば之を棄つるの道を聞かん、張五大に笑つて曰く、儞が拾へる所は金にして黃葉に劣れり、身を潤すこと能はざるのみに非ず却つて其の身を窮餓し其の心腸を傷賊す、若し黃葉を包めば來往重からず、貧窶を現ずることを須ひず、茅舍の裏に在つて妻子を養ひ枕を高うして睡臥せんのみ、儞が護する所は之を棄つる所以の道なり、我が棄つる所は之を護する所以の道なり、我れ初め金を得、儞に別て後楊州に行く、金を以て黃葉より輕しとし放つて大に鹽を買ふ、鹽を賣つて足らず、其息を束ねて大に綿絮を買ふ、綿を賣つて足らず、其息を放つて大に麻絲を買ふ、麻絲を賣つて足らず其息を放つて大に粟米蔬果魚肉を買ふ、人を吳楚蜀魏の間に放つて山海の珍、水陸の美普ねく載せ聚め大店八九を開き、臣商三百人鐘を鳴し鼎に食む、大凡錢を握つて張五が門に入る者糟糠菜薪、鹽醋酒醬此に闕がずと云ふと無し、財を積むこ

と巨萬、陶朱を陜しとし猗頓を屑とせず、倉庫廩庾、甍を並べて列り立て、千頃膏腴の地を求む、松杉の山、梓楠の苑數十を買ひ得て今居を此の處に占む、是れ吾が向に黄葉より輕しとして金を棄てたる所以の道なり、六、立つて再拜して曰く我が兄萬歳、欽み冀くば疾病無からんことを、兄の捨は捨に似て久しく護を勤む、小人が護は護に似て久しく捨を勤む、捨護互に勤めて利害大に異なり、寔に知る智者の手に入るときは則ち黄葉も亦眞金なり、愚者の手に落つるときは則ち眞金も亦黄葉なり、自ら恨む、三十年心肝を惱まし氣力を盡して實に方寸の功果を立てずと云つて聲を放つて哀號すと、參學も亦斯の如し、初め儞が得る所即ち是れ人々本具の性唯有一乘法華眞の面目なり、我が得る所も亦人々本具の性唯有一乘法華眞の面目なり、此を見性と言ふ、是の性初め見道より終り種智成就に到るまで毫釐も變遷なし、一鋌大冶の精金の如し、故に言ふ初發心時便成正覺と、敎家に此れを十住の初住と言ふ、轉だ最後の重關あり、誰か知らん祖庭猶天涯を隔つること在ることを、往々此の一片の所見を擔つて乃ち曰く、我今既に朕兆未發以前佛祖未興の處に向つて立つ、者裡全く生死無く涅槃無く煩惱無く菩提無し、一代藏經は不淨を拭ふ故紙、菩薩羅漢則穢の如く參禪學道閑妄想、古則公案眼中の翳、者裡今時無く那邊無く佛を求めず祖を求めず、饑飯困眠何の欠少する所か有らんと、者般の見解佛祖も亦醫することを得ず、只日々安閑の處を求めて今日も只恁麼死獦狙地にし去り明日も亦恁麼死獦狙地にし去る、縱ひ恁麼にして無量劫數を歷とも依然として只是れ一箇の死獦狙、什麼の用を作すにか堪へん、如來は此れを拚癩野干の身に比し給ふ、鵞嵎は呵して蚯蚓の智と爲し淨名は蕉芽敗種の部類と曰ふ、長沙は此れを百尺竿頭不動の人と言ふ、臨濟は湛々たる黑暗の深坑と言ふ、是を見地不脫と言ふ、謂はゆる機、位を離れざれば毒海に墮在する者なり、只一片の所見を執して措磨淨盡して一生を錯り了る、彼の張六、一鋌の金を懷いて困倦逼迫去死十分なるが如をし、慈明、黄龍、眞淨、晦堂、息耕、大慧の諸老、力を盡して攘斥すれども救ふこと得ず矣、老夫初め七八歳の時母に隨つて敎院に入つて僧の摩訶止觀の中地獄の說相を講ずるを聞く、其僧辯才あり、叫喚無間焦熱紅蓮の苦境を演ぶ、恰も目のあたり見るが如し、一堂の緇素盡く寒毛卓豎す、歸り來つて子が平生の殺業を計るに身の置き所なきが如し、動止悚然肌膚栗々たり、竊かに普門品と大悲神呪とを把つて

晝夜讀誦す、一日母と共に浴に入る、母湯の熱からんとを求めて婢をして頻りに薪を添しむ、浸々として火氣肌を衝き浴盤大に鳴る、乍ち地獄の事を想念して聲を放つて悲號す、哀聲四隣を動かす、此れより竊かに出家を求む、父母許さず常に寺に行いて經を誦し書を讀む、十五歳にして出家自ら誓つて曰く願くは肉身にして火も燒くこと能はず水も溺らすこと能はざる底の得力を見ずんば死すとも休まずと、晝夜孜々として誦經作禮、病惱或は針灸の間に於て點檢するに其の痛痒平生と異なること無し、心甚だ歡びず曰く我既に父母に背いて出家、未だ方寸の功果を見ず、我れ聞く法華は一代の經王にして鬼神も亦欽む、往々幽冥苦界の人、人に託して救を求むるに必ず法華を言ふ、熟謂ふに他人の讀誦するすら且其苦患を拔く、況んや自身讀誦せんをや、且又經中必ず甚深の妙義あらん、此に於て親しく法華經を把つて窮め見るに唯有一乘、諸法寂滅の文を除いて餘は皆因緣譬喩の說なり、此の經若し者般の功德あらば六經諸史百家の書も亦功德あるべし、豈特り此の經をしも云はんや、大に懷素を失ふ、實に十六歳の時なり、十九にして因に正宗贊を讀む、巖頭和尙末後盜賊の爲に害せられて叫聲三里の外に徹すと、予謂へらく、徹することは甚だ徹す、如何んせん盜賊の戈矛を免れざることを、嗟、巖頭和尙の如きんば僧中の麟鳳佛海の蛟龍なるすら且然り、死後豈獄奴の杖子を免るゝこと を得んや、若し果して爾らば參禪學道何の益かあらん、佛法恁麼に虛誕なり、悔ゆらくは身を以て此の妖邪の隊裏に投せしことを、今夫れ如何すべき、此に於て大に懊惱す、食はざること三日永く望を佛法に絕つ、佛像經卷を見ること泥土の如し、專ら俗典を讀み詩文を弄して少しく憂愁を忘る、二十二にして若州に往いて虛堂の勝會に交り乍ち省覺す、其後豫州に在つて佛祖の三經を讀んで大に猛省す、晝夜無字を提起して片時も休まず、只愁ふ純一無雜打成一片なることを得ざることを、又愁ふ寤寐恒一なること能はざることを、二十四歳の春越の英巖の僧舍に在つて苦吟す、晝夜眠らず寢食共に忘る、忽然として大疑現前して萬里一條層氷裏に凍殺せらるゝが如く胸裡分外に清潔にして進むこと得ず、退くこと得ず、凝々呆々として只無の字有るのみ、講筵に陪し師の評唱を聞くと雖も數十步の外にして堂上の議論を聞くが如し、或は空中に在つて行くが如し、此の如き者數日、乍ち一夜鐘聲を聽いて發轉す、氷盤を擲碎するが如く玉樓を推倒するに似たり、忽然として蘇

息し來れば自身直に是れ巖頭和尚三世を貫通して毫毛を損せず、從前の疑惑底を盡して氷消す、高聲に叫んで曰く也太奇也太奇、生死の出づべき無く菩提の求むべき無し、傳燈千七百箇の葛藤、一揑を消するに足らず、此に於て慢幢山の如くに發え憍心潮の如くに湧く、心竊かに謂へらく二三百年來予が如く痛快に打發する底之れ有るべからずと、一段の所見を荷うて直ちに信陽に行く、正受老師に謁して所見を演べ偈を呈す、師左手に言偈を握つて曰く者箇は是れ學得底、那箇か是れ見得底と云つて右手を伸ぶ、予曰く若し見得底の師に呈すべき有らば須らく吐却すべしと云つて嘔吐の聲を作す、師云く趙州の無字作麼生か見る、予が曰く無字甚麼の手脚を著くる所か有らん、師指を以て予が鼻を拗つて曰く多少か手脚を著け了れり、予擬議す、師大笑して云く此の守藏窮鬼子と、予顧みず、師曰く儞恁麼にして足れりと爲るか、予曰く甚麼の不足の處か有らん、師南泉遷化の話を擧す、予耳を掩うて出づ、師曰く闍黎、予頭を回らす、師曰く此の守藏の窮鬼子と、一夕師納涼して檐端に坐す、予亦偈を呈す、師曰く妄想情解、予高聲に叫んで曰く妄想情解と、師卽ち予を捉住して瞋拳二三十終に堂下に突き落す、時に五月四日の夜、霖雨の後なり、予泥土の上に在つて偃臥して氣息共に盡く去死十分、動も亦得ず、師檐上に在つて呵々大笑す、少らくあつて蘇息し起き來つて作禮す、通身汗流る、師高聲に叫んで曰く此の守藏の窮鬼子と、此に於て親しく南泉遷化の話に參ず、寢食共に廢す、一日些の省覺あり、入室種々下語すれども契はず、只云ふ守藏の窮鬼子と、予心に竊かに謂ひらく辭し去つて他方に往かんと、一日城下に往いて托鉢す、狂人あり茗箒を把つて予を打たんと欲す、予覺えず南泉遷化の話を打破す、其餘の數段の因緣、疎山壽塔の話、大慧荷葉團々の頌、自ら謂へらく盡く打發すと、歸り來つて所見を演ぶ、師總に可否せず、只微々として笑ふのみ、此れより守藏の窮鬼子と言ふことを休む、其後省悟大に歡喜する者三兩回、恨む所は語路、到あり不到あり平生燈影裏に行くが如し、歸り來つて病に如何老人に侍す、一日息耕老師南浦和尚を送る偈に相送れば門に當りて修竹あり、君が爲に葉々清風を起すと云ふを看讀して大に歡喜す、夜光を暗路に獲るが如く覺えず高聲に曰く我れ今日始めて語言三昧に入得せりと立つて禮拜す、其の後行脚して路勢陽を歷て一日大雨を衝いて行く、雨水膝に到る、廓然として深く荷葉團々の句中に入得す、歡喜立つことを得ず、身を

放つて水中に倒る、起立することを忘却して腰包皆浸す、行人怪しみ立つて扶け起す、予呵々大笑す、人皆以て狂せりと爲す、其冬泉州信田の僧堂に在つて夜坐す、雪を聽いて得所あり、翌年濃東靈松の僧堂に在つて經行、忽然として從前多少の所得を打失す、大に歡喜す、三十二歳にして此の破院に住す、一夜夢らく吾が母紫絹衣を以て予に附す、提起して兩袖甚だ重きことを覺ゆ、之を探るに各一面の古鏡あり、經り五六寸可り右手なるは光輝心肝に透徹す、自心及び山河大地澄潭の底無きが如く、左手なるは全面一點の光輝無く其の面新鍋の未だ火氣に觸れざる者の如し、忽然として左邊の光輝右邊に勝ること百千億倍なることを覺ゆ、此れより萬物を見ること自己の面を見るが如し、初めて如來は目に佛性を見ると云ふことを了知す、後來因に碧巖錄を取つて讀む、後前の所見と大に異なり、其の後一夜法華經を把つて讀む、乍ち法華圓頓眞正の奥義を徹見して最初一圓の疑惑を打破す、從上多少の悟解了知大に錯り了ることを覺得す、覺えず聲を放つて啼泣す、須らく知るべし參禪は甚だ容易ならざることを、今放蕩老懶毫釐も取るべき所無きに到ると雖も、自ら覺ゆ四十年終に空しく光陰を送却せざることを、是れ張五楊州に在つて金を放つて艱辛せし所以の者に非ずや、予も亦吾予に効つて一旦の所見を擔つて揩磨淨盡して一生を錯り了らば彼の張六が一錠の金を死守して其の身を窮餓し其の心肝を困煎せしと何ぞ異なることを得ん、天竺には此れを二乘長者の窮子と言ひ漢土には此れを默照邪禪の流類と言ふ、是れ皆菩薩の威儀を知らず、佛國土の因緣を明らめざるが致す所なり、今時往々一片の空理を擔つて佛を會し祖を會し古則公案を會し了つて盡く言ふ、棒の如く陀羅尼の如く一喝の如しと、大に笑ふべし、勉旃、諸子佛道深遠なり、須らく知るべし、海の轉た入れば轉た深きが如く山の轉た上れば轉た高きに似たることを、若し自家得力の當否如何を知らんと欲せば先づ須らく南泉遷化の話に參ずべし、昔、三聖秀上座をして去つて長沙の岑禪師に問はしむ、南泉遷化の後作麼生、沙云く石頭沙彌爲りし時六祖に見ゆ、秀云く沙彌爲りし時を問はず、南泉遷化の後作麼生、沙云く伊をして尋思し去らしむ、秀云く和尚千尺の寒松ありと雖も且つ條を抽る筍無し、長沙無語、秀歸つて三聖に擧示す、三聖覺えず舌を吐いて曰く臨濟に勝ること七歩と、此の語若し見得分明なることを得ば儞に許す、小分の相應を得ることを、何が故ぞ人無きに獨語すれば其の

賤しきこと鼠の如し、何を以てか驗と爲ん、牙を鼓すること三下合掌して曰く、漸

白隱禪師遠羅天釜畢

白隱禪師遠羅天釜續集

念佛と公案と優劣如何の問に答ふるの書

先輩に正念工夫相續不斷の助けに念佛せよと勸むる者も是れ有り、如何ん、趙州の無字と一般なりとせんか將又別に仔細有りやとの御尋ね、叮嚀なる思し召しに候、人を殺すに刀を以てする有り、鎗を以てする有り、一般なりとやせんか將又別に仔細有りやと問はんに如何が答へ玉ふべきや、刀鎗器異なりと云へとも、其殺すに到つては豈に兩般有んや、去る程に、忠信は碁盤を振上げて敵を追ひ、篠塚は船梁を引きはづして人を打ち、呂后は鴆酒を執つて如意を毒害し、玄武は琴絃を解いて妓女を縊殺し、關羽は龍刀を提げ、張飛は蛇棒を取る、刀鎗は兩般なけれども、只執る人の利鈍と眞僞との兩般に在るらくのみ、學道も亦然り、或は定坐し、或は誦經し、或は諷咒し、或は念佛し、努め力めて前後際斷の處に到つて無明の暗窟を蹈翻し、五欲の凶賊を逼殺し、大圓鏡光を擊碎し、四智圓明の正位を透過し、大事を成

辨ずるに到つては、行持は縱ひ品異なれどもその所證に到つては豈兩般有んや、茲に人あり力量骨格互ひに相同じ、各各堅甲利兵を執つて相戰はんに、一人は志念堅からず或ひは疑ひ、或ひは恐れ、或ひは戰はんとし、或ひは走らんとして死生決せず、進退定まらず、眼目定動し、步驟正しからず、しどろに成て、相進まん一人は危亡を顧みず、强弱を觀せず、一身を必死の地に擲著し、目を居え齒を切つて大精神を震つて斷斷として相進まば、此兩箇の勝敗は掌ろを見るが如けん、十騎にして千騎に對し、百騎にして萬騎に對するといへども、百戰百勝目前に分明なり、譬へば兩陣相對せんに一方は金銀を以て募り傭ひたる雜兵十萬、又一方は仁恕を以て志を合せ忠義を以て鍊り鍛たる精兵一千、此千騎を放つて彼十萬に當てんに、惡虎の群羊を驅るが如けん、是他なし只大將の賢と不肖とに在らくのみ、豈に勢の多少器の長短に依らんや、工夫も亦然り、一人有り常に趙州の無の字を擧揚し、一人有り常に專唱稱名せんに、無の字を擧する人は工夫純ならず、志念堅からずんば、縱ひ擧して十年二十年を經るとも何の利益か有ん、稱名の行者は打成一片に稱名し、純一無雜に專唱して、穢土を觀せず、淨土を求めず、一氣に進んで退かずんば、五日三日乃至十日を待ずして、三昧發得し佛智燒發して立地に往生の大事を決定せん、往生とは何をか云や、畢竟見性の一著なり、經に曰く、我國に生れんと十念唱へたらん人の我國に往生せずんば、正覺を取らじと誓ひ玉ふ、我が國とは何れの處ぞ目前歷歷たる底の本具の自性に非ずや、見性の人に非ずんば たやすく見る事能はじ、若し然らずんば、今時諸方淨業の人人、日日にとなへ唱へて千念萬念、千億萬念す、然うして往生の大事を決定する底は半箇も亦無し、知らず無量壽尊正覺を取る事を廢し玉はんか、殊に知らず一念直に是れ往生 極樂國、豈に十聲を待んや、此故に佛の宣はく勇猛の衆生の爲には成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲には涅槃三祇に亘ると說玉へり、若し無の字と稱名と兩般の看を成ば須らく知るべし、盡く是れ邪魔外道の種族なる事を悲む所は、今時淨業の行者往往に諸佛の本志を知らず、西方に佛在りとのみ信じて西方は自己の心源なりと云事を知らず、念佛の功課に依て虛空を飛過して死後西方へ行んとのみ覺悟す、一生苦吟して往生の素懷を遂る事能はず、殊に知らず十方佛土中唯有一乘法なる事を、此故に言、佛身は法界に充滿して普く一切群生の前に現ずと、若佛西方にのみおはさば一切群生の前

に現じ玉ふ事能はじ、若し一切群生の前に現せは特西方に限るべからず、悲い哉、如來清淨の眞身は煥爛として目前に分明なる事掌を見るが如くなれども、慧眼既に盲ひたる故に、都て是を見上つる事能はず、豈に言はずや、光明遍照十方世界と蓋し光明と世界と兩般の會を成し玉ふべからず、悟る則んば十方世界草木國土を全うして直に是如來清淨光明の眞身とし、迷ふ則んば如來清淨光明の眞身を全うして錯つて十方世界草木國土とす、此故に經に曰く、若し色を以て我を見音聲を以て我を求めば此の人邪道を行じて如來を見上つる事能はじと、眞正淨業の行者は卽ち然らず、生を觀せず、死を觀せず、心失念せず、心顚倒せず、となへ唱へて、一心不亂の田地に到つて忽然として大事現前し往生決定す、此の人を指て眞正見性の人とす、自身直に是れ六十萬億那由佗、恒河沙由旬の彌陀七重の寶樹八功德池心上に昭昭として目前に煥爍たり、山河大地萬象森羅盡く是れ微妙希有の莊嚴海なる事を徹見す、專唱稱名一念不生放身捨命の端的を往と云ひ、三昧發得眞智現前の當位を生と云ふ、如上の眞理煥然として當處湛然一毫をも隔てず涌出するを來迎とす、來迎往生直下不二是見性の當體なり、元祿の頃に二人の淨業者あり、一人を圓恕と云ひ、一人を圓愚と云ふ、二人志を同うして專唱怠る事なし、圓恕は山城の人也、唱念純一果して一心不亂の境致に到つて忽然として三昧發得し往生の大事を決定す、此に於て遠の初山に上つて獨湛老人に謁す、湛問ふ儞ぢは是何れの處の人ぞ、恕曰く山城、湛云く何れの宗をか業とす、恕曰く淨業、湛云く彌陀如來年多少ぞ、恕曰く某甲と同年、湛云く儞ぢ年多少ぞ、恕曰く彌陀と同年、湛云く卽今何れの處にか在、恕卽ち左手を握て少く揚ぐ、湛默て曰く儞は是眞箇淨業の人也と、圓愚も亦久しからずして三昧發得し大事決定す、元祿の初め豆州の赤澤なる處に行者あり、卽往と云ふ、彼れ亦た稱名の力に依つて大に得力あり、予向きに此兩三箇の傳を記す逐一枚擧するに暇あらず、是卽ち專唱稱名得力の現證なり、須らく知べし話頭も稱名も總に是れ開佛知見道の助因なる事を、開佛知見は諸佛出世の本志なり、後來且く方便を設けて往生と名づけ見性と云ふ、豈にそれ兩般有んや、是等の意を見徹せざる故に、禪者は淨業の行者を見ては無智昏愚の凡夫見性の大事有る事を知らず、妄りに唱へて白晝に十萬億の刹土を飛過して、極樂國土に往んとす、恰かも跛鼈の身づくろひして唐土へ飛んとするが如し、殊に知らず

十萬億土は十惡八邪佛智開明の曉き十惡八邪乍ち氷消して當處卽ち極樂國土なる事を知らずと云うて輕賤す、淨業の行人は禪門の諸子を見ては如來他力の大誓を信ぜず、自力貢高の我慢を主張し大悟して生死を出んとす、片腹痛き風情ならずや、末代下根の我我が及ぶべき事かは、左から家鵝の朝鮮へ翔つて鷹と羽節を較べんと羽づくろひするに似たりと慢り狹す、法華經の行者は乃ち曰く、吾が經の如きは三世の諸佛出世の本懷、一切の如來成道の直路なる醍醐上味の妙經を指し設き、稱名參禪何の用ぞ、剩さへ妙經轉讀の法師を見ては唯有一乘の圓解を發せず、諸法實相の知見を開かず、只毎日わわとのみ叫びて偏へに春の蛙の畔にわめくに似たりなど、舌長き雜言如阿梨樹枝の金文も顧りみざる恐人皆是邪魔外道の所行なりと嗔り恨む、殊に知らず法華は阿含方等四味の階漸を蕊過し開佛知見の至要を演、此故に本文に曰く開佛知見道故出現於世と、正に知るべし圓解の煥發を以て出世の本懷とする事を、然らば則ち參禪も念佛も及び看經誦經をさへに盡く是れ見道の輔助にして、行路の人の杖の如くなる事を、杖に藜杖あり、竹杖あり、藜竹品異なりといへども其行を扶くるに至つては一なり、言事なかれ藜は可にして竹は不可なりと、若其れ行客心屈し體疲れて起事能はずば、藜杖竹杖何の用を成にか堪んや、參禪も亦然り只肝心は行者勇猛精進の一念子に在らくのみ、云ふ事なかれ話頭是にして稱名不是なりと、行人若し勇銳の志無くんば、稱名も話頭も瞽者の眼鏡、法師の櫛貯はへ、果して是れ何の用ぞ、茲に數百人あらんに帝都へ行ん事を願うて各各糧を包んで出づ、先達好らずして錯つて遠境邊土虎狼充滿の廣野に留つて徒に日日杖の短長を爭そひ、行裝の可否を論じ、路費の多少を計つて、杖杖とのみ唱ふるあり、路費路費とのみ叫ぶあり、終に一歩をも進むる事を知らず空しく歲月を送つて、歲衰へ、體疲れて、果は虎狼の爲に獲られ、遠路邊境の閑神野鬼と成り果るに似たり、終に帝都に到る事得ず只肝心は杖子を擇はず、行裝を論せず、一氣に進んで退かず、速かに京師に到るを以て賢なりとす、若し今時に効つて、生前に佛力を賴んで、死後に西方に往んとならば、一生三昧發得往生決定する事能はじ、況んや眞正見性の大事に於ておや、去る程に眞珠菴主の歌に『行く水に數かくよりも墓なきは、佛を賴む人の行末』と、蓋し斯言へばとて淨業を嫌ひ稱名を狹するにし非ず、正念工夫、相續不斷、見性了義の扶けにとならば稱名はさて置き粉拽歌にて

も唱へ玉ふべし、相構へて見性の秘訣を捨て置き專唱の功勳に酬へて佛にならんと計り玉ふべからず、其仔細は譬へば茲に萬石の大船あらんに、思ふ儘に艤ひし順風を七合に受て舟歌を張り、櫓拍子を揃へて水主楫取心を合せて千尋の浪を押し切り、八重の鹽路を漕拔んと毎日勇み進むと云へども、纜を切て放たざらん限りは中々浩波を渉る事能はず、徒らに日日氣力を勞すといへども元の湊に在らくのみ、願ふに纜の金緒なれども大船を留むるに至て萬夫も及ぶべからず、學道も亦然り、譬へば茲に一個有んに、宿に靈骨有つて英豪の氣を具し、神俊の才を備へ剩さへ馬祖百丈を師家とし南泉長沙を同伴とし、勇猛の顎氣を養なひ、打成一片に進み純一無雜に修したりとも、命根截斷せざらん限りは囚地一下の歡喜は努々これ有べからず、命根とは何をか云ふや、無量劫來相續し來る底の無明の一念子なり、天堂、地獄、穢土、淨刹を化出し、三塗六趣を現狀する事は皆是彼れが力に依れり、夢幻空華の細念なれども見性の大事を妨ぐる事は百千の魔軍にも超えたり、空華の細念とも名づけ、生死の命根とも名づけ、煩惱とも名づけ、陰魔とも云ふ、一寶多名仔細に看來れば畢竟我見の一法に歸せり、有我に依るが故に生死有り、涅槃あり、煩惱あり、菩提あり、此の故に言ふ心生ずれば種種の法生じ、心滅すれば種々の法滅すと、又若し我相人相衆生相あらば卽ち菩薩にあらずと、佛迦葉菩薩に問玉はく、善男子何等の法をか修して大涅槃の法に契當する事を得る、迦葉菩薩其時五戒、十善、十八不共、六度萬行、八背遮、無量の法門、逐一擧げて答ふれども佛總に許可し玉はず、迦葉、佛に問ふ、世尊何等の法門か涅槃に契ふ事を得るや、佛の、の玉はく但無我の一法のみ涅槃に契ふ事を得たりと、然るに無我に兩般あり人あり常に心身怯弱にして一切の人を恐れ、心氣を殺して萬緣に應じて罵れども嗔らず、打擲すれども管せず、常に癡々呆々として一事を經ず、一智を長せず、我は是れ無我を得たりとして足れりとす、此れは是れ一個の破飯甕泥猪の肥え脺れて一切無智昏愚なるが如し、是眞正の無我にはあらず、況んや專唱の力に依て淨土へ行んと計り佛に成らんと擬するをや、行く底これ何物ぞ、成ずる底是れ何物ぞ、我に非ずして是れ什麼ぞ、謂ふ事なかれ然らば則ち是れ斷滅の所見なりと、是れ斷なりや是不斷なりや、眞正見性の上士に非ずんば輙く知る事能はじ、眞正清淨の無我に契當せんと欲せば、須らく嶮崖に手を撒して絶後に再び蘇つて初めて四德の眞我に撞

著せん、嶮崖に手を撒すとは何ぞや、一人あり錯つて人迹不到の處に到つて、下無底の斷岸に臨めり、脚底は壁立苔滑かにして淒泊するに地なし、進む事得ず、退く事得ず、只一個の死あるのみ、纔かに賴む處は左手に薜蘿を捉へ、右手は蔓葛にすがつて且らく懸絲の命を續ぐ、忽然として兩手を放撒せば、七支八離枯骨も亦無けん、學道も亦然り、一則の話頭をとつて單々に參窮せば、心死し意消して、空蕩々虛索々、萬仞の崖畔に在るが如く、手脚の著べきなし、去死十分胸間時々に熱悶して忽然として話頭に和して心身共に打失す、是れを嶮崖に手を撒する底の時節と云、豁然として蘇息し來れば水を飲で冷暖自知する底の大歡喜あらん、是れを往生と名づけ、見性と云、只肝要は此の專念の扶けに依て是非是非一回自性の本源に徹底すべきぞと勵み進み玉ふべし、只千萬疑がひ玉ふべからず、見性の外に成佛なく、見性の外に淨土なき事を、三界無比の大聖一切衆生の導師なりと渴仰せられ玉ふ十力調御の世尊如來も、雪山に入て一回見性し玉はざりし以前は流轉常沒の凡夫に同じく、八千度の往來は歷玉ひき、見性大悟の曉にこそ正覺の眉を開き玉ひける者を、見性の外に成佛ありと心得、見性の外に淨刹ありと心得んずる人は上もなき不覺なるべし、觀世大士の生身にて渡らせ玉ふ二十八代の祖師達磨大師の如きは、遙かに十萬里の鯨波を凌いで諸經諸論に不足もなき漢土へ如來直授の佛心印を傳へんとて渡り玉ふと聞き及びにたりければ、如何なる大事をか傳へ玉ふぞと人々目を拭ひ襟を正して渴仰し申しけるに、只見性成佛の一事をのみ授け玉ひにき、破相悟性等の六門を設け玉ひにたれども畢竟見性の一處に收歸せり、然れども衆生無量なる故に法門も又無量なり、中に就て往生の一門は韋提希獄中の患難を救はんが爲めに、假りに且く設け玉ふ、若し往生の一事を以て佛法の至要なりとせば、祖師只二三行の書を裁して漢土へ送り玉はば足れらくのみ、曰く專唱稱名して淨刹に往生せよと、何ぞ煩はしく千辛萬苦の風波を凌ぎ全身を鯨鯢の腮に懸て漠土へ渡り玉ふべきや、如來も亦然り、初より淨飯王宮の中に在して、耶輸陀羅、瞿夷女等の妃嬪と共に娛樂を窮め玉ひ、位十善に登り、富み五印を有ちて、末後に稱名念佛して淨土に往生し玉はゞ足れらくのみ、何の心ぞや金輪の王位を振り捨て、苦行六年阿羅羅迦摩羅の仙人に責め使はれ、其後ち深く雪山に入て葦蘆の股を突き貫くをも覺え玉はず、目のあたりへ雷の落て牛馬を打ち殺たるをも知り

玉はぬ程深く大禪定に入り玉ひて、通身瘦衰へ玉ふ事絲もて瓦を編たてたる如く、皮骨連立せり、遂に臘月八夜明星を一見して初めて見性大悟高聲に唱へ玉はく、希有なる哉一切衆生如來の大智慧德相を具すと、是より山を出來つて、頓漸半滿の敎を說き宣べ玉ふに、乏き事なし、此に於て十號具足、果滿妙覺の如來と仰がれ玉ふ是れ彼の善慧大士の謂ゆる頓に心源を悟つて寶藏を開き玉ふに非ずや、澆季末代、壞劫法滅の末世といへども、佛子たらん者の尊信すべき芳躅ならずや、大凡番々出世の如來、歷代傳燈の祖師、及一切の賢聖智者高僧に至るまで、其の所傳の秘訣行持の內證を探るに盡く自性の法門を至要とす、蓮如上人の如きも平生往生不來迎の往生と說れけるよし、願ふに是れ亦これ見性の眞理にあらずや、深く海藏の底を探つて五千餘卷の金文を五度びまで究め玉ひ、王侯より庶人に至るまで生身の如來の如く仰ぎ貴ばれ玉ひし法然上人の如きも、常に悲嘆し玉ひけるは、特り敎內の理に暗からざるのみに非ず、敎外の心宗顆を探る先達なき故に、索短うして深泉を汲まず、翼さ短うして長空に翔らざる心地なりと、諭置れける由、敎外の心宗とは何をか云ふや、此れ見性の法門に非ずや、至人の一言毫釐も欺き玉はず、寔に恐るべく敬しつべし、神祇冥道も恭敬し尊重し玉ひける程の止ごとなき上人だにも斯望深くおはせし、見性の大事なるものを今の人々の慢り謗り玉ふは罪深くこそ覺ゆれ、蓋し理はり知り玉はぬ上には左ばかり罪科にもならぬにこそ、惠心院の僧都の如きは二十四歲にして自性の大圓鏡を琢磨せんとて、横川に入り玉ひしより晝三部の法華經夜六萬聲の念佛中間片時も怠惰し玉はず、行年六十四歲にして初めて自身眞如なる事を識得すとの玉ひけるよし、寔に貴ぶべし、自身總に眞如なる時、山河大地、萬像森羅、草木國土、有情非情、同時に不變眞如の全體と現出す、是れを寂滅現前見性了悟の時節とす、高野の明遍僧都、五十餘歲の秋、深く念佛三昧に入り玉ふ時、高野大師正しく藕絲の袈裟幷に一紙の金文を授け玉ふ、其の略に曰く西方の一方を指す者は方便なり、九域を簡して亂心を止む、畢命を期として名を稱せば、心眼卽開の大益を得んと、心眼卽開直に是れ見性の時節なり、大凡世尊一代五千餘卷の金文有つて頓漸秘密不定の妙義を說き演べ玉ひたれども、畢竟此の見性の大事を出でず、故に經に曰く、唯此一事實餘二卽非眞と、去る程に三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの聖賢は必定決定無き事なり、山野七八歲よ

り心を佛理に傾け、十五歳の時出家、十九歳にして行脚、二十四歳にして初めて此の見性の大事に撞著す、其後叢林を經、普ねく諸善知識の門閫に跨がり、博く諸經論を窺がひ、略三教の經典を探り、及び諸子百家をさへに、若し一法の自性の法門に超過せる有らば、莊老列の道といへども必ず信受し推し弘めんと誓ひ侍りき、今年六十五歳に到つて終に見性の大事に過たる法理を見ず、左も侍らずば何しに妄りに紙墨を費やして、覺えも無き事を書き付け高覽に入れ侍るべきや、只返す返すも見性の助けに便りよく侍べらば絶えずりも無く唱へ進みて一心不亂の田地に到り玉はゞ、必定大歡喜の眉を開き玉ふべし、若しそれ無の字を打捨て、佛名を唱ふる事は、專唱稱名の力に依て見性分明に直に佛祖の骨髓に徹底する事を得ば是れ可なり、縱ひ見性明白なる事を得ずとも、稱名の功力に依て死後には必ず極樂に往生せん是れ一舉兩得萬全の良策なりとの底意ならば、早速稱名の修行を放下し純一に無の字を擧揚し玉ふべし、何が故ぞ、斯れは是れ二百年來禪苑を荒廢し眞風を蠹害するの惡風俗、杜撰の禪徒鄙俗下賤の邪見解なり、夫れ禪宗は孤危が上にも轉孤危ならん事を要し、祖庭は嶮峻が上にも轉嶮峻なるを貴しとす、常に要津を把定して凡聖を通せず、一言を出す則ば三賢魂蕩し、四果眼眩す、一句を吐く則んば閑神恐れ走り、野鬼悲しみ哭す、木人の腸を割き、石女の髓を敲く、棟梁の質あつて神俊の才を具する底の英伶の學者を見る則んば、難透、難解、難信、難入底の話頭を放つて正法眼藏を瞎却し、涅槃妙心を撥奪す、學者も亦蠱毒の鄉を過るが如く、水も亦他の一滴をうけず、堅に咬み横に參じて情量の窟宅を破り、智解の窠臼を拔き理盡き詞窮まり、心死し意消して忽然として凡に非ず聖にあらず、佛にあらず魔に非ざる底の奇怪の鈍瞎漢を放出して、以て佛祖の深恩を報答す、斯の如きの手段を法窟の爪牙と名け、奪命の神符と云ふ、大いに上々根機の人に利あり、中上の機は閣いて顧みず、淨家は却つて是れに反す、是れ又敬しつべきの一門なり、無量壽尊大慈善巧の專修にして六八の大誓に本づき、三四の修心を具す、專ら中下の機の爲に設けて無智昏愚の衆生を利し、十惡五逆の罪累を拔く、攝取不捨の金言を主として下きが上にも轉下きを要とし、易きが上にも轉易きを貴としとす、此の故に言ふ、縱ひ一代の教を能く能く學したりとも、一文不知の愚鈍の身になして只一向に念佛せよと澆季末代五濁亂滿の邊土に一日も缺くべからざる善巧なり、禪

り心を佛理に傾け、十五歳の時出家、十九歳にして行脚、二十四歳にして初めて此の見性の大事に撞著す、其後叢林を經、普ねく諸善知識の門閫に跨がり、博く諸經論を窺がひ、略三教の經典を探り、及び諸子百家をさへに、若し一法の自性の法門に超過せる有らば、莊老列の道といへども必ず信受し推し弘めんと誓ひ侍りき、今年六十五歳に到つて終に見性の大事に過たる法理を見ず、左も侍らずば何しに安りに紙墨を費やして、覺えも無き事を書き付け高覽に入れ侍るべきや、只返す返すも見性の助けに便りよく侍べらば絶えずりも無く唱へ進みて一心不亂の田地に到り玉はゞ、必定大歡喜の眉を開き玉ふべし、若しそれ無の字を打捨て、佛名を唱ふる事は、專唱稱名の力に依て見性分明に直に佛祖の骨髓に徹底する事を得ば是れ可なり、縱ひ見性明白なる事を得ずとも、稱名の功力に依て死後には必ず極樂に往生せん是れ一擧兩得萬全の良策なりとの底意ならば、早速稱名の修行を放下し純一に無の字を擧揚し玉ふべし、何が故ぞ、斯れは是れ二百年來禪苑を荒廢し眞風を蠹害するの惡風俗、杜撰の禪徒鄙俗下賤の邪見解なり、夫れ禪宗は孤危が上にも轉孤危ならん事を要し、祖庭は嶮峻が上にも轉嶮峻なるを貴しとす、常に要津を把定して凡聖を通せず、一言を出す則ば三賢魂蕩し、四果眼眩す、一句を吐く則んば閑神恐れ走り、野鬼悲しみ哭す、木人の腹を割き、石女の髓を敲く、棟梁の質あつて神俊の才を具する底の英伶の學者を見る則んば、難透、難解、難信、難入底の話頭を放つて正法眼藏を瞎却し、涅槃妙心を撹奪す、學者も亦蠱毒の鄉を過るが如く、水も亦他の一滴をうけず、堅に咬み横に叅じて情量の窟宅を破り、智解の窠臼を拔き理盡き詞窮まり、心死し意消して忽然として凡に非ず聖にあらず、佛にあらず魔に非ざる底の奇怪の鈍瞎漢を放出して、以て佛祖の深恩を報答す、斯の如きの手段を法窟の爪牙と名け、奪命の神符と云ふ、大いに上々根機の人に利あり、中上の機は閑いて顧みず、淨家は却つて是れに反す、是れ又敬しつべきの一門なり、無量壽尊大慈善巧の專修にして六八の大誓に本づき、三四の修心を具す、專ら中下の機の爲に設けて無智昏愚の衆生を利し、十惡五逆の罪累を拔く、攝取不捨の金言を主として下きが上にも轉下きを要とし、易きが上にも轉易きを貴とし、此の故に言ふ、縱ひ一代の教を能く能く學したりとも、一文不知の愚鈍の身になして只一向に念佛せよと遶季末代五濁亂滿の邊土に一日も缺くべからざる善巧なり、禪

門は力士の長けを闘はしむるに等し高きを以て勝れりとす、淨家は侏儒の長けを闘はしむるが如し、矮きを以て勝れりとす、禪門の高きを惡んで是れを廢せば佛心向上の眞風は土を拂つて泯沒せん、淨家の矮きを嫌つて是れを廢せば昏愚無智の部屬は惡趣を出づる事能はじ、顧ふにそれ佛は大醫王の如し、八万四千種の方劑を設けて八萬四千種の病根を拔く、禪と云ひ、教と云ひ、律と云ひ、淨と云ふ、各々是れ病に應ずる一方なり、譬へば世に士と云ひ、農と云ひ、工と云ひ、商と云ふ、此の四民あるが如し、士は智仁兼備へ韜略並べ全うして、王位を鎭護し逆徒を從がへ、天下を泰山の安きに置き、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし、瞑らざれども民斧鉞よりも畏、尤も嚴重なるを貴しとす、重んずべきの美器なり、商は大店を張り貨財を通じ、錦繡綾羅絹帛綿布及び粟米蔬果魚肉をさへに廣きを以て好とす、緇素男女老幼尊卑其求めに應ぜずと云ふ事なし、士若し商賈の廣きを羨み財利を貪り行ひて商賈の態を作さば大いに射御を廢し、武藝も亦忘れて笑を朋友に惹ん、主人も亦大ひに瞋つて此れを擯出せん、商も又士の嚴重なるを羨み、劒を帶し鞍馬に跨つて戎面して亂りに西東に走らば人それ大いに笑はん、家道も亦廢せん、向に謂ゆる禪を得ずんば命終の時淨土に生ぜんと、兩端に涉つて修行せん人は、魚も得ず熊の掌も亦得ず、却て生死の業根に培かひ命根截斷団地一下の歡喜は努々是れ有べからず、無の字と名號と兩般なしと申す中に、得力の遲速見道の淺深に到つては少もの仔細無きにしもあらず、大凡辨道參玄の上士、情念の滲漏を塞斷し無明の眼膜を觸破するに到つては、無の字に越たる事は侍るべからず、去程に五祖の演禪師の頌に『趙州の露刃劍寒霜光烱々、更に如何と問はんと擬せば身を分つて兩段と作す』と、總じて參學は疑團の凝結を以て至要とす、此故に道ふ大疑の下に大悟あり、疑がひ十分あれば悟り十分有りと、又佛果和尙の曰く、話頭を疑がはざるを大病とすと、參玄の人纔かに大疑現前する事を得ば百人が百人千人が千人ながら打發せざるは是れ有るべからず、若し人大疑現前する時、只四面空蕩々地、虛豁々地にして生に非ず、死に非ず、萬里の層氷裏にあるが如く、瑠璃瓶裏に坐するに似て、分外に淸涼に、分外に皎潔なり、癡々呆々坐して起つ事を忘れ、起て坐する事を忘る、胸中一點の情念無うして只一箇の無の字のみ有り、恰かも長空に立つが如し、此の時恐怖を生ぜず、了智を添へず、一氣に進んで退かざる則んば、忽然として氷

盤を擲擺するが如く、玉樓を推倒するに似て四十年來未だ曾て見ず、未だ曾て聞ざる底の大歡喜あらん、此時に當つて生死涅槃猶如昨夢、三千世界海中の漚、一切の賢聖電拂の如し、是れを大徹妙悟囗地一下の時節と云ふ、傳ふる事得ず、說く事得ず、恰かも水を飲で冷暖自知するが如けん、十方を目前に銷融し、三世を一念子に貫通す、人間天上の間那箇の歡喜かこれに如んぞ是等の得力は學者親切に進まば纔かに三日五日の功にして必ず得ん、如何が大疑現前する事を得んとならば、靜處を好まず、動處を捨てず、我が此の臍輪氣海總に是れ趙州の無、無の字、何の道理か有ると、一切の情念思想を拋下し單々に參窮せんに、大疑現前せざる底は半箇も亦無けん、如上大疑現前、純一無雜の體裁を聞き及ばれては怪しく恐ろしく、氣味わろき事に思し召さるべけれども、無量劫來生死の重關を蹈破し、十方の如來本覺の內證に徹底する程の目出度き大事なるものを左ばかりの艱辛はあらではあるべきと覺悟是れあるべし、熟〻顧ふに無の字を參究して大疑現前し、大死一番して大歡喜を得る底は、數限りも無く是れあり、名號を唱へて少分の力を得る底は兩三箇ならでは聞き及ばずなん侍り、惠心院の僧都も智德と云ひ、信心力と云ひ、無の字か麻三斤の話など參究し玉ひたらんには、自身眞如なる程の事は一月二月乃至一年半年程の中には發明し玉ふべきものを、名號誦經の功によりて四十年の精彩を盡し玉ひたるなるべし、是れ唯疑團のおはするとおはせざるとに依れり、須らく知るべし、疑團は道に進む羽翼なる事を、法然上人の如き道德仁義精進勇猛暗中に聖敎を披覽し玉ふに、眼の光りを用ひ玉ひける程なれば、少しの疑團だに在したらんには、立地に大事了畢し往生決定し玉ふべきものを、豈に索短うして深泉を汲まざるなど、悲歎し玉ふに及ばんや、去る程に、楊岐、黃龍、眞淨、息耕、佛鑑、妙喜、の諸老をさへに大凡百千億の諸佛名あり、百千億の諸神咒あり、授與すべく擧揚すべき法門は、不足も無き中に特り此無の字を與へて擧揚せしむ、豈に長處なからんや、顧ふに無の字は疑團起り易く、名號は疑團起り難き故なるべし、然るに禪門に於て專唱稱名往生を希望する事は古へ禪苑凋枯せず、眞風未だ地に墜ざりし日は一向に無き事也、西天の四七唐土の二三、傳燈歷代の祖師、南嶽、青原、馬祖、石頭、百丈、黃檗、南泉、長沙、臨濟、興化、南院、風穴、首山、汾陽、慈明、黃龍、眞淨、晦堂、息耕、妙喜、及び五家七宗の諸老をさへに梁、陳、隋、唐、宋、元の間六朝の大宗匠

各々孤危の宗風を立して、臂に奪命の神符を繫け、口に法窟の爪牙を咬鳴して只宗風の地に墜ん事を恐れて晝夜に願輪に笞つて屹々として怠る事無し、破口にも往生淨土の事を論せず、悲い哉、時乎、命乎、大雅枯れて桑間湧き、古曲啞して鄭衞震ふ、流へて大明の末に至つて、雲棲の株宏なる者あり、參玄力足らず見道眼暗うして進むに寂滅の樂みなく、退くに生死の恐れあり、悲嘆押さへ難く、終に遠公蓮社の遺韻を慕つて、祖庭孤危の眞修を捨て、自ら蓮池大師と稱して、彌陀經の疏鈔を造り、大に主張して後學を引く、鼓山の元賢永覺大師、淨慈要語を造つて擊節して輔け佐く、此に於て漢土に普く扶桑に溢れて終に救ふ事無きに至る、假令今の世に當つて臨濟、德山、汾陽、慈明、黃龍、眞淨、息耕、妙喜の諸老臂を褰げ齒を切ばり、手に唾きして攘斥すと云ふとも、此の狂瀾を廻す事能はじ、是れ全く淨業の宗旨を狹し、專唱の修行を輕賤するに非ず、禪門に在りながら禪定を修せず、參禪に懶く志行懶惰にして見性眼昏く禪學力乏しうして茫々として一生を過ぎ了つて、命日崦嵫に逼るに及んで來生永劫の苦輪を恐れ、俄かに欣求淨土の行課を勤め、在家無智の男女に對し、いかめしげに長念珠かい爪ぐり、高か念佛しながら末代下根の我れ等に似合たる厭離穢土の專修に超えたる事は侍らぬぞとよなど、頭べ禿ろに齒疎なるが動もすれば殊勝げに打ち泣き打ち泣き目をしば扣きて口說立たるは實々しけれども、從前曾て勤めざる禪定何の利益か有ん、從前曾て修せざる禪學何の靈驗か有らん、これ等の族は禪門に在りながら禪門を謗倒す、蠹啄の虫の梁柱より生じて却て梁柱を割くが如し、點檢せずんば有るべからず、壯年の懶惰懈怠は却て老來の憂惱悲歎となんぬ、老來の憂惱悲歎は責るに足らず、既に往しをば咎めじ、壯年の懶惰懈怠は各々宜く恐れずんばあるべからず、大明以來此の黨甚だ多し盡く是れ庸才懦弱の禪徒なり、三十年前、去る老宿の悲嘆せられけるは嗟衰へたる哉、向後三百年を過きば、天下の禪苑盡く總盤を張り、木鐘を居え、六時禮讃四隣を驚かすに至らんと云うて落涙せられける由、寔に恐るべし、老僧最後親切の一著あり、眉毛を惜まず、殿下の爲に擧揚し去らん、一喝の會を作す事なかれ、況や崑崙に聚を呑み玉はんをや、作麼生か是れ親切の一句、僧趙州に問ふ、狗子に還つて佛性有りや否や、州曰く無。

穴賢

白隱禪師遠羅天釜續集畢

客難に答ふ

元明の禪家流、往々に稱佛に偏す、此れ武夫を明月に混じ、燕石を隋侯に雜ふるなり、爾るより來た天下の叢林擊節相從ふ、滔々乎として踵を繼ぐ、宗風の陵夷職として是れ之に由る、此の時に當つて、無畏の一聲を假るに非ざれば多少の頑皮靴をして頭腦裂破せしむるに由なけん、向きに鍋島侯、書を馳せて之が問を致すや、師兩端を叩いて竭す、謂つ可し針を霧海に視し珠を合浦に還す者なりと、一日客あり予に謂つて曰く、淨土の一門は如來の勝方便なり、馬鳴之を稱し龍樹之を嘉ふ、勝妙の國土實に之有るに似たり、然るに今之を卻く、其他の劣機之を聞くときは必ず望を淨土に斷たん、予曰く噫事淨土の如きは如來の不可思議莊嚴海中此の事無きに非ず、只是れ鏡像幻化ならく而已、然りと雖も幻化の幻化たる所以を識破するときは卽幻化の幻化と爲すべき無きなり、但法身幽微にして法體緣じ難きを以て且く佛を念じ形を觀じ以て禮讃せよと敎ふ、是れ他無し愚凡障重きが故なり、若夫大心の衆生ならば那處か是れ淨土ならざらん、顧ふに子が執する所の者は莊嚴有

餘等なり、師の示す所の者は寂光の理土なり、宜哉子の疑を生ずること也、佛華嚴經に曰く如來の淨土は或は如來の寶冠にあり或は耳璫に在り或は瓔珞に在り或は衣紋に在り或は毛孔に在り此の如くの毛孔既に世界を容るゝが故にと的かに知りぬ方處なく涯畔なきことを、蓋し二尊者の如きは悲願廣大にして物の爲に前驅す、之を權に幻化の衣を著けて幻化の國に願生すと謂はんか、之を此土の本土を起たずして無生の往生を現すと謂はんか、之を要するに如來出世の本懷、祖師應機の作用、其の跡萬端にして其致一なり、但一切衆生をして佛智見に悟入せしめんと欲してなり、更に餘蘊なきなり、法華經に曰く諸佛世尊種々の方便種々の譬喩種々の因緣是法皆一佛乘の爲の故に諸の衆生の爲に諸法を演說すと、是の如くなるときは則淨土の設け豈一佛乘の助と爲るに非ず耶、吾老師如上の丁寧告誡豈他有らんや、其莊飾を卻けて之が本色を呈す、譬へば眞金を以て啼を止むるが如し、苟も黃葉と爲ば他後悔有ん、又元明の問宗旨を屈辱する者の爲に激切する所あるは則是れ屋裏鼓を鳴すの攻めなり豈敢て他の信男信女願生の人を敎驅して自家底を粧重する者ならんや、人有りて專修稱名忽然として三昧を發得するときは則ち然ることを期せずして必ず然り、是れ佛道無二なるが故なり、子其れ思を好せば歷然として解すべし、客の曰く淨土幻化ならば何物か幻化ならざる、禪も亦幻化なるか、夫れ佛の如きは萬善を曠劫に積んで無始の遺塵を蕩す、果報を以ての故に其土淸淨なることを獲たり、之を幻化と謂ふ可からず、借如禪門に譏られて其が爲に短せらるゝとも如來に讃せらるゝときは則必ず所長有らん、予が曰く果報の土、實に是れ幻化なり、蓋し嘗に是を論せん、大毘盧舍那五智圓明常住の本體は猶淸淨の摩尼寶珠の如し、而も能く種々の色像を現ず、淨なるときは則ち淨現じ穢なるときは則ち穢現ず總に是れ所現の物なり、無現にして現なるが故に無に非ず、現ずと雖も不現なれば又有に非ず、有既に有ならざる時は卽ち無何ぞ據らん、不思議の致すところ有無を其間に容るゝこと能はず、而も何物か現ぜざらん所以に萬有森然たるも其來る所以を知らず、一虛蕭然たるも其往く所以を識ること罔し、色像能依なるを以ての故に寶珠を離れて色像なし、寶珠の所現なるを以ての故に色像を離れて、寶珠なし、寶珠卽ち色像、色像卽ち寶珠、人有りて實に此の如き大寶珠を體するときは則ち能く不可說微塵數の淨土を現じて包羅せずと云ふことなく、含蓄

せずと云ふことなし、唯是れ當處湛然なり、彼の一佛國土に繫念する者と奚ぞ翅だ霄壤のみならんや、是の故に至人は往くとして寶珠ならずと云ふとなし、光々映徹、主伴無盡なり、恐凡は之に反す、是故に往くとして色像ならずと云ふとなし、法々質礎淨穢駁雜なり是れ他の契證すると否なるとに由るのみ、淨土の如きは中下根の爲に假に微妙の色像を緣じて無依の珠體を感ぜしむる者なり、故に希望を以て之が媒と爲す、色像を見ることを得ば斯れ可なり、寶珠は見ることを得べからざるなり、禪家の如きは上々の機の爲に直に圓明の寶珠を指して有依の色相を見ざる者なり、故に妙悟を以て之が則と爲し、寶珠も亦擊碎す、何の色像と云ふことか之有らん、蓋し禪と淨土と途軌殊なり、禪は佛心印を傳へ、正法眼藏を荷擔する者なり、佛心卽ち禪、更に何の佛か有らん、正法卽ち是れ宗更に何の經か有らん、故に調御師金襴を大龜氏に附す、滔々相續血脈不斷猶瓶水の相承るが如し、實に法中の王たり、之を世の帝者、天の曆數爾が躬に在りと云ふに譬ふ、乃し能く天下を以て己が任となし、叡哲欽明及を萬機に遊ばしめて理統べずと言ふとなく、威伏せずと云ふとなし、是の故に天下主有るときは則ち上下位し、萬物安んず、若し一日も其主を失ふときは則ち天下の壞亂此より甚しきは莫し、大なる矣哉主たること民得て而して遁るゝと無し、事淨土の如きは、計我著相の族を攝取不捨して巧に善く根機に逗す蓋し漚和の法門なり、其珠體よりして之を言ふときは則幻化に非ずして何ぞや、是の故に圓覺經に曰く不可說恒河沙諸佛の世界は猶空華の亂起亂滅するが如しと、當に知るべし一切の世界皆如幻にして住することを是を以て實敎に明むる所僉無形を以て淨土と爲す、華嚴に曰く眞に依りて住す國土に非ずと、生公も亦曰ふ、佛形累あらば土に託して以て居せん、佛は是れ常住法身なり、何ぞ國土を須ひんと、當に知るべし、十方諸佛所有の國土悉く是れ幻化にして眞實に非ざるなり、是に由つて之を觀れば、佛道は必ず茲に在らざること章然たり矣、知らざる者自ら謂らく禪にして淨土を兼ぬるは虎にして翼を挾む者なり、或は謂ふ、禪にして淨土なければ十人は九人蹉路すと、然らば彼の幹墨揚申が徒の如く、帝者をして國人の業を習はしむと謂はんか、啻に其祚を有つこと能はざるのみならず、必ず其國を亡すに至らん、苟も其道の明ならざることを憂ひば、惟だ痛く勵み密に進んで自ら其德を全うするに在らんのみ、奚を以てか兼ぬることを爲さん、華嚴觀に云く、信有りて法

界を信せざれば、信是れ邪なりと、凡そ諸經論中具に二行を明す、一には無念、二には有念、而も皆佛道を成ず可しと雖も、優劣懸かに殊なり、參禪辨道は卽ち無念無想の念佛なり、此を眞如三昧と謂ふなり、欣求淨土は卽ち存想計名の念佛なり、是を淨業を修習すと謂ふ、但能く不二に通達するを便ち眞の佛子と爲す、想ふに夫の之を兼ぬると云ふは、蓋し本を二にするが故なり、觀經に云く、諸佛如來は法界身なり、是心卽是れ三十二相八十隨形好なり、是心作佛是心是佛と又曰く佛身の高さ六十萬億那由多恒河沙由旬、彼の佛の圓光百億三千大千世界の如しと、如來誠諦の語、此に到つて內證を顯示す、其旨甚深なり、之れを名けて恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變の妙土と曰ふ、此くの如くの妙土、形相を以て莊嚴すべからず金珠を以て修飾すべからず、所以に金剛般若に曰く、若し菩薩是の言を作さん、我當に佛土を莊嚴すべしと、是を菩薩と名けず、何を以ての故に如來佛土を莊嚴すと說き給ふは卽莊嚴に非ず、是を莊嚴と名くと、又維摩經に曰く其の心の淨きに隨つて則ち佛土淨しと、果して此くの如くならば、參禪學道は豈是れ佛土を莊嚴するに非ずや、彼の元明の禪者自ら其の造詣の精しからざるを蔽はんと欲す、故に傅會して以て之を文る、甚しき者邯鄲の步みに過ぎざるなり、陽に之を慕ふ爲して陰かに之に悖る、又何ぞ取らん耶、世の佛を學ぶ者狐疑して之を能く正すこと莫く雷同して難を易に換るときは則ち如來の正法眼藏復た息むに幾し、思はざるべけんや、吾が師之を闢けて廓如たり、豈辯を好まんや、已むことを得ざればなり、客曰く幻化の法門我復何ぞ望まん、子が言ふ所の如くんば則ち畫らん者歟、予が曰く然あらず、三乘所趣の法躰は異なることなけれ共、但心に大小有るが故に差を爲すのみ、夫れ幻を以て幻を幻とするときは則ち幻とする所而も幻なるべし、幻を幻とするに、幻に非ざるを以てするが故に、幻なりと雖も、而も幻に非ず、是の故に涅槃經に曰く、善男子或は是色有り或は是色に非ず、非色と言ふは卽是れ聲聞緣覺の解脫なり、是色と言ふは卽是れ諸佛如來の解脫なり、善男子是の故に解脫も亦色亦非色なりと、菩薩從上來度門を谷響に設け萬行を空華に修す、前に謂ゆる種々の色像卽是淸淨の寶珠にして事理不二なる者なり、然りと雖も、若し幻化を識破せざるときは、則ち幻化上頭に復幻化を逐ふ、遂に其れが爲めに魅著せられて死に抵るまで脫すること能はず、是れ吾老師我が門寶珠を味す者の爲に痛く之を卻くる所以なり、豈又幻

界を信せざれば、信是れ邪なりと、凡そ諸經論中具に二行を明す、一には無念、二には有念、而も皆佛道を成ず可しと雖も、優劣懸かに殊なり、參禪辨道は卽ち無念無想の念佛なり、此を眞如三昧と謂ふなり、欣求淨土は卽ち存想計名の念佛なり、是を淨業を修習すと謂ふ、但能く不二に通達するを便ち眞の佛子と爲す、想ふに夫の之を兼ぬると云ふは、蓋し本を二にするが故なり、觀經に云く、諸佛如來は法界身なり、是心卽是れ三十二相八十隨形好なり、是心作佛是心是佛と又曰く佛身の高さ六十萬億那由多恒河沙由旬、彼の佛の圓光百億三千大千世界の如しと、如來誠諦の語、此に到つて內證を顯示す、其旨甚深なり、之れを名けて恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變の妙土と曰ふ、此くの如くの妙土、形相を以て莊嚴すべからず金珠を以て修飾すべからず、所以に金剛般若に曰く、若し菩薩是の言を作さん、我當に佛土を莊嚴すべしと、是を菩薩と名けず、何を以ての故に如來佛土を莊嚴すと說き給ふは卽莊嚴に非ず、是を莊嚴と名くと、又維摩經に曰く其の心の淨きに隨つて則ち佛土淨しと、果して此くの如くならば、參禪學道は豈是れ佛土を莊嚴するに非ずや、彼の元明の禪者自ら其の造詣の精しからざるを蔽はんと欲す、故に傅會して以て之を文る、甚しき者邯鄲の步みに過ぎざるなり、陽に之を慕ふ爲して陰かに之に悖る、又何ぞ取らん耶、世の佛を學ぶ者狐疑して之を能く正すこと莫く雷同して難を易に換るときは則ち如來の正法眼藏復た息むに幾し、思はざるべけんや、吾が師之を闢けて廓如たり、豈辯を好まんや、已むことを得ざればなり、客曰く幻化の法門我復何ぞ望まん、子が言ふ所の如くんば則ち畫らん者歟、予が曰く然あらず、三乘所趣の法躰は異なることなけれ共、但心に大小有るが故に差を爲すのみ、夫れ幻を以て幻を幻とするときは則ち幻とする所而も幻なるべし、幻を幻とするに、幻に非ざるを以てするが故に、幻なりと雖も、而も幻に非ず、是の故に涅槃經に曰く、善男子或は是色有り或は是色に非ず、非色と言ふは卽是れ聲聞緣覺の解脫なり、是色と言ふは卽是れ諸佛如來の解脫なり、善男子是の故に解脫も亦色亦非色なりと、菩薩從上來度門を谷響に設け萬行を空華に修す、前に謂ゆる種々の色像卽是清淨の寶珠にして事理不二なる者なり、然りと雖も、若し幻化を識破せざるときは、則ち幻化上頭に復幻化を遂ふ、遂に其れが爲めに魅著せられて死に抵るまで脫すること能はず、是れ吾老師我が門寶珠を昧す者の爲に痛く之を卻くる所以なり、豈又幻

化を撥無して眞實を證する者ならんや、龍樹大士の曰く、寧ろ有の見を起すこと須彌山の如くすべくとも、空見を起すと芥子許りの如くもす可からず、寡聞の比丘の如き、方等千部を受持して、生ながら陷墜することを得たり、當に知るべし幻化を除いて佛陀なく、幻化を離れて敎乘なきことを、儻し如幻の神力を滅盡して、下化の佛種を焦敗せば、縱令等正覺を成ずることを得とも、是咸顚倒の二乘爲り、佛道と迥かにし殊なり矣、諸佛の妙用の如きんば、感ずるときは則ち必ず應有り、應ずる所復感を爲す、感ずる所復應有るときは則ち此如幻の力に憑らずと云ふことなし、猶國を爲むる者凡民を救ふを以て本と爲すが如し、是を名けて億兆の君子と爲す、當に知るべし幻化は是れ佛界の大寶聚、幻化は是れ法門の大柱礎、菩薩の種子なり、諸佛の本命なり、然して之を現ずると之を卻くると、未だ嘗て妙處なくんばあらず、唯寶珠體得上自從して受用し將ち來り、幻化識破上自從して與奪し將ち去る者なり、豈亦容易ならんや、若し夫れ胡亂の禪者輕慢の白衣、道之れ學ばず敎之れ明めず大言放語して師の顰に倣はゝ未だ免れず、如來希有の威儀を誹謗し、老師血滴の親言に孤負することを、吾子夫れ是を思へ、客唯々として退く便ち答客難を作る

寛延四年未歳林鐘日

遠羅天釜續集開版緣由

遠羅天釜は、時平日用ふる所の茶銚也、何の義たるを知らず、而して取て以て此書に名く矣、此書は師が門徒と往復の簡語にして、其草稿、僉信宿を經ずして而して成る也、想ふに暗記の失必ず多からん焉、大方の學者、茶味あつて存することを識らば焉、何ぞ事故を以て爲ん哉、辛未の春、余播に之きて楠田某と邂逅す、余に謂つて曰く、子先きに鵠林老師の遠羅天釜を編すと雖、恨くは念佛の一書を缺けり、子若し之を補はゝ、願くは小財を捨てゝ以て梓費を助けんと、今秋京師の書肆田原吉田の二氏余に詣して、遠羅天釜舊板の正からざるを一新せんと乞ふ、余便ち之を可とす乃ち此の一本を副ふることを得て、且つ、豐、琅の二道友と之を筆し、之を校し、又之を區畫して以て之に授くと云ふ

寛未仲秋吉旦

慧梁謹識

參學某甲拜識

遠羅天釜跋

先佛の遺言、赫乎として三藏存し焉、乃祖の玄旨、炳然として五燈傳ふ焉、蓋、自利利他、自から然らざること能はざる也、於戲此の書の如きは明辨覿縷、先覩を墜さず、謂つべし未聞の聞也と、之を讃する則は、大虛に翳を生ず、之を謗する則は、巨海に漚を起す、余亦何をか言はんや、其れ或は諸を炬に附し、或は諸を紙に上す、其跡異なりと雖、其道一也何則、法門の威儀、唯此を是れ勤むればなり、向に近驛二三の白衣、余に語つて曰く、頃聞く、師、徒に示すの長書有りと、我嘗て覩覽便りなくして且つ謄寫に嫌あり、冀くば力を戮せて諸を梓に鋟め、以て住庵精修の諸子をして墨を吮るの勞を免れ令めん、余が曰く、善い哉、如し政有らば吾用ひずと雖、吾其れ之を與り聞かん、是に於て乎跋す焉、寛延己巳仲春、參學小比丘慧梁焚香稽首して芙蓉峰下に書す、

おたふく女郎粉引歌

女郎の誠とたまごの四角みそか〳〵のよい月夜

天ぢや〳〵と皆様おしやる。天の尤もいやでそろ。文のかず〳〵戀ひこがれても。わしは當座の花はいや。數の男の思ひもこはい、見目の好いのも氣の毒ぢや。器量よしめと譽めそやされて。男ぎらひの獨寢を。命取りめと皆様おしやる。わしは命はとらぬもの。那須の與一は矢さきで殺す。おふくが目もとで人ころす。かずの殿子はかぎりもないが。わしがいとしはたゝひとり。婆が粉歌は面白かろが。ふくがしらべは知りやるまい。知音どしなら歌ふもよいが。やぼな客には御遠慮めされよ。

歸命頂來七佛傳來。我等の親玉釋迦牟尼如來も。僅と聽くより首だけ肱り。戀にこがれて命も抛つ。肝心要の小歌の文句を。老男さん老女さん皆様聞ない。諸行は無常ぢや。是生滅法。生滅滅已で寂滅爲樂と。有つても知れぬで弘法大師が。いろはにほへとにさばいて置かれた。夫でもすめずば標木連坊主が。大小取雜せ喋舌るをき

かんせ。眞に浮世は墓ないものでな。人間萬物山でも川でも。日月晨辰竹木世界も。花咲きや散ります盈れば虧けます。生まれりや死にます。有るもの無くなる。それでも皆樣千年萬年。此の世に居るぞと思うてござろが。うろ〳〵する間に無常の嵐が。何處から來るやら俄に起ると。鬼とも組むよな剛毅な男も。天人見るよな美しい少女も。出る息一回止るが境で。最早傍へもよられぬ容だよ。そこで地水火風の四大は。元へ歸つて無くなるやうだが。さしひき殘つて一つの含藏識。一生なした善業惡業。これには本より形がないから。土にもならねば灰にもならねば。善業は善所へ惡業は惡所へ。幕が替りて衣裳を著けかへ。因緣次第で六つの衢の。天堂人間地獄や餓鬼趣や。牛にも成つたり馬にも成つたり。死んだり生きたり常まり無ければ。こゝの道理で諸行は無常ぢや。是生滅法と申したものだよ。是れでは透切安氣はならぬと。佛や菩薩の敎に隨ひ、精しく進で修行に身をいれ。貪瞋痴慢の根を斷枯して。六道生死の緣が切るれば。これが卽ち生滅滅已で。こゝに到ると此の身がこの世で。眞實無相の安閑恬靜。月を枕に虛空に安臥。華藏世界を一と目に見晴し。身心淸淨諸境も淸淨。寂滅爲樂と有るのはこれらだ。そこで夫から御釋迦や阿彌陀や。觀音地藏と肩臂ならべて。誓願度生の手船に棹さし。十方世界に神通遊化して。現世は勿論無始劫以來。父母兄弟伯父や伯母の。六趣に迷へる苦患を救うて。皆々安樂世界へ導き。生老病死の根も葉も拂うて。七寶莊嚴の臺に坐せしめ。百味の飲食自然と備はり。天の羽衣意のまゝにて。天人聖衆と尋常伴ひ。微妙の音樂耳をば慰め。五色の天華を詠めて遊ばせ。畢竟は佛にするぢやが。何と皆樣望はないかよ。眞更否でも無いならきかんせ。人々御所持の心といふ奴。これいと申してしつかと致した。目鼻も手足もごんせぬけれども。偖て〳〵自由なわろめでおちやるよ。佛も生み出す地獄も組みだす。それぢやて皆樣油斷はならない。前にも云ふ樣に無常な浮世で。老男さや老母さは云ふにも及ばず。若い達者な息子も娘も直に今夜が未來に成るやら。何うやら、斯うやら知らない身の上。浮假して居ちや不理ものだよ。否でも應でも忽ち此の世を。老も若きも振捨てゆくのを。承知で居ながら餘所目に見除けて。頭の顯から跟の趾まで。五欲を粧ふ心の相を。鏡に寫さば二目と見られぬ。千萬劫にも得難き身を受け。人間世界へ生れて出ながら。餓鬼修羅畜生地獄の振舞。起つにも居るにも名聞我慢で。朝から晩まで晩から朝まで。

高いも下いも財欲色欲。一心曇らにや明るい世界を。眞暗くら〳〵闇黒境界。本來阿彌陀と同體佛をば。十惡八邪の不淨をぬり付け。渾然漫爾汚して仕舞て。我と我手に地獄をこしらへ。而て皆樣御謂ます事には。惡事と申して人を殺さず。火付はせまいし盜は致さず。是等の外には有るまいなんど丶。口さき計の理窟はよけれど。見惑思惑の微細の樣子は。根ッから葉ッから御存知あるまい。設ひ知つても行作が惡けりや。眞逆の時節に用には立つまい。眞逆と申してどうした時なら。冥途の方から使の來た時。理窟でゆくなら何也斯也。言ひ分け斷り申して御見やれ。其の場に臨んで四も五も云はせぬ。時刻が移ると閻魔の目玉に。庇がつんでるなんと。と罵り。忽ち未來へ引立て行くぞや。其の時皆さん一から十まで。周章騷いで狼狽へ廻れど。泣くより外には仕樣もあるまい。夫から行く先や何うなる處ぢや。どうでも大概好事あるまい。自分の懷中自分に承知ぢや。御臍の下から算用して見て。心で意に意見を御謂やれ。藥を飲まない病人どもには。耆婆扁鵲等でも療治は屆かぬ。夫故佛も緣無き衆生は。濟度は成ぬの無佛性だの。何ぢやの角ぢやのと呵つて置かれた。無佛性とは如何なる人ぢやよ。斷見常見世智辯解怠の。因果の道理を辨へ無くして。三毒五欲の我ま丶放埒。釋迦の敎の十善五戒も。天照太神の六根清淨も。孔子の示しの五倫や五常や。懈著沒著に言ひ捨て見捨て丶。用ひぬ族を申したものだよ。是等の類が世間に多くて。夫故地獄が野多衢多繁昌。虎の皮をば褌に料めたる。赤鬼青鬼牛頭等や馬頭等や、目にこそ見えねど此の身に付そひ。如何なる貴き上々樣でも。船頭馬子等も長者も乞食も。惡心邪惡の重いか輕いか。具に殘らず鐵牒に記して。毎朝毎晩注進致せば。閻魔大王や十王其の餘の。冥官皆々集り給ひて。御評議極れば命を奪取り。娑婆の親子や六親眷屬。別れを哀しみ歎くも脈はず。さあ來た〳〵悲畏々々々〳〵。悲畏火の車に引立て乘せ行き。葬津河原で裸にひんむき。裙もさせずに跌で驅たて。閻魔の御前へ引据えますれば向に立たる淨波梨鏡に。娑婆に居た時身口意三つで。造つて置いたる罪業殘らず。分明的然うつりて見ゆれば右とも左ともいざこざ云はれぬ。そこで逐一吟味が了れば。夫々役目の獄卒等が請取り。一百三十六所の地獄へ。罪人共らを各々驅ひ行き。業風烈しき爐炭の焰で。天も焦る丶大流猛火の。うづまく鑊湯火坑を樗へて。逐込み投げ込み茹たり蒸たり。悉皆割木の燃未了見るよに。黑人まがひに焦たる體を。鐵棒につんざし

曳きづり出して。鐵の臼碓にて搗いたり抹いたり。大盤石にて背を壓したり。金箔打よに五體を打のべ。鐵作りの牛にも馬にも。犂曳かせて鋤わり耕し。或は獄門磔など丶て。銅柱に手足を打ちつけ。鐵爪鐵嘴の鴉等が。目玉も陰玉も突き啄み。其の外無量の呵責の模樣は。八寒八熱刀山劍樹や。叫喚衆合や黑繩血の池。逃ては出られず死ぬには死なれず。苦しみ號んで嘮々と泣く聲。天地にせまりて震動電雷。其が十日や二十日ぢや無いぞへ。百千萬劫晝夜も分たず。ちよつと憩する暇もないげな。眞に誠に話にするさへ。身の毛が竪つて戰慄とするよだ。何と皆樣怖はくはないかよ。扨て又修羅道や餓鬼趣の苦患や。畜生殘害驚怖の次第は。色々樣樣語るにや盡きせぬ。そこで其のよな責苦を受ぬる。罪科の族は此の世に居る時。如何樣どうした惡業を成したる。報であらうと思うてみさんせ。餘所の身の上計りぢや有るまい。卽人々心の樂屋は。弄玉つかひの手品を見るよに。右から左へ替るの早さは。有德高位の人前銜つて。慇懃叮嚀殊勝な目元も。主人や親へは不正な面つき。女房や子供に鼻毛を延すも。脇目に餘り阿房な樣だよ。金借る朝には地藏に化けたり。戻して呉れいと謂はる丶夕にや。閻魔も負賣出しそな怒面。瞬する間に總來と替りて。憍慢無作法人をば侮り。諂曲追從己を欺き。天道化育の心に背いて。殺生なんどは無慈悲の極頂。物の命で妻子を養なひ。口に嗜みて我身を娛しみ。設ひ手がけて殺しはせいでも。害ひ惱めて難儀をさせつ丶。苦しみ傷むを不便と思はず。渠等も親子や夫婦は有るのに。我身を抓つて痛さも知れぬか。向の患は厭はぬ身勝手。錢金持たねば人並ならぬの。浮世は渡れぬなんど丶心得。强盜逐剝壁さらないでも。算盤筆先不直のとり遣。滅多野多羅に强欲かはいて。神のものでも掠める分別。先祖や主君の御蔭も忘れて。一門朋輩犬猫まじはり。舅姑が白眼ば娶女が青髓。不實不孝の火と火を摺合ひ。惡口雜言無慚愧千萬。夫等が惚けて二張の弓曳きや。婦等も拵いで兩桝つかうて。ちよつと脇から燒付けられては。胸を燃して燒餅やきつ丶。火の手が上れば忽ち狂亂。折節額に角をも生して。縊溺死が榮でも有るまい。己が邪見が氣儘にならぬと。餘所の事迄讒言陰言。謗り謗られ互に腹だて。人をば落して自分が身揚り。我多彼此々々々々爭論諍。恚恨が募れば截たり伐たり。博奕遊俠亂酒に耽りて。親の命もちゞむる逆罪。何から何迄大膽而已。これらは皆々惡趣の種蒔。折角過去世に善事作したる。功德の果報で此の身は得たれど。

死ぬと未來は必定地獄ぢや。夫故佛はやれ〳〵ふびんや。一切衆生は皆是前世の父也母也恩ある族ぢや。何とぞ扶けて遣りたいものぢやと。泪をこぼして勞りたまへど。自業自得の罪科はのがれず。心の田地に蒔置く種ぢやで。萠切り生出て一粒萬倍。無間の苦患を受けねばならない。それが否なら今日今から。人間根性にきりかへ直して。神や佛や聖人君子の。教の道理を肯ひ辨へ。孝悌忠信獨を慎しみ。信心怠けず修行を仕ますりや。差して難儀な譯でもごんせぬ。魚類の中でも鯉とや申して。利發な奴めは禹門の瀧をば。一心勇猛勵んですゝめば。登りおほせて龍とも成るげな。狐も稲荷の鳥居を偪起。飄と飛越しや神にもなります。鳩めは苦空無常をとなへて。三枝の禮儀も見事に勤むる。雀はちう〳〵忠義を囀り。鴉は孝行反哺のやしなひ。折節見ながら御目にもとまらず。尋常聽ても御耳へ入らぬか。鳥類魚類や四つ足などにも。劣ると云はれちや一分立まい。眞から底から立たぬと知たら。憤激起して心入れかへ。歸崇三寶先祖を敬ひ。兩親舅姑に孝行第一。夫婦愛敬別義を守りて。昆弟友子の禮容親しく。親類朋友信をば闕さず。貧賤病苦の族を愍れみ分限相應家業を拵いで。國主領主の掟に順ひ。慈悲と正直勘忍三つを。自身に勤めや人まで見習ひ。教へず自然と道びき進ませ。上下諸共和らぎ睦びて。毎も莞爾笑うて暮せば。佛神天地の御意にも協うて。八百萬神梵天帝釋。大黒毘沙門御守り給へば。惡鬼邪神は何處かへ逃失せ。無病息災延命長久。天下は泰平五穀も成就。御家も榮えて善子も出來ます。猶又皆樣朝夕忘れず。摩訶般若や南無訶羅恒那や。南無阿彌陀佛や法蓮華經や。皆是れ無明の根を切る刀ぢや。口から出る聲御耳へ入るよに。諦々御となへなさると。煩惱妄想追々消えはて。自然と三昧發得しまして。念佛佛心佛心念佛。こゝを去らずに往生淨土ぢや。まだしも近路坐禪が何より。望みな御方は大善知識に。眞實篤り參禪しめされ。こゝでいうても盡いた牡丹餅。聽いた計りで御腹は飽れず。水も飲まねば冷暖知らない。六凡四聖も唯この一心。一心悟れば娑婆卽寂光。一心迷へば卽ち三途ぢや。返すゞも御油斷なさるな。今にも無常の嵐が起ると。暫時待つてと云ふ間はごんせぬ。次第々々に一時々々。後へは遠うなる前へは近なる。死で此身はどうなるかうなる。平生忘れず覺悟が肝心。諸佛菩薩の昔は凡夫ぢや。どうでも彼衆は覺悟がよかつて。萬德圓滿御成就したまひ。衆生濟度が御自由自在ぢや。然れば各々彼衆を見ならひ。寶の山にて空手を振

らずと。自分々々に覺悟を窮めて。渴に臨んで井戸掘せぬよに。希ふぞ皆樣この一大事を。聽分け嚙分け打捨ておかずと。菩提の道をば踏んごみ求める。御志をば發して給ねエ。

おたふく女郎粉引歌畢

白隱禪師自讃（口繪の和譯）

千佛場中千佛爲るの嫌
群魔隊裡群魔爲るの憎
今時默照の邪黨を挫いで　近代斷無の瞎僧を鏖にす
禿醜上醜を添ふ又一層　者般醜惡の破瞎

明治四十四年七月十日印刷
明治四十四年八月十日發行

定價十五錢
郵稅金四錢

校訂兼編輯者　來馬琢道
發行者　東京巢鴨町二丁目三十五番地　原子廣宣
印刷者　東京本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京巢鴨町二ノ三五　振替東京三一二二番　無我山房

複製不許

268
226

特18
30

白隱禪師
參禪要訣　遠羅天釜

国立国会図書館

019373-000-9

特18-30

遠羅天釜

来馬　琢道／校

M44. 8

ABG-0065